HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本中央アジア学会報，第18号，全1冊
Citation	日本中央アジア学会報，18
Issue Date	2022-07-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91634
Type	journal
File Information	JB018.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

日本中央アジア学会報

第18号　2022年

目　次

研究ノート

トルキスタンの地歴教科書（タシュケント、1918年）を読む・・・・・・・・・・・・小松　久男・・1

追悼

岡奈津子氏の研究業績・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・宇山　智彦・・26
――概観と一覧――

大切な奈津子さんに捧げる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ドスム・サトパエフ・・35
訳：宇山　智彦

岡奈津子さんを偲ぶ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・クアニシ・タスタンベコワ・・38

日本中央アジア学会2021年度大会プログラム・・42

日本中央アジア学会2021年度大会発表要旨

1960年代カザフ映画に映されるナショナル・アイデンティティ・・・・・・・・・・・・松元　晶・・45
――『テュベテイカをかぶった天使』を一例として――

カザフスタン非核外交の展開・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・加藤　優弥・・48
――核不拡散規範の受容から構築まで――

キルギスにおける農民組織の類型化と発展課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・星野　愛花里・・50

キルギス共和国の日本語学習者の留学経験と進路選択・・・・・・・・・・・・・・・・・・入山　美保・・52

ポストソビエト・キルギスの農村若年の高等教育への移行・・・・ローザ・トクトスノワ・・54
――追跡インタビュー調査を通じて――

1850年代清朝の対ロシア政策・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・楊　曦晨・・56
――伊犂通商条約締結の背景を中心に――

中央アジア絨毯コレクションの形成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・志田　夏美・・58
――帝政期およびソ連期の民族学的調査の比較――

日本中央アジア学会2021年度大会パネルセッション報告要旨

中央アジア・オアシス研究の今後 …… 小沼　孝博 ‥ 61
――堀直著『清代回疆社会経済史研究』の出版を記念して――

日本中央アジア学会2021年度大会公開パネルセッション報告要旨

マイノリティの歴史叙述 …… 秋山　徹 ‥ 63
――サルトカルマクの歴史書を翻訳して――

ソ連初期の「ウズベク人」創出におけるマイノリティ集団 …… 植田　暁 ‥ 65

マイノリティから汎テュルク主義のアクターへ …… 田村　うらら ‥ 67
――トルコにおけるユルックの現在――

書評

帯谷知可『ヴェールのなかのモダニティ
――ポスト社会主義国ウズベキスタンの経験――』 …… 菊田　悠 ‥ 69
東京：東京大学出版会、2022年、v+255+27頁

新刊紹介

シンジルト編『目で見る牧畜世界――21世紀の地球で共生を探る――』 …… 坂井　弘紀 ‥ 76
東京：風響社、2022年、161頁

中央アジア関連研究文献リスト2021 …… 78

投稿規定・執筆要領 …… 83

日本中央アジア学会会則 …… 89

JACAS BULLETIN

No.18 2022

Research Note

Some Notes on *A History and Geography of Turkistan*, Published in Tashkent in 1918 ····· KOMATSU Hisao ·· 1

Eulogy

Overview and List of Dr. Natsuko Oka's Research Achievements ····· UYAMA Tomohiko ·· 26

A Dedication to Dear Natsuko ····· Dosym SATPAYEV ·· 35
Translated by UYAMA Tomohiko

In memory of Dr. Natsuko Oka ····· Kuanysh TASTANBEKOVA ·· 38

Program for the 2021 JACAS Annual Meeting ····· 42

2021 JACAS Annual Meeting: Presentation Abstracts

National Identity in Kazakh Film in the 1960s: ····· MATSUMOTO Akira ·· 45
A Focus on *Angel Wearing Tubeteika* (Angel v Tyubeteyke)

The Development of Kazakhstani Nuclear Diplomacy: ····· KATO Yuya ·· 48
From Acceptance to the Construction of the Nuclear Nonproliferation Norm

Types of Agricultural Cooperative and Development Issues in Kyrgyzstan ···· HOSHINO Akari ·· 50

Japanese-Language Learners' Experiences and Career Choices in the Kyrgyz Republic ····· IRIYAMA Miho ·· 52

The Transition of Rural Youth to Higher Education in Post-Soviet Kyrgyz Republic: ····· Roza TOKTOSUNOVA ·· 54
Follow-up Interview Insights

The Qing Dynasty's Policy toward Russia in the 1850s: ····· YANG Xichen ·· 56
An Analysis of the Kulja Treaty Negotiation Background

The Construction of Central Asian Carpet Collections: ····· SHIDA Natsumi ·· 58
A Comparison of Ethnographic Research between the Imperial and Soviet Periods

2021 JACAS Annual Meeting: Panel Abstracts

Panel Session

The Future of Oasis Studies in Central Asia: ONUMA Takahiro 61
In Commemoration of HORI Sunao's *The Socio-economic History of Qing Huijiang*

Open Panel Session

Observations of Minorities' Historical Perception: AKIYAMA Tetsu 63
The Case of a History Book on Sartkalmak

The Role of Minority Groups in Building Uzbekistan in the Early USSR UEDA Akira 65

From Social Minorities to Pan-Turkism Actors: TAMURA Urara 67
The Present Condition of Yörük in the Republic of Turkey

Book Review

Chika OBIYA, *Seeking Modernity behind the Veil: Post-Soviet Experiences of Muslim Women in Uzbekistan*, KIKUTA Haruka 69
Tokyo: University of Tokyo Press, 2022, v+255+27 p.

New Book Information

Shinjilt ed., *The Pastoral World: A Photographic Analysis of Conviviality*, SAKAI Hiroki 76
Tokyo: Fukyosha, 2022, 161 p.

List of Publications in the Field of Central Asian Studies in 2021 78

Guidelines for Contributors 83

Statutes of the Japan Association for Central Asian Studies 89

研究ノート

トルキスタンの地歴教科書（タシュケント、1918年）を読む

小松　久男

はじめに

近代トルキスタンのムスリム知識人はどのような歴史を構想していたのか、これは興味深いテーマだが、これまであまり検討されてこなかったように思われる。ロシアによるコーカンド・ハン国の併合、そしてブハラ・アミール国とヒヴァ・ハン国の保護国化は、伝統的な王朝史という歴史叙述に大きな変化をもたらした。ブハラのアフマド・ダーニシュ（1827–97）やサーミー（1838/39–1907/08）のように著者による批判的な評価を表明したマンギト朝史もあれば、ターイブ（1830–1905）による人物・事件史もあり、とりわけコーカンド・ハン国の滅亡後にはさまざまなフェルガナ史が書かれている。これらは大きな変化と言えるが、著者たちの認識はなお諸ハン国の枠組みにとらわれていたようにみえる[1]。しかし、ロシアの1905年革命以後、ムスリムの定期刊行物が普及をはじめ、ジャディード知識人を中心に民族的な自覚が生まれるとともに、より広くトルキスタンという歴史空間を意識した歴史叙述への関心が高まってゆく。これは一面では、ロシアによる征服からおよそ半世紀を経てトルキスタンに一定の社会経済的、文化的な一体性が生まれた結果ともいえる。加えて、新方式学校[2]の普及とともに歴史や地理の教科書の必要性も説かれるようになった。しかし、第一次世界大戦からロシア革命へという激動の中で具体的な著作はなかなか生まれなかった。管見の限り、その最初の例はムフタル・バキルの『歴史と地理からみたトルキスタン地方』（タシュケント、1918年、176頁）である[3]。本稿は、この著作の内容を紹介・検討することによりトルキスタン史の構想と射程を明らかにすることを目的とする。なお彼の活動に関する先行研究として、筆者はウズベキスタンの研究者マディヤロワの研究［Мадьярова 2014］の

(1) こうした歴史叙述の動向については、［Allworth 1990: 122–130; Khalid 2004: 127–137; Бабаджанов 2010: 29–50］などを参照。

(2) 新方式学校については［小松 1996: 54–68; Khalid 1998: 155–183; 磯貝 2014; Ross 2020: 140–169］などを参照。

(3) 本書のコピーは20年ほど前に Stéphane A.Dudoignon 氏から恵贈を受けた。ここに記して感謝したい。

ほかは確認していない。

本稿では、まず背景として1910年代に始まるトルキスタン史への関心を概観し、ついで著者バキルの経歴と活動をたどったうえで、本教科書の紹介と検討に入ることにしたい。

1．トルキスタン史への関心

トルキスタン史への関心が語られるようになるのは1910年代のことである。その背景の一つには1911–14年に展開された民族名称サルトをめぐる論争があった。ロシア当局がトルキスタンのムスリム定住民に与えたサルトという公式名称ははたして適切なのか、いや適切ではない、そもそもわれわれはこの名を知らない、こうした問題提起から生まれた論争は、トルキスタンにとどまらず広くロシア・ムスリムの言説空間でも数々の議論をよんだ。これはわれわれは何者かというアイデンティティに関わる議論に他ならないが、論者は必然的に歴史のなかに論拠を求めることになった。歴史の探究は『クタドゥグ・ビリグ』や『バーブル・ナーマ』、ナヴァーイーの作品のような古典から悠久のテュルクの歴史に及んだ。論争自体は第一次世界大戦を前にして終息を迎えたが、歴史への関心はその後むしろ高まったように思われる[(4)]。

その一例はサマルカンドのジャディード知識人ハジ・ムイーン（1883–1942）が1913年初め『シューラー』に寄稿した「トルキスタンの忠告と要請」に見られる。サマルカンドの興亡を事例に、トルキスタンの再生と復興をよびかけた著者は、かつての文明と繁栄、テュルクの父祖たちの功績を描いた『テュルク・トルキスタン史』の編纂をよびかけていた［Ḥājī Muʿīn 1913: 10］。こうした関心をさらに進めて、近代教育における民族史の重要性という観点から具体的な問題提起を行ったのが、タタール人ジャーナリストのヌーシルヴァーン・ヤウシェフ（1886?–1917）であった[(5)]。1914年6月『トルキスタンの声』紙に寄稿した「トルキスタン史」で、彼はこう述べている。

> 民族の学校で読まれるための民族史教科書の必要性は周知のことである。どの国民も民族も学校ではまず自分たちの歴史を学ばせている。初等学校の目的とは、母語を教えて自分たちの文学に親しませ、幼い児童の柔らかな心に民族と祖国への愛を育むこと、また民族の言語、文学そして歴史によって彼らの心を開化させることにある。この愛の種を育てて児童の民族意識を高め、彼らを真の民族への奉仕者とするには、民族の歴史を教えることが必須である。したがって先進的な国民は、自国の歴史をことのほか重視している。歴史学を重んじるのみならず、歴史学者や歴史家も敬服してやまない。しかし、遺憾なが

(4) この民族名論争については［小松 2022］を参照。なお本節はほぼこの第4節からの抜粋である。

(5) ヤウシェフについては、［大石 1998; Brophy 2016: 135–137］を参照。

らわがトルキスタンにおいては今に至るまで「歴史」が重んじられることはなかった。初等学校のための民族史の教科書（トルキスタン史）は書かれたことがないのである。

そのためだろう、我々の学校に学ぶ生徒にも卒業生にも民族の精神や意識は欠けており、心底から民族のために奉仕している者も見られない。

彼が想定しているのはまさに国民教育のための歴史教科書であり、このような発想は当時としてはじつに斬新であったにちがいない。しかし現実はどうか。彼は続けて言う。教師たちは歴史の重要性を知り始めているが、「教科書がないために生徒に教えようとしてもできないのである」、だとすれば「他のことには一切かまけることなく、寸刻も無駄にせず、すみやかにわれわれの学校のために『トルキスタン史』を書かねばならない。さて、これを書くのはだれか？ この問いにはわれらがカーリー［コーラン詠み］や識者 ziyālilarimiz に答えてもらおう」と［Yāvshev 1914: 1–2］。

ヤウシェフはトルキスタンの知識人に奮起を促しているかのようである。これに対してサマルカンドの指導的なジャディード知識人ベフブーディー（1874–1919）は、翌月自らが刊行する雑誌『アーイナ』に「トルキスタン史が必要なり」と題する論説を書いて応答している。

歴史はきわめて重要かつ有益なものである。歴史からは、ある民族がどのようにして発展したのかを学んで教訓を得る、あるいはある民族がどんな理由で衰退し、しまいには滅亡してしまったのかを学んで、ここから教訓を得ることもできる。［中略］

［しかし］今もわれわれトルキスタン人は、父祖たちの事績もトルキスタンの歴史的な出来事についてもまったく無知なままである。なぜならトルキスタン史について新しい研究に基づいた体系的で有用な著作はいまだに書かれていないからだ。実のところ、このような歴史を書く人材がテュルクの中から出ていないのは、テュルクの子らが不肖であり、真正の息子ではないことの証左である。［中略］

『トルキスタンの声』紙に「われわれの民族史は誰が書くのか」という趣旨の論説が載った。思うにこのような歴史を書くのは極めてむずかしい仕事であり、いまこれを実現するのはわれわれの手に余るようだ(6)。したがって、この仕事はトルキスタン史に親しみ始めた若き歴史家、アフマド・ザキ・ヴァリディ氏の手腕に期待している［Behbūdī 1914: 898］。

(6) ベフブーディーの躊躇いは率直な告白と思われる。当時の知識人が理解する歴史とは、先述のようになおハン国史の枠組みが残るものであり、さらに歴史教科書を執筆できる人材も限られていた。それでもハジ・ムイーンやベフブーディーがトルキスタン史の必要を訴えた背景には、サマルカンドの地域的な特性があったかもしれない。1868年ブハラ領からロシア統治に委ねられてから久しいサマルカンド地方の知識人は、ハン国史の枠組みからは相対的に自由であり、ここにトルキスタンを全体としてとらえる発想が他に先駆けて芽生えた可能性がある。

こうしてベフブーディーは、気鋭の歴史家ヴァリドフ（後のトガン、1890–1970）に『トルキスタン史』の執筆を託している。たしかに彼はすでに『テュルクとタタールの歴史』（カザン、1912年）を上梓して内外の注目を集め、バルトリドらロシアの東洋学者からも将来を嘱望されていた［小松 2018: 34–37］。これはカザンのカーシミーヤ・マドラサ講師でもあったヴァリドフが講義のために準備していた教科書「テュルクの歴史」をもとにしており、彼が構想していたテュルク全史の前半部をなしていた。彼の『回想録』によれば、これを読んで強い感銘を受けたコーカンドの知識人ユーヌスジャン・ダーデ・アガリク（1884–1937）は、著者にトルキスタン史の増補を提案して協力を約束し、自らもテュルク史の著作(7)をものしたという［Togan 1969: 107–109］。

このようにトルキスタン史、とりわけ学校教科書としてのトルキスタン史への関心は高まりつつあったが、ロシア革命以前にそれが具体的な著作に結実した例は今のところ知られていない。管見の限り、その最初の例は本稿でとりあげるムフタル・バキルの著作である。

2. 著者について

ムフタル・バキルは1887–89年ころ、オレンブルグ地方の村にタタール人のイマームを父として生まれ、母も教養人であったという。両親がしばらくイスタンブルに暮らしたため、彼もそこで初等教育を受け、帰国後にオレンブルグのキャラヴァンサライ・マドラサ、ついでカザンの名門校カーシミーヤ・マドラサ(8)に学んだ。その後オレンブルグで高名な学者からハディース学を学び、マドラサで教えることもあったらしい［Мадьярова 2014: 43］。やがて彼はヒヴァに赴く。『ワクト』の伝える情報によると、ヒヴァのサイイド・イスファンディヤール・ハンは即位の2年目（1911年か）に宮廷の高官たちの子弟を教育するために数名の教師を招聘し、皇太子を含む20数名の生徒の教育をロシアから招いたムフタル・バキルに委ねた［Ramaḍān 1914: 2］(9)。この間の事情について、彼は自分の名前は出さずに、本書の中（ヒヴァ・ハン国の教育の項）で次のように説明している。

(7) この著作がどのようなものであったのかは、出版の有無も含めて不明である。なお、同時期にトルキスタン総督府の発行する現地語新聞『トルキスタン地方新聞』の副編集長を務めていたムッラー・アーリム・マフドゥーム・ハジの『トルキスタン史』（タシュケント、1915年）が刊行されている。これはブハラ・ヒヴァ両ハン国の歴史と半世紀に及ぶロシア統治下での変化も記しているが、事実上はコーカンド・ハン国史であり、ジャディード知識人がめざしていた民族史とは異なる。この著作については［Бабаджанов 2010: 42–45; Агзамходжаев 2021: 75–76］を参照。

(8) このマドラサについては［Ross 2020: 155–157］を参照。

(9) この記事は『テルジュマン』にも転載され（*Terjumān* 75 (1914.4.3): 2–3）、ロシア・ムスリムの間により広く知られることになった。バキルのヒヴァ招聘については、［Togan 1942–47: 260］も参照。なお、ヒヴァにおけるタタール人教師の活動については、アブデュルレシト・イブラヒムが主筆を務めるイスタンブルの『イスラーム世界』誌も報じていた（“Hive’de maarif,” *İslâm Dünyası* 22 (1914.2.25): 367）。

ヒヴァに最初の新方式学校を開くためにオレンブルグの故アブドゥルガニ・バイ・フサイノフが1898年オレンブルグから一人の教師を派遣した[10]。その後、1904年に最初の新方式学校を開くべくムハンメディエ・マドラサからテュルク・タタール人教師を招聘したのはウルグ・メフメト・マフラム（神の恵みあれ）である。また現在の君主サイイド・イスファンディヤール・ハン陛下が皇太子のときに自費で新方式学校を開いてムハンメディエ・マドラサから教師を招き、最後に1910年に大宰相のサイイド・イスラーム・ホージャ閣下がオレンブルグから教師を招いて新方式学校を開き、自らもイスラーミーヤという名の見事な学校を建てられた。現在ヒヴァ国には10校の新方式学校があり、テュルク・タタール人教師が運営している［Bakir 1918: 168］。

つまりバキルは、ロシアの保護国ヒヴァのイスファンディヤール・ハンと大宰相イスラーム・ホージャが共同して進めた改革プロジェクトの一環として宮廷に迎えられたことがわかる。ヒヴァの新方式学校については、「海の一滴」ほどに少なく、しかも一部は政府高官の手中にあるため、事実上なきに等しいという同時代人の批判もあったが［ʿUthmānī 1912: 559］、バキルは前向きに取り組んだようである。彼の仕事ぶりは1913年2月、在ホラズムの教師ムフタル・バキルの名前で『シューラー』に寄せた一文「民族のための依頼」からうかがうことができる。これはトルキスタンの教師、とりわけ新方式学校の教師に宛てた4項目の質問書であり、要約すると以下の通りである。

1. トルキスタンのテュルク・ウズベク生徒の初等教育で読み書きを教えるにあたり、書体はナスフ体（北のテュルクの刊行物で使われるタタール・アルファベット）とトルキスタン人が慣れ親しんでいるタアリーク書体（石版刷りのアルファベット）のどちらが適切か。
2. ナスフ体でよしとしても、トルキスタンの学校でタタール語の読み書き教科書を使って教えるのはむずかしくないだろうか。言語や方言の違いはどのように調整すればよいか。
3. トルキスタンで使用する読み書き教本はナスフ体で、かつテュルク・ウズベク語で新たに作成し、続いて同様な読本を準備するのが適切ではないだろうか。
4. トルキスタン人用の教科書ではどの正書法がふさわしいだろうか。トルキスタンの慣用に従うか、それとも『シューラー』や『ワクト』、『ヨルドゥズ』などで使われている新しい正書法がよいか。とくにシャッダやファトハ記号付きの文字はどう書けばよいか。これらの問題は、ロシア・ムスリムの観点からはさほど重要ではないが、トルキスタ

[10] このタタール人豪商と親交のあった前記のイブラヒムも「故人の会合では教育以外のことは話題にならなかった。ヒヴァやウルゲンチにも教師を派遣したと語っていた」と回想している［Sheref 1913: 134］。

ンで教育にあたる者にとってはいつも苦労するところである。そこで経験ある教師諸兄のご意見をお聞かせ願いたい［Bakir 1913: 122］。

この投書はトルキスタンに着任したタタール人教師の直面した実践的な問題を率直に提起したものであり、バキルが真摯な教師であったことを物語っている。ちなみにこの投書から4ヶ月後、『シューラー』はいずれもトルキスタン現地での教歴を有する3名の回答をまとめて掲載した。第1の書体についてはロシア・ムスリムの定期刊行物で広く用いられているナスフ体が支持されたが、ホラズムの教師は現地での必要性に鑑み、2年次以降はタアリーク体も教えるべきと指摘した。また、第4の正書法については、現地での慣用に従うべきとする意見と、それではガスプリンスキー氏が30年来唱えている言語の統一論に背くという意見とが対立することになった［*Shūrā* 13 (1913.7.1): 403–405］。文章語の問題は1920年代まで続く難題であったが、バキル自身は母音の判読が容易な正書法を採用している。

ロシア二月革命が起こると(11)、彼は青年ヒヴァ人に与してハン国の改革に尽力したと推定される。青年ヒヴァ人は新設の政府と議会で優勢を占めたが、まもなく反動派が巻き返し、これにヨムト・トルクメンの反乱が加わってヒヴァの政治情勢は混迷に陥った。こうしたなかでバキルは1917年6月末ヒヴァ・ハン国の新ウルゲンチ住民代表としてペトログラードで開かれた全ロシア・ムスリム評議会の会議に出席し、ヒヴァの情況を説明するとともに支援を要請している［Исхаков 2019: 256–257, 265, 268–269］。しかし、おそらくヒヴァの情勢が悪化したためだろう、彼は活動の場をタシュケントに移した。これは彼の兄カビル・バキロフ（1885–1944）がタシュケントのタタール人組織「イッティファーク」のリーダーとしてムスリムの自治運動を先導し、新聞『ウルグ・トルキスタン』（1917年4月–1918年11月）の編集長を務めていたこととも関係していただろう［Исхаков 2004: 273, 303］(12)。ムフタルは早くから同紙で革命家の気風もあらわに健筆をふるい、トルキスタン自治をめざす運動に邁進した。

十月革命後、コーカンドにトルキスタン自治政府が成立した翌月、バキルが同紙に寄稿した論説「トルキスタン自治とトルキスタン人」では、圧政からの解放と自立の達成という自治宣言の歴史的な意義を宣揚し、「これは幻想ではなく現実だ」とする一方、現下のアナーキーな情況の中で自治を確立するのは容易なことではなく、新しい国作りのためには財政制度の確立から、商工業の振興、土地・水利問題の解決、通信・交通の整備、裁判・宗教・厚生業務の監督、保安機関の設立、教育委員会の組織、憲法制定まで遠大な課題が待ち受けている

(11) ロシア革命期のムスリム地域の動向については［宇山 2017］を参照。

(12) なお、本書の発行者は、「K. M. バキロフ兄弟とその会社・商会」であり、兄弟はそれなりの資産家であったと推定される。

と指摘する。われらトルキスタン人が自治を実現するには党派や階級の違いを超えた連帯と自覚が不可欠であり、他国の人々にわれわれの有する自治の能力を示さねばならない。100人中わずか20人しか自治の真の意味を理解していないなか、物書きや説教者は読者や聴衆に、教師やムダッリスは生徒に自治の価値をわからせなければならいと説く［Исхаков 2019: 439–441］。

1918年1月の論説「沈黙」では自治政府の布告や計画がロシア語の公報で伝えられていることを批判している。曰く、テュルクの揺籃の地、ナヴァーイーやバーキルガーニーらが輩出したトルキスタンで、その公報が人口では5%にすぎないロシア人の言語で発行されているのは許しがたい。われわれは、非ロシア語で統治することはできない、ロシア語なくして科学と文化の発展はあり得ないという先入観から抜け出していない。ロシア人は本心では自治政府に服することをよしとせず、ボリシェヴィキに至っては自治政府を認めていない。賢き祖先たちの曰く「ロシア人と仲良くするなら斧を忘れるな」と。テュルクには公報を担えるすぐれた文章語があり、書き手がいる。統治の法にはチンギスやティムールのヤサがあった。今はロシア語・テュルク語の翻訳者がいる、と［Исхаков 2019: 462–464］。ここには言語ナショナリズムが横溢している。

続く論説「われわれはいつ人となるのか」では、全土にアナーキズムが広がり、自治が内外の脅威にさらされ、異常な物価高と飢餓が猛威を振るっているときに、ウラマー衆がカーディーの選任など利己的な目的のために抗争し、不和を煽っていることを批判する。曰く、思えばイスラーム共同体を襲った最初の災厄も［第3代カリフ］ウスマーンの選任が残した禍根であった。今は党派に分かれるときではなく、テュルク・ムスリムとして団結すべき時である。アッラーと預言者がわれらに団結を求めている以上、不和の道を開くウラマーはシャリーアの侵犯者にほかならない。さらに正当な自治政府に敵対する行為は最大の罪であり、かのハワーリジュ派に匹敵する、と。ウラマー批判を主眼としたこの論説にはイスラームの論理が目立つが、最後は「偉大なるタンル［テュルクの上天神を想起させる神］」にテュルク国の発展への助力を求めて終わる［Исхаков 2019: 466–467］。行間からは自治政府の直面する危機への懸念をうかがうことができる。中でも最大の脅威はロシア全土で横暴をきわめるボリシェヴィキであった。1917年の末、彼はこう書いていた。「自治はあらゆる面で危機にある。自治の確立には内外ともに多くの敵がいる。とりわけ現在政権を握るボリシェヴィキはトルキスタンになんとかして無秩序を作り出そうとしている。貧者と資産家、農民と商人、青年党とウラマーの間に不安や敵対の種をまこうとしているのだ」と［Мадьярова 2014: 48］。

はたせるかな、トルキスタン自治政府は1918年2月赤衛隊とアルメニア人部隊の攻撃を受けて崩壊し、コーカンド市街は廃墟と化した。バキルが本書を擱筆したのは同年5月のことである。本文には後述するように自治政府の崩壊と翌月の青年ブハラ人と赤衛隊によるブ

ハラ革命の挫折（コレソフ進軍の失敗）までが描かれ、さらに1918年4月初めタシュケントのバラクハン・マドラサの学生がトルキスタンで初めてマドラサ改革の要望書を提出したことにふれている［Bakir 1918: 77–78］[13]。したがって、彼はロシア革命と内戦という激動のなか、自らも革命運動を担いながら本書を書き進めていたことがわかる。これはこの歴史教科書にまれに見る迫真性を与えることになった。自治政府の崩壊後、彼はタシュケントの指導的なジャディード知識人ムナッヴァル・カリ（1878–1931）の発案した人民大学 Halk Dorilfununi[14]の創設メンバーに加わり、1918年5月の開校後は大学執行部で書記長を務め、同名の学術・経済・文芸新聞（ソヴィエト期で最初のウズベク語新聞）の編集にもあたった。そして1918年7月、サマルカンド州にも人民大学を開設するためにベフブーディーを長とする特別委員会が設置されると、バキルもこれに参画してタシュケントでの経験を伝授した［Холбоев 2003: 52, 62, 64］。しかし、その後の消息は杳として知られていない［Мадьярова 2014: 48–49］[15]。

彼の人物像をまとめれば、ヤウシェフと同じく「テュルクの祖地」に深い憧憬をいだき、トルキスタンの教育改革と自立に献身したジャディード知識人ということができる[16]。出自はタタール人だとしても、トルキスタンにおける長い活動歴とテュルク主義の立場からすると、彼はこの地歴教科書を異邦人ではなく同胞として執筆したと推察される。トルキスタンのジャディード運動は当初からタタール人とのいわば共同プロジェクトの側面をもっていたが、彼もまたその一員に数えてよいだろう。

---

(13) この件についてサマルカンドの新聞は『ウルグ・トルキスタン』からの転載として次のように伝えている：ロシアの大革命は、タシュケントのマドラサの虐げられた学生たちをも怠惰の眠りから目覚めさせた。マドラサを改革して［旧来の］ムダッリスや助手たちを時代にふさわしい進歩派や有能な学者に替えるべく真剣な闘争が始まったのである。タシュケント一の名門とされるバラクハン・マドラサのムダッリス職について異論が出され、それは他のマドラサにも波及しはじめた。この紛争は10日間で社会革命の様相に転じた。反動派が異論派を「ジャディード、無神論者だ」と呼べば、異論派は彼らを「詐欺師、裏切り者」と呼び、双方の間に激しい闘争が始まった。これがいかなる結末を迎えるかは神のみぞ知る（*Hurriyat* 86 (1918.4.22): 4）。

(14) ちょうど1918年5月に開校された人民大学は、初等学校、職業学校、師範学校の3段階からなり、教員数は180名、師範学校ではフィトラトも母語を教えたという［Мунаввар Қори 2001: 8–9］。『人民大学』紙によると、出自や階級の別なく意欲ある学生を受け入れて知識や技術を教え、社会に有為で自立した人材を育成する人民大学の発想はアメリカ合衆国に生まれ、ヨーロッパを経由してモスクワのシャニャフスキー人民大学（正式名称は Московский городской народный университет имени А. Л. Шанявского、1908–18年）に継承され、ロシア革命後に同種の大学がニジニ・ノヴゴロド、カザン、トムスクにも生まれたのち、ロシア知識人によってトルキスタンに伝えられたという。タシュケントではまずロシア人、ついでムスリムの人民大学が開かれ、その傘下でいくつもの学校が機能していた［Холбоев 2003: 51, 64, 100–101］。なお、この人民大学は現在のミルザ・ウルグベク名称ウズベキスタン国民大学の前身と見なされている。

(15) このようなバキルの経歴は、ムスリム・コムニストをはじめソヴィエト体制下で活動を継続したジャディード知識人と軌を一にしている［Khalid 1998: 287–297; 2015: 90–116; 小松 1996: 166–168］。

(16) トガンもトルキスタンで新しいウズベク文芸の発展に貢献した「カザン・テュルク」の一人としてバキルを評価している［Togan 1942–47: 504］。

3．本書の構成と内容

執筆意図　著者の執筆意図は緒言に明確に記されている。曰く、

今日にいたるまでマクタブ・マドラサ教師の一番の悩みは、ルカヴォーツトヴォ＝指導書として有用な、すなわち学術的な教科書を欠いていたことである。とりわけトルキスタンの歴史と地理を解説したテュルク語の著作がないことは大きな欠陥であった。［中略］トルキスタンの自然の豊かさ、植生と動物、人々の暮らしと生業、綿花や果樹の栽培、養蚕などの重要な生業について人を満足させる説明がなされたことはない。［中略］

こうした現状に鑑み、私はトルキスタンに関するイスラームおよびヨーロッパ文献を参照し、またムスリムの雑誌や新聞紙上でトルキスタンについて書かれた学術的、社会的な論説をたよりに、意を決してテュルクの学校にトルキスタンの地理と歴史の教科書あれかしとこの著作をものした次第である。

じっさいトルキスタンについてヨーロッパ諸語ではきわめて多数の（ロシア語だけでも300点以上）著作が出ているのに対して、テュルク語では一つもないではないか。われわれテュルクはなんとも恥ずべきことに、自分の郷土について自分で調べる代わりに外国人から教わっているのだ！さらに悔しいことに、われわれはヨーロッパ人にどんな著作があるのかも知らない。白状しなければならないが、ヨーロッパ人はトルキスタンにおける研究や探査によってテュルクに偉大な貢献をしてきた。地中に埋もれていたテュルクの遺物を発掘し、忘れられかけていたわれわれの文明と伝統をよみがえらせ、テュルクの文明を全世界に紹介したのである。このような貢献にはどれほど感謝しても足りないことだろう。しかし、ヨーロッパ人のテュルクと学問に対する偉大な貢献をたたえるとしても、彼らの著作に書かれていることのすべてを真実として受け入れることはできない。学術と科学の面で大きな価値を有する著作であっても、その一部には民族とイスラームの観点から真実に反することがらが書かれており、著者が偏見や［自身の］民族的な感情にとらわれていることもある。これらの文献を参照するにあたっては、この点に格別の留意をしたことをあらためて記しておかなくてはならない。

本書はトルキスタンの地理と歴史に関する最初の試みであり、したがって不備があることはもちろんである。本書を学校での指導書として使われる教員諸氏におかれては、使ってみての感想や批判をよせてくださることをお願いしたい。

神助によりて

ムフタル・バキル　タシュケント　［1］918年5月　［Bakir 1918: 2］。

このように著者はテュルク主義の旗幟を鮮明に掲げながら、トルキスタンの地歴教科書の欠を塞ぐために執筆を決意したと述べ、本書の意義を宣明している。ヨーロッパ人による東洋学の成果を評価しつつ、批判的な目で見ることの必要性を説く姿勢は冷静であり、本書を利用する教員たちに向けた謙虚な言葉は、数年前『シューラー』誌上で読み書き教育の実践的な課題について問いかけを行った真摯な教員の姿に通じている。言語はもちろんテュルク語である[17]。なお、本書に地図などの図版はない。

参考文献　続いて著者は執筆にあたって参考にした文献を示しているが、書名の一部か著者名を列挙するにとどまっている。確認できる参考文献を挙げてみると、テュルク諸語では、アブルガーズィー・バハドゥル・ハン『テュルクの系譜』、メルジャーニー『カザンとブルガルに関する情報の集成』（カザン、1885年）、ハサン・ガタ・ガバシー[18]『詳説テュルク民族史』（ウファ、1907年）、『ヒヴァ旅行記』（J. A. MacGahan, *Campaingning on the Oxus and the Fall of Khiva*, London, 1874のオスマン語訳、イスタンブル、1875年）、メフメト・エミン『中央アジア旅行記』（イスタンブル、1878年）[19]、シェムセッティン・サーミー『歴史地理事典』（イスタンブル、1889–1898年）、ペルシア語ではナルシャヒー『ブハラ史』（新ブハラ、1894, 1904年）、『アミール・ティムール』[20]など、ロシア語ではИ. В. ムシュケトフ、Д. Н. ロゴフェト、Г. И. ダニレフスキー、И. И. ゲイエル、К. К. アバザ、М. В. グルリョフ、Н. パヴロフ、Н. П. オストロウーモフ、А. シショフ、Н. С. ルィコシン、М. В. ラヴロフ、В. И. ユーフェレフ、В. Л. タゲーエフら、トルキスタンの地理、地誌、東洋学、農業などの研究で知られる著者名を確認できるが、個々の著作を特定することはむずかしい。また、このリストには当時利用が可能だったはずの前述のヴァリドフの著作やトルキスタンの詳細な地誌として有名なВ. И. マサリスキー編『トルキスタン地方』（サンクト・ペテルブルグ、1913年）などは見えない。しかし全体としてみれば、まだ誰も書いたことのないトルキスタンの地歴教科書を書くにあたって著者が周到な準備をもってのぞんだことは疑いない。バキルは歴史学や地理学の専門的な教育を受けたわけではないが、一人の教員として務めを果たそうとしたと推測される。

総説　本書は目次を欠く。全体を見ると、総説と地方ごとの各論（トルキスタンの5州とブハラ・ヒヴァ両国の全7章）に分けることができる。いずれも地勢、気候、水系、植生と動物、住民と人口、ロシア人の到来、産業と生業、教育、行政、史跡や主要な都市などの項目ごと

(17) マディヤロワは、平易でわかりやすい言葉で書かれているとしているが［Мадьярова 2014: 50］、タタール語の要素は濃厚であり、生徒の理解には教師の手助けが必要ではなかったかと推察される。

(18) 彼については［Farkhshatov-Isogai 2020］を参照。

(19) 本書については［佐々木 2008］を参照。

(20) これは石版刷りの刊本『ティムール・ナーマ：ペルシア語全集』（タシュケント、1913年）の可能性がある。この刊本については［Sela 2011: 33］を参照。

に解説を加え、そのため重複するところもある。以下、地理の解説は基本的に省き、歴史と文化、民族、社会、教育などを中心に本書の内容を紹介することにしたい。

総説の冒頭で、トルキスタンは中央アジアに位置する大きなくにであり、行政の面で東トルキスタン、西トルキスタン、そしてアフガン・トルキスタンの3部からなると説明するが、東トルキスタンとアフガン・トルキスタンに関する解説は簡略であり[21]、ただちに本題の「19世紀半ばにロシアの支配下に入ったテュルクの住むロシア領トルキスタン」の総論に進む。ここで著者は地理と民族の概観に続いてトルキスタン史の概説を述べており、要約すると以下のとおりである。なお、記述には少なからず誤りも見られるが、原文のままとする。

古代の定住民や遊牧民はアーリア系といわれ、現代のタジクはその末裔である。紀元前の昔、テュルクが彼らを駆逐したが、黒海とカスピ海沿岸で遊牧していたスキタイやサカ、アラル海からバルハシ湖にかけて遊牧していたマッサゲタイ・テュルクにはアーリア系の血もまざっていたという。紀元前330年に中央アジアを征服したアレクサンドロスは、フジャンド近郊に「遠隔のアレクサンドリア」という都市を建て、ソグド地方も支配したが、ギリシア人の統治は長くは続かなかった。その後、東方から月氏、次いでフン・テュルクが現れて大きなカガン国を建てた。3世紀初めにフンが滅ぶと非テュルクの柔然や鮮卑がテュルクのくにを支配したが、6世紀になるとフン・テュルクの末裔が突厥あるいはオグズの名で出現し、トルキスタンをあらたに征服して大オグズ・カガン国を建てた。その文化的な貢献は大きく、最古のテュルク語アルファベットを作ったのはこのオグズ・テュルクである（ビルゲ・カガンとキョルテギンのオルホン碑文に刻まれている）。

その後イスラームを信奉するアラブの征服がトルキスタンに及び、714年クタイバ・ブン・ムスリム指揮下のアラブ軍はソグドとブハラを征服した。アラブはテュルクの間にイスラームを広め、古来のテュルク文化に代わってアラブ・イスラーム文化が成立した。10世紀以降、テュルクのガズナ朝やセルジューク朝がトルキスタンに君臨し、スルタン・マフムードやマリクシャーらの名君が出た。しかし、12世紀になると東方でタタール・モンゴルが台頭し、13世紀初めチンギス・カン指揮下のモンゴル軍がわずかの間にトルキスタン全土を征服し、モンゴル・テュルクの地にとどまらず中国、インド、イラン、さらに東ヨーロッパにおよぶ未曾有の大国家を建設した。ここで著者はモンゴル帝国について注を付し、大征服の概要とチンギス没後の諸ウルスの分立、カラコルムに座す大カアン ulugh qaān の威勢やクリルタイなどについて説明を加える。なお「シル川とアム川の間、東及び中部トルキスタンの地域がチャガタイ・ウルス Jaghatay khanning ulusi」であり、ロシア諸侯は大カアンの勅令によって

[21] 簡略とはいえ、東トルキスタンとアフガン・トルキスタンを本来のトルキスタンの一部とみなすのはベフブーディーと同じであり［小松 1996: 121-122］、ヤウシェフも東西トルキスタンを一体とみなしていた。こうした同時代人の地域認識はあらためて検討するに値する。

はじめて地位に就けたと記す。

モンゴルは長くトルキスタンを支配したが、トルキスタン人に影響を及ぼすことはなく、むしろ文化的にはより高度であったテュルクに同化した。モンゴル軍はトルキスタンに大きな打撃を与えたが、征服に向かった都市が降伏すれば危害を加えず、降伏しなかった場合も学者や職人、医師らをモンゴリアに連行して仕事に就かせた。総じてチンギス・カンは分裂していたテュルクを統合し、その間に学問と技術の普及を促すことによってテュルクの文化に多大の貢献をした。その後テュルクのくには分裂し、トルキスタン東部はチャガタイ・ハン、南はフレグ・ハンの一族、シル川およびアム川流域はシバン・ハンに属して個別に統治されるようになった。

チャガタイ・ウルスで諸勢力が乱立するなか、頭角を現したのがテュルクの偉大な統率者として知られるティムールであり、分裂したモンゴル帝国から新たなテュルクの政権を樹立した。著者はティムールの輝かしい戦歴を紹介したうえで、テュルクの君主のなかではもっとも精力的で勇猛な君主であり、教育は受けずとも聡明でテュルクの歴史や慣行に通じ、語学にも優れていたと評価する。ただし敵に対しては容赦なく、その苛烈さはモンゴルにまさった。しかし、一方でイスラームおよびテュルク文明の発展に大きく貢献し、サマルカンドをはじめとする多くの都市を壮麗なモスクやマドラサなどで飾るとともに、イスラームの学者には敬意をはらい、彼らを保護したと記す。このように著者はティムールの二面性を認めつつ、その偉大さを評価するのである。

これにティムール朝の後を襲った「ウズベク」の項が続く。すなわち14世紀金帳汗国Āltun ordaの君主ウズベク・ハンはイスラームを受容し、配下のテュルク諸部族にイスラームを広めることに努めた。こうしてイスラームを受容したテュルクは、シャーマニズムのテュルクや他のウルスのテュルク・モンゴルと自分たちとを区別するために、すなわちウズベク・ハン配下のムスリム・テュルクという意味でウズベクと自称した。これがやがて民族の名称となる。15世紀に強大化したウズベクは、アラル海方面から南下して先住のチャガタイ・テュルクと融合し、チャガタイ語を話す一民族を形成するに至った。ウズベクはかつてトルキスタン全土を支配したが、強力なハン国を形成するには至らず、小国に分裂して相互の抗争を繰り返した。おもなハン国は、ブハラ、ヒヴァ、コーカンドの3国である。ブハラの君主アミール・サイイド・アーリム・ハンはウズベク・マンギト部族の出身、ヒヴァのサイイド・イスファンディヤール・ハンはウズベク・コンギラト部族、コーカンド最後の君主フダーヤール・ハンはウズベク・ミング部族の出身である［Bakir 1918: 28–35］。

こうして著者は前近代のトルキスタン史を通史として提示しているが、このような叙述形式はトルキスタンの現地においてはおそらく初めての例と考えられる。ここにはハン国史の枠組みを脱した近代的な歴史叙述の手法が確認できる。ティムールに置かれたアクセントは、

ティムール朝期の栄華と現代の隷属・停滞との落差を明示して変革をよびかけたジャディード知識人の論法[22]に即している。

住民と民族　通史に続くのが諸民族の解説である。キルギズ・カザクあるいはカザク・キルギズと表記されるカザフについて著者はこう述べている。

ジョチ・ウルスに由来するアク・オルダに服属していた諸部族が15世紀に自立したもので、大草原で自由な生活を送っていたためカザクと呼ばれた。ウズベクがトルキスタン南部に落ち着いたころ、カザフは諸部族を糾合して大きな民族を形成し、バルハシ湖からヴォルガ川に至る草原を支配した。〔この後、カザフ・ハン国の盛衰が注で解説される。17世紀に盛期を迎え、18世紀に3つのジュズに分裂して順次ロシアに服属したと説明するが、ジューンガルとの抗争についての言及はない。〕カザフは、今に至るまでテュルク性を純粋に保ってきた民族である。その言語も純粋であり、他の集団に見られる方言差はまったくない。カザフ語は豊かで雄弁な言語であり、表現力にすぐれている。英雄叙事詩などの口承文芸が盛んであり、アクンたちの語りは芸術の域に達している。彼ら遊牧民の生活様式は乳製品の食物を含めて古代のテュルクを彷彿させる。客人をもてなし、年長者を敬い、言葉を違えないカザフの近親関係は堅固である。現在の世界のムスリムの中では宗教と民族の点でもっとも誠実であり、かつ狂信的ではない。彼らの間ではイスラーム法とならんで古来の慣行や法が機能している（中国領内のカラ・キルギズでもイスラームの信仰とシャーマニズムの儀礼が併存している）。大多数は遊牧民で、文化的な中心地から遠く、常に移動するため、教育や技術、学術は十分に普及せず、イスラームの学知はアラブ、ヒヴァ、ブハラのウラマーが伝え、その後カザフの間からも各地に留学する者が現れた。ロシア統治下でカザフ人を教えていたテュルク・タタール人教師は、反ロシア宣伝を広めカザフとタタールの統合をめざす者として流刑や投獄に処されたが、カザフはテュルク・タタール人教師の招聘を続ける一方、世俗の学問と技術を習得するために子弟をロシア語学校で学ばせた。世俗の学問に加えてイスラームの学知を求める者たちは、子弟をテュルク・タタールのマドラサ（カルガル、イステルリバシュ（ステルリバシュ）、トロイツク、最近はオレンブルグやウファ、カザンの新方式マドラサ）に送り、近年はアラビアやカイロ、イスタンブルへの留学も始まった。こうしてカザフの間には学識ある者が多数輩出しており、民族文学が発展の道をたどるとともに新

[22] たとえば、先に言及した（2頁）ハジ・ムイーンの寄稿は、擬人化されたトルキスタンがティムール朝期の「楽園のごときサマルカンド」と現在の凋落した姿との落差に耐えきれず、現代人に文明化の努力を促し、『テュルク・トルキスタン史』の編纂を訴える筋書きになっている［Ḥājī Muʿīn 1913: 10］。フィトラトもロシア革命期に書いた作品で、ティムールの墓前に参ったテュルクが異国の支配下に陥った責任を悔い、かつての栄光と偉大を復活させる覚悟を述べる場面を描いている［小松 1996: 126–128; 帯谷 2022: 54–56］。「楽園のごときサマルカンド」については［木村 2022］を参照。

方式学校も日々増加している。カザフの人口は600万を数える［Bakir 1918: 35–39］。

カザフに対する著者の評価は極めて高い。その理由は、カザフは古来のテュルク性を正しく保持しているというテュルク主義者バキルの確信と近代教育に対するカザフの能動的な姿勢にあるようである。これと対照的なのがサルトに対する評価であり、著者はこう述べている。

トルキスタンの諸都市に住み、商業と手工業を生業とするサルトは、一部の歴史家によれば、テュルク・ウズベクあるいはテュルク・モグールとイラン系との混血から生まれた民族だという（また一部の歴史家は、サルトは遊牧民に対置される定住民の同義語だとしている）。サルトは、風貌や衣装、外見ではタジク人に似ており、言語はチャガタイ方言のテュルク語である。サルトは元々テュルクであってイランの血がまざり、タジクは元々イラン系であっていささかテュルクの血がまじった民族である。サルトはトルキスタンに250万人を数え、商売にすぐれ、生活では節約に努めて勤勉であり、商業の繁栄は彼らの手腕による。彼らはみなムスリムであり、イスラームの教えは征服者のアラブから学んだ。きわめて熱心な信者であるとともに、いくらか古来の慣行を固守している。都市で文化的な生活を送っているために、モスクやマドラサ、学校は多く、これらはワクフによって財政面では保証されている。しかし、学びと教えの方法は旧方式によっており、現世にも来世にも役に立たない教えによって民族の子らの人生を害しているのである。これがためにサルト人の学問と教育は発展しなかった。多くは読み書きを知らず、無知である。民衆の文芸はカザフに比べるとはるかに劣る。

サルトに対する厳しい評価は、おもに旧来の教育方式の弊害に起因している。ここにはヒヴァにおける新方式学校の旗手として旧方式を固守する保守派と闘ってきた著者の経験が反映されているのだろう。一方、彼はサルトという帝政期の公式の民族名称をこだわりなく使用しているが、トルキスタンのジャディード知識人はこの名称の不当さを1911–14年の間、トルキスタンのみならずロシア・ムスリムの新聞・雑誌誌上で訴えていた[23]。我々はテュルク、ウズベク、あるいはトルキスタン人だという彼らの主張をバキルが知らなかったはずはない。それでもサルトという名称を使ったのはなぜか、これについて著者はなにも語ってはいない［Bakir 1918: 41–42］。

以上の他、著者はカラ・キルギズ〔クルグズ〕、トルクメン、カラカラパク、タランチなどの諸民族について個別に解説を加えている。ここで確認されるのは、彼はトルキスタンをテュルクの祖地としながら、それぞれに個性をもつ諸民族の存在を認めていることである。それでも彼には6年後に出現する民族別共和国の発想はなく、ロシア領トルキスタンに成立したばかりのトルキスタン自治共和国の枠組みを前提としてテュルク系諸民族の連帯と共生は自明と考えていたと推定される。これはまもなくムスリム・コムニストとして頭角を現し、テュルク・ソヴィエト共和国を構想するトゥラル・ルスクロフ（1894–1938）と軌を一にする考え

(23) 詳しくは［小松 2022］を参照。

方である[24]。

近現代史　続く「ロシア人のトルキスタンへの到来」の項で、著者は近現代史を以下のように略述する。

ロシアのツァーリは16世紀に征服に着手し、19世紀に入るとウズベク・サルトのハンたちの不備や怠慢を利用してトルキスタンの攻略を進めた。ロシア軍は1865年タシュケントを占領し、ブハラとヒヴァを攻めて保護下に置き、1876年にはコーカンド・ハン国を廃してフェルガナ州を置いた。ロシアが征服を進めた時代、トルキスタンはアミールやハンの専制支配下にあり、私欲にかられた君主たちは相互に争い、また君主位を争う闘争が絶えない状況にあった。ロシア軍はこれを利用して攻略を進めたのである。ロシア軍の直面した困難は水と食糧の調達であり、さしたる抵抗は受けなかった。

ロシアの高官は「野蛮な民」を文明化し、砂漠に灌漑水路を開いてトルキスタンを豊かにすることなどを約束したが、教育事業は熱心な宣教師〔文教政策を担ったオストロウーモフ（1846–1930）[25]のこと〕に委ね、トルキスタン人の信仰心や民族的な誇りを傷つけた。ロシアのブルジョワジーはトルキスタンから多くの政治的、経済的な利益を得ながら、トルキスタンに文化的、社会的な貢献をすることはなかった。ロシアの高官は文明化の代わりに服従を求め、ムスリムに平伏を強いることもあった。純朴なテュルクやムスリムの間に対立の種をまき、高位を望む保守主義のウラマーやカーディーを優遇して、彼らを進歩主義の民族主義者たちに対抗させたのである。

しかし、それにもかかわらず近年になってトルキスタン人の間には覚醒が起こり、有徳の資産家は自費で新方式学校を開設し、ロシア内地に留学した青年たちはトルキスタンに戻って近代的な学校を開設した。ロシアの学校で世俗の学問や科学を学ぶ者も現れた。1905年の自由〔1905年革命〕以後、トルキスタン人はこの青年党と保守派の二派に分かれ、青年党は人民を啓蒙し、政治的な隷属から解放する活動に着手した。1917年の二月革命はトルキスタン人の新時代を開き、隷属と暗黒からの解放が始まったのである。

これに続いて以下の注が入る：1917年11月28日、コーカンドに開かれたトルキスタン・ムスリム大会で領域的自治が宣言された。しかし自治政府のメンバーには社会主義に反対する考えの持ち主もおり、また一部の保守派の誘導のために自治政府と人民委員政府〔ソヴィエト政権〕との間に齟齬が生じて自治政府は倒され、首都のコーカンドは焦土と化した（1918年1月31日と2月7日の間のこと）。その後、1918年4月30日、トルキスタンは労働者と農民、農業移民の自治共和国と宣言された。自治共和国政府には16名のメンバーが選ばれ、その

(24) ルスクロフの構想については［Khalid 2015: 107–116; 小松 2018: 68–80］などを参照。

(25) オストロウーモフについては［帯谷 2005; Babajanov 2014］を参照。

うち3名はムスリムである。いまやトルキスタンは自由となり、トルキスタン人はテュルクにふさわしい文明国家を作ることに努める。衰退期の父祖たちが犯した歴史的な過ちを繰り返すことなく、統一と連帯によってテュルクの理想に尽くすのだ。ツァーリや大ロシア主義者たちの支配下の50年間に味わった苦痛や屈辱はこれまでとなるにちがいない［Bakir 1918: 42–46］。

以上がロシア統治下の近現代史の概略である。著者はロシアの歴史的な拡大政策とウズベク諸ハン国の不備と弱体、ロシア統治の悪弊とジャディード運動の展開、トルキスタン自治政府の解体と新生の自治共和国への期待にアクセントを置きながら、近現代史の展開を明解に叙述している。こうした解釈の提示においても本書は先覚的であったといえる。注目されるのは、彼が熱烈に支持したトルキスタン自治政府の挫折にもかかわらず、ソヴィエト政権への期待を失っていないことである。たしかに1918年半ば、政治情勢はまだ流動的であり、ムスリム知識人が主体的に活動する余地は残されていた。一方、テュルク・ナショナリストとして帝政支配を厳しく批判しながら1898年のアンディジャン蜂起や1916年反乱には一言もふれていない。前者については同時代のムスリム知識人の多くと同じく、これを無知な一党による暴挙とみなしていたのかもしれないが［小松 2008: 69–71］、後者への沈黙の理由は不明である[26]。

産業と生業　これについては個別に取り上げながら特徴付けを行っている。たとえば農業と園芸（果樹、養蚕、養蜂など）については、フェルガナ州を筆頭に発展する綿作とそれがはらむ問題に注目している。すなわち、トルキスタンでもっとも重要な生業は綿作であり、近年は繊維が長くて白いアメリカ種の生産が増加して毎年2億ルーブルの収益がある。しかし利益の大半は銀行や大企業、代理店、さらに仲買人の懐に入り、汗水垂らして働いた農民が手にする金額はわずかである。また科学、技術的な知見を欠くために、労力に比して収穫は少ない。物価の上昇によって農民の生活は苦しく、年ごとに借金はかさんでゆく。貪欲な仲買人はこれにつけこんで農民に手付金を渡し、綿花の収穫期になると価格を操作して綿花を安く買いたたくのである。こうして農民の生活は悲惨なものとなり、しまいには借金のかたとして自分の土地を企業や銀行にとられることになる。鉄道線の不足、稚拙な土地利用、灌漑事業の不備などにより、もっとも有望な綿作の発展は阻害されている、と[27]。著者の目は社会経済的な問題にも及んでいたことがわかる。

---

(26) バキルは、戦時労働の供出によって戦後の権利拡大を期し、無謀な反乱に反対したジャディード知識人［宇山 2017: 41; Chokobaeva et al. 2019: 18］に与していた可能性があるが、二月革命後避難先の新疆から帰還したカザフ・クルグズとスラブ系入植者との対立は激化しており、彼もこの現実は目撃していたはずである［Исхаков 2004: 269–274］。

(27) フェルガナ地方の綿作について詳しくは［植田 2020］を参照。

もう一つの主な生業、牧畜についてはこう総括している。牧畜はカザフとトルクメンの生業であり、彼らの生活はすべて家畜にかかっているが、近年畜産はしだいに縮小している。とりわけロシア人やウクライナ人移民が遊牧民の住地を奪うと家畜を育む草原も縮小し、移民たちは遊牧民にあらゆる圧迫を加えるようになった。さらにジュト[28]の激発も牧畜に打撃を与えた結果、遊牧生活をやめて定住化する動きが起こっている、と。

工業についてはどうか。鉄道が少なく文化的な中心地から遠く離れていること、石炭や石油などの燃料が高価であること、労働者や技術者が育っていないこと、またすべての基礎になる資本と知識を欠いていることから、トルキスタンの工業は未発達である。それでもすべてヨーロッパ式の綿花〔洗浄・綿実油〕工場は多数ある（所有者の多くはムスリムである）。そのほか若干の製粉、製油工場などがある。工業が未発達なのは、上記のほかツァーリ政府やモスクワの工場主・資本家の専制や策動のためである。一方で著者はトルキスタンの地下資源の豊かさを指摘し、今後の鉱工業の発展に期待をかけている。これはもちろん著者が重視する教育の普及と発展と結びつくテーマにほかならない［Bakir 1918: 46–54］。

教育　教育の水準はひどく低い。マドラサやマクタブは多数あっても教育は旧式で世俗の学問や科学はほとんど教えられることがない。イスラーム諸学にしてもテキストは注釈ばかりで学生の能力を毀損するのみである。かつてイブン・シーナーやファーラービー、イマーム・ブハーリー、ナヴァーイーらを輩出したトルキスタンのマドラサは、いまやワクフを食い物にするムタワッリーやムダッリスの巣窟となりはてた。ロシア統治下でいくつかのロシア語・ムスリム語学校が開かれたが、その目的はロシア化とキリスト教化にあったから、現地民はこれを信用しなかった。ロシアは半世紀にわたってトルキスタンを軍政下に置き、ロシアの一般法とは異なる法制のもとで統治した。しかし最近になって新方式学校が開かれ、イスラームと民族の両面で整った教育が始まった［Bakir 1918: 54–55］。教育の惨状に対する批判と新方式学校に象徴される近代教育への期待は、本書の全体を貫く基本的なモチーフと言ってもよい。この実践的な姿勢はテュルク主義の修辞に勝っているようにもみえる。

以上が総論の概要である。次にトルキスタンを構成する5州とブハラ、ヒヴァについてほぼ同一の形式で解説が続く。以下、各章の特徴的な記述を紹介することにしよう。

シルダリヤ州　歴史に関してはロシアによる征服過程、トルキスタンは聖者の霊力に守られているかのような迷信、タシュケント攻防戦におけるアーリム・クルの勇戦やブハラ軍のコーカンド侵攻という暴挙を含めてトルキスタン総督府の設立までを詳述する。農業では灌漑事業の不備や蝗害の被害と対処法、ロシア人やドイツ人移民がもたらした新しい農具のほか、

[28] ジュトについて詳しくは［宇山 2012］を参照。

食糧の自給ができておらず、穀物はロシアから輸入している事実を解説している。またあらゆる面でトルキスタンの中心であるタシュケントには詳細な説明を加え、新方式学校の教科書の出版や多様な書籍を扱う書店が多いことに言及している［Bakir 1918: 56–78］。

サマルカンド州　住民の59%はウズベク、27%がタジクとしながら、原住の民で「崩れたbuzuqペルシア語」を話すタジクは、文化の面ではトルキスタンの他の民族に勝っていると記す。また、鉄道開通後はアルメニア人が増え、居酒屋などの経営で人々の倫理を破壊していると書くが、これはベフブーディーの有名な戯曲『父殺し』にも現れるテーマである。特記するのは古都サマルカンドの詳細な歴史であり、サーマーン朝の首都としての繁栄とチンギス・カンによる破壊に続いてティムール朝期の文化的な繁栄を評価する一方、シャーヒジンダ、グーリ・アミールなどの歴史的な建造物はいずれも破損しており、しかるべき修復を加えなければ消滅のおそれがあることも指摘している［Bakir 1918: 79–90］。

フェルガナ州　歴史に関しては、バーブルの遺児アルトゥン･ベシク伝説を含むコーカンド･ハン国の歴史とロシアによる征服過程を詳細に説明し、かつて繁栄したムスリムの独立国家が君主の圧政と無策のためにロシアの軍門に降り、民族的、宗教的な尊厳が踏みにじられた事実を無念の思いもあらわに記している。ちなみにこのモチーフはアブドゥッラ・カーディリーの有名な歴史小説『過ぎ去りし日々』（1923–24年）に通じる。興味深いのは、トルキスタン自治政府を打倒したソヴィエト政権にあらためて希望をかけていることである。「自由と解放の恩恵を享受するならば、テュルクの祖地ojaqたるトルキスタンが時をへずして文明諸国の仲間入りをはたすことは疑いない」と著者は言う。さらに自治政府崩壊の局面を具体的に描写した著者は、「バスマチ」の指導者として知られるエルガシュ・コルバシュの行動に疑念を隠していない。1918年1月末ボリシェヴィキおよびアルメニア人と時を同じくして「匪賊集団とエルガシュ・コルバシュという反徒がコーカンドを襲い、都市を臨時政府［自治政府］から奪うと自らハンと宣言し、臨時政府のメンバーを捕らえた。その後、ソヴィエト部隊が勝利してコーカンドの新旧両市街を略奪すると、匪賊は群れをなしてマルギラン方面に逃走した」と記すのである。ソ連解体後、民族解放運動の英雄となる小エルガシュであるが［Ражабов 2015: 46–49］、同時代のジャディード知識人は別の目で見ていたことになる[29]。なお、著者はパミール西部に住むイスマーイール派やクルグズの女領主クルバンジャン・ダドホ（クルマンジャン・ダトカ）にも言及している［Bakir 1918: 91–111］。

---

[29] バスマチに対するバキルの見方は、ハーリドの指摘するムスリム都市民の見方に通じるものである［Khalid 2015: 88］。

トルクメニスタン　著者はザカスピ州という公式の名称を使わず、古代からこの地方に居住する民族の名にちなんでトルクメニスタンの名称を用いている[30]。同時代のオスマン・トルコ人はモンゴル侵攻期にホラズム地方からアナトリアに移動したトルクメンのカユ・ハンの末裔であることに言及し、アラマン（略奪・人狩りの遠征行）や独立不羈の気質、長老による合議制の伝統のほか、マフトゥムクリの詩やオグズ・ハン伝説の普及などの特徴を述べた後、テケ・トルクメンがロシア軍に対して展開した抵抗戦、とりわけギョクデペの戦い（1881年）におけるトルクメンの勇戦について詳説している。世界一の競走馬と高品質の絨毯を絶賛する著者は、メルヴの転変の歴史を一瞥し、イランから移住してきたバーブ＝バハーイー教徒[31]と彼らが運営する新式学校にも関心を向けている［Bakir 1918: 111–131］。

セミレチエ州　住民としてはカザフとクルグズの他に、中国領内から移住してきたタランチ、ドゥンガン、サルト・カルマクなどを挙げ、シベリア・コサックに始まるロシア人、ウクライナ人の入植については「州のもっとも肥沃で牧畜に適した土地を占有し、村を営んで定着した」と記している。歴史に関しては、ロシア統治に対するケネサルやナウルズバイらのカザフ反乱を詳説し、ケネサルの息子サードゥク・スルタンを「カザフのバートゥルの中で最強の勇士」と絶賛する。教育についてはカザフの項と同じく、近年テュルク・タタール人の先導で新方式が普及しつつあり、イスラームのほか世俗的な科目が教えられ、民族と宗教の教育がなされている、と高い評価を与えている［Bakir 1918: 131–145］。

ブハラ・ハン国　この項ではウズベク支配下での文化の停滞と衰退を指摘する一方、盛んな隊商交易に注目する。カザンのテュルク・タタールが4世紀前ロシアに征服されて以来、その民族、宗教的な伝統を保持できたのはこの隊商のお陰であり、タタールの錚々たる改革思想家クルサヴィー（1776–1812）やウトゥズ・イマニー、メルジャーニーらはこの隊商によってブハラに留学した。したがってテュルク・タタールは古の「聖なるブハラ」に恩義があるという指摘は興味深い[32]。概して商人気質で計算高く、倹約家のブハラ人が割礼式などのトイでは膨大な出費をいとわず破産に終わるという浪費への批判は、ジャディード知識人に共通する論点である。現代史ではロシア革命期に生まれた青年ブハラ人運動を詳説し、1918年3月の革命の挫折を記したうえで、青年ブハラ人はアミールの支配体制との闘争を続けて

(30) バキルはトルクメン人が主体のこの地域の独自性を認めていたと推定される。

(31) 1910年代半ばからトルキスタンではバーブ＝バハーイー教の浸透に対する懸念の声が上がり始め、タシュケントの有力誌『アル・イスラーフ（改革）』は、ウラマーにスンナ・ハナフィー派の一体性を守る言論を呼びかけていたが［Агзамходжаев 2021: 84–92］、バキルにこうした警戒感は見られない。

(32) ヴォルガ・ウラル地方とブハラの関係については［小松 1983; Frank 2012; 磯貝 2018］など、「聖なるブハラ」については［木村 2021］を参照。

おり、いつの日か民が覚醒して国の統治を自分たちのものにするだろうと展望している。主な史跡の一つナクシュバンド廟の解説では聖者崇拝への厳しい批判が目立っている。著者は、一般にトルキスタン人の間では死者への敬意が強く、聖者や預言者のマザールが極めて多い。まっとうな仕事につかない怠け者たちは、食い扶持を求めて無知で純朴な人々に「聖者」の墓を「発見」してみせるのだ[33]、と記し、もしムハンマドの墓がマディーナになければ、「トルキスタンの各地に預言者様の墓が発見されていたことだろう」と述べている。聖者崇拝の批判もまたジャディード知識人に共通する論点である［Bakir 1918: 145–159］。マドラサの教育・運営実態への批判をはじめ、著者のブハラ評は少し前のタタール人旅行者の観察とほぼ同一と言ってよい［Bigiev 1908; イブラヒム 2013: 14–23; Ross 2020: 157–158］。

ヒヴァ・ハン国　すべてをアム川の水に依存するヒヴァについて、本来の住民は古代の康居テュルクとイラン系の混成から生まれたホラズム・タジクであり、16世紀にウズベクが到来して現地民を吸収し、その多くはサルトとよばれた。純粋のウズベクはグルレン地方に住み、ヒヴァのサルトはウズベクとタジク、さらにイラン人奴隷の混成から生まれた、と住民の複合性を解説している。一方、ジュナイド・ハン率いるヨムト・トルクメンの略奪や攻撃に言及しながら、素朴で勇敢なトルクメン自体にはテュルク古来の心性を認め、しかるべき教育が与えられればテュルク世界で第一等の民族になろうと記す。著者は教育の劣悪な現状からヒヴァを「死者の世界」と評しているが[34]、近年テュルク・タタール人教師が開いた新方式学校に期待をかけ、ヒヴァ人は学問と教育を望み、有能な人々であるから、教育の規律が整えばすみやかに発展することは明らかだと展望する。近現代史では、ロシア革命の影響下でヒヴァの自由主義者たちが革命に決起し、イスファンディヤール・ハンは立憲制を宣言して国民議会が開かれたが、1917年12月の反動によって青年ヒヴァ人は弾圧を受け、亡命したメンバーはトルキスタン自治共和国で革命委員会を組織した、と直近の政治情勢まで記している。そして一時期をヒヴァで過ごした著者は、ハン国の司法、行政、産業、主要な都市についても最新の情報を簡潔にまとめている［Bakir 1918: 159–173］。

おわりに

1915年2月、ハジ・ムイーンは『アーイナ』に寄せた論説「民族の歴史について」のなかでこう書いていた。

---

(33) これはもちろん事の一面である。聖者の墓の発見に関する歴史的な考察として［濱田 1999］を参照。

(34) この表現は、1909年『シューラー』誌上でヒヴァ・ハン国の沈滞を痛烈に批判した論説「生気なき世界」に示唆を受けた可能性がある［Saʿīd 1909］。

民族史についてはわがタタール人の兄弟たちが取り組んで第一歩をしるした。われわれが民族史を知ろうと第一歩を踏み出す時はいまだ来たらずとはいえ、少なくともこの道に進むには準備を整えなければならない。もしわれらトルキスタン人がまさに今日からわれらが民族史の重要性を認め、研究と探求に取り組むならば、やがて立派な著作が現れることだろう。そのときわれわれもはれて自分たちの民族史を初等、中等学校の生徒たちに教えることができるのだ［Ḥājī Muʿīn 1915: 258－259］。

それから3年を経て現れたのがバキルの教科書である。ハジ・ムイーンがこれにどのような評価を与えたかは不明だが、イスラーム化以前の歴史を解説し、ティムールにアクセントを置いた本書は、ハジ・ムイーンの期待に応えるものであったと考えられる。あるいは彼の想定を超える斬新なトルキスタン史だったかもしれない。本書の成立の背景にはトルキスタンにおけるジャディード運動の展開、そしてロシア革命のもたらした激変があった。かつての植民地に代わってトルキスタン自治ソヴィエト共和国が生まれていたのである。

以上に紹介したとおり、本書はトルキスタンの地理と歴史を解説した最初の教科書、より正確には教員用の指導書である。全体として情報量は豊かであり、生徒はどこに住んでいようとトルキスタンという広大な地域の現況と歴史を幅広く理解することができるように配慮されている。ここには次世代のトルキスタン人に自立した「祖国」の姿を示そうとする意図が明確にみてとれる。トルキスタンの地理的な領域はたしかにロシア統治がもたらしたものであるが、バキルはこれに「祖国」としての内実を与えようとしているのである。この試みを支えるのはテュルクに象徴される歴史と文化であった。「テュルクの祖地」に表象される歴史観は、東洋学者のバルトリドには容認しがたい「トルコ・ナショナリズム」の見解であったが［Бартольд 1977: 533］、バキルにとってはトルキスタン人を創造するのに不可欠の支柱であった(35)。もう一つの重要な要因は、トルキスタンの産業と地下資源のもつ潜在的な可

(35) バキルやヤウシェフのように、トルキスタンの変革においてタタール知識人の発揮したイニシアティブは注目に値する。この概観として［Турдыев 1997; Хафизов 2003: 51–78］、また最新の興味深い解釈として［Ross 2020］がある。バキルらタタール人がトルキスタンの教育事業で先導役をはたした理由を考えると、一つにはロシア内地のタタール人は、ムスリムが人口の大半を占めるトルキスタンと異なり、ロシア社会に埋没・同化することなく民族の自立を確保するために、いち早く民族史教育に着手していたことがあげられる。前記のガバシーも民族史の重要性を強調しながら、テュルク・タタール諸民族の過去と現在を概観する初等学校用の教科書『テュルク諸民族』を書いていた。「過去は現在を映す鏡」であり、自らの民族史は誰もが知らねばならないと力説する著者は、スキタイやフン、モンゴルもテュルク・タタールとみなし、その歴史的な覇業を称えている［Gabashī n.d.］。このようなテュルク主義の立場からすれば、トルキスタン人の民族的な覚醒は巨大な人口をもつ同胞の出現を意味したことだろう。じっさいヤウシェフは1917年『ウルグ・トルキスタン』の創刊号でロシアに住む3000万テュルク・タタールの民族的な一体性を説き、トルキスタンをテュルクの祖地と記していた［Khalid 2015: 67–68］。こうしたテュルク主義の衝動も無視することはできない。ただし、近代教育の普及は、地域によって時間差はあれ普遍的な現象であり、特定のイデオロギーとのみ関係づけるのは正しくないだろう。

能性である。彼は現在の不備や欠陥を指摘しながらも将来の発展を展望してみせる。そしてそれを支えるのが、新方式学校に象徴される教育改革であった。こうしてみると、本書はジャディード知識人の理念を具現化した教科書と言ってよいだろう。それが革命のただ中で書かれたことも特記に値する。トルキスタンの通史は現下の革命まで書き継がれているのである[36]。周知のとおり、ソヴィエト体制の確立とともにジャディード知識人の活動の場は失われてゆく。この教科書が前記の人民大学で使われた可能性は高いが、実際に使用された期間は長くはなかっただろう。トルキスタンという枠組み自体も1924年には消滅する。しかし、この時代の思潮を物語る史料として、本書には独自の価値を見いだすことができる。近年ジャディード運動の過大な評価や研究手法には厳しい批判が出されている［Eden et al. 2016］。たしかにその相対化は必要だが、研究の停止まで求めるのは極論ではないだろうか［DeWeese 2016: 41］。研究の深化は史料の吟味によってはじめて可能になるはずである。

参考文献

Allworth, Edward. 1990. *The Modern Uzbeks: From the Fourteenth Century to the Present, A Cultural History*, Stanford: Hoover Institution Press.

Babajanov, Bakhtiyar. 2014. "'How Will We Appear in the Eyes of *Inovertsy* and *Inorodtsy*?' Nikolai Ostroumov on the Image and Function of Russian Power," *Central Asian Survey* 33(2), pp. 270–288.

Bakir, Mukhtār. 1913. "Millat namïna bir rijā," *Shūrā* 4 (1913.2.154), p. 122.

——— 1918. *Turkistān qitʿasi taʾrīkhī va joghrāfī jihatdan*, Tashkent: Birādarān-i K. M. Bakiroflar ve Kompaniyasi Tijāratkhānasi.

Behbūdī, Maḥmūd Khvāja. 1914. "Turkistān taʾrīkhi kerak," *Āyina* 38 (1914.7.12), pp. 898–890.

Bigiev, Muhammad Zāhir. 1908. *Mā warā al-nahrda siyāḥat*, Kazan: Kitāb.

Brophy, David. 2016. *Uyghur Nation: Reform and Revolution on the Russia-China Frontier*, Cambridge-London: Harvard University Press.

Chokobaeva, Aminat, Cloé Drieu and Alexander Morrison eds. 2019. *The Central Asian Revolt of 1916: A Collapsing Empire in the Age of War and Revolution*, Manchester: Manchester University Press.

DeWeese, Devin. 2016. "It Was a Dark and Stagnant Night ('Til the Jadids Brought the Light): Clichés, Biases, and False Dichotomies in the Intellectual History of Central Asia)," *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 59, pp. 37–92.

Eden, Jeff, Paolo Sartori, Devin DeWeese. 2016. "Moving beyond Modernism: Rethinking Cultural Change in Muslim Eurasia (19th–20th Centuries)," *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 59, pp. 1–36.

(36) ちなみにバルトリドによる最初のトルキスタン通史の刊行は1922年のことである［Бартольд 1963: 107–166］。

Farkhshatov, Marsil N. and Isogai Masumi eds. 2020. *"My Autobiography" by Ḥasan ʿAṭāʾ Gabashī in 1928: ʿUlamāʾ and Soviet Power*, Tokyo: ILCAA.

Frank, Allen J. 2012. *Bukhara and the Muslims of Russia: Sufism, Education, and the Paradox of Islamic Prestige*. Leiden-Boston: Brill.

Gabashī, Ḥasan ʿAṭāʾ. n.d. *Turk urughlari*, Kazan: Lito-tipografiya I. N. Kharitonova.

Ḥājī Muʿīn Shukr Allāh. 1913. "Turkistānning ogut ham otinchi," *Shūrā* 1 (1913.1.1), p. 10.

——— 1915. "Millī taʾrīkh haqqinda," *Āyina* 10 (1915.2.28), pp. 258–260.

Khalid, Adeeb. 1998. *The Politics of Muslim Cultural Reform: Jadidism in Central Asia*, Berkeley-London: University of California Press.

——— 2004. "Nation into History: The Origins of National Historiography in Central Asia," S. A. Dudoignon ed., *Devout Societies vs. Impious States?: Transmitting Islamic Learning in Russia, Central Asia and China, through the Twentieth Century*, Berlin: Klaus Schwarz Verlag, pp. 127–145.

——— 2015. *Making Uzbekistan: Nation, Empire, and Revolution in the Early USSR*, Ithaca-London: Cornell University Press.

Ramaḍān, ʿAlemdār Mullā. 1914. "Khīva tamadden yolunda," *Vaqt* 1447 (1914.3.23), p. 2.

Ross, Danielle. 2020. *Tatar Empire: Kazan's Muslims and the Making of Imperial Russia*, Bloomington: Indiana University Press.

Saʿīd, ʿAbd al-Karīm. 1909. "Rūhsiz ʿālam," *Shūrā* 18 (1909.9.15), pp. 549–551; 19 (1909.10.1), pp. 583–585; 20 (1909.10.15), pp.616–618; 24 (1909.12.15), pp. 748–749.

Sela, Ron. 2011. *The Legendary Biographies of Tamerlane: Islam and Heroic Apocrypha in Central Asia*, Cambridge University Press.

Sheref, Burhān. 1913. *Ganī Bāy: Terjume-i hāli, mektūblari ve onun haqqïnda khāṭiralar*, Orenburg: Vaqt matbaasi.

Togan, A. Zaki Velidi. 1942–47. *Bugünkü Türkili (Türkistan) ve Yakın Tarihi*, İstanbul: Arkadaş, İbrahim Horoz ve Güven Basımevileri.

——— 1969. *Hâtıralar: Türkistan ve Diğer Müslüman Türklerinin Millî Varlık ve Kültür Mücadeleleri*, İstanbul: Tan Matbaası.

ʿUthmānī. 1912. "Khīva mamlakatinde madrasalari," *Shūrā* 18 (1912.9.15), pp. 559–561.

Yāvshev, Nūshīrvān. 1914. "Turkistān taʾrīkhi," *Ṣadā-i Turkistān* 17 (1914.6.10), pp. 1–2.

Агзамходжаев, С., З. Улугбекова. 2021. *"Ал-ислоҳ" журнали: Туркистондаги ислоҳотчилик ҳаракатини ўрганиш бўйича тарихий манба (1915–1918 йиллар)*, Тошкент: Ўзбекистон халқаро ислом академияси.

Бабаджанов, Бахтияр М. 2010. *Кокандское ханство: власть, политика, религия*, Токио-Ташкент: TIAS.

Бартольд, В. В. 1963. История Туркестана (конспект лекций), *Сочинения*, 2-1, Москва: Наука, pp. 107–

166.［初出は1922年、邦訳としてウェ・バルトリド（長沢和俊訳）『中央アジア史概説』角川文庫、1966年］

——— 1977. Задачи русского востоковедения в Туркестане, *Сочинения*, 9, Москва: Наука, pp. 522–533.［初出は1914年］

Исхаков, Салават. 2004. *Российские мусульмане и революция (весна 1917 г. – лето 1918 г.)*, Москва: Издательство <Социально-политическая мысль>.

——— сост. 2019. *Великая российская революция 1917 года и мусульманское движение: сборник документов и материалов*, Москва - Санкт Петербург: Центр гуманитарных инициатив.

Мадьярова, С. Н. 2014. Туркистон ўтмиши ва келажаги Мухтар Бакир асарларида, Д. А. Олимова, ред., *История и историки Узбекистана в XX веке*, Ташкент: Издательство “Navro’z,” pp. 43–51.

Мунаввар Қори Абдурашидхонов. 2001. *Хотираларимдан*, Тошкент: Шарқ.

Ражабов, Қаҳрамон. 2015. *Фаргона водийсидаги истиқлолчилик ҳаракати: моҳияти ва асосий ривожланиш босқичлари*, Тошкент: Yangi Nashr.

Турдыев, Шерали. 1997. Среднеазиатские татары: роль и значение в культурной и политической жизни Туркестана первой четверти XX в., Рафаэль Хакимов. ред., *Ислам в татарском мире*, Казань: Панорама-Форум, pp. 169–190.

Хафизов, Г. Г. 2003. *Культуртригерская деятельность Татарской интеллигенции в XIX– первой четверти XX вв*, Казань: Изд-во Казанского университета.

Холбоев, Сотимжон. 2003. *Миллий университетнинг тарихий илдизлари ва ташкил топиши*, Тошкент: Шарқ.

磯貝真澄 2014「ロシア帝国ヴォルガ・ウラル地域ムスリム社会の「新方式」の教育課程」秋葉淳・橋本伸也編『近代・イスラームの教育社会史——オスマン帝国からの展望——』昭和堂、194–216頁。

——— 2018「ロシアのウラマーとイスラーム教育網に関する試論——19世紀前半まで——」『史林』101（1）、116–149頁。

イブラヒム，アブデュルレシト 2013『ジャポンヤ——イブラヒムの明治日本探訪記——』小松香織・小松久男訳、岩波書店。

植田暁 2020『近代中央アジアの綿花栽培と遊牧民——GISによるフェルガナ経済史——』北海道大学出版会。

宇山智彦 2012「カザフスタンにおけるジュト（家畜大量死）——文献史料と気象データ（19世紀中葉－ 1920年代）——」窪田順平監修・奈良間千之編『中央ユーラシア環境史 1　環境変動と人間』臨川書店、240–258頁。

——— 2017「ロシア・ムスリムの革命と「反革命」——「想像の帝国」との協力と闘い——」宇山智彦［責任編集］『ロシア革命とソ連の世紀 5 越境する民族』岩波書店、37–64頁。

大石真一郎 1998「ヌーシルヴァーン・ヤウシェフのトルキスタン周遊について」『神戸大学史学年報』13、20–36頁。

帯谷知可 2005「オストロウーモフの見たロシア領トルキスタン」『ロシア史研究』76、15–27頁。

――― 2022『ヴェールのなかのモダニティ――ポスト社会主義国ウズベキスタンの経験――』東京大学出版会。

木村暁 2021「スンナ派学の牙城ブハラ」守川知子編『都市からひもとく西アジア――歴史・社会・文化――』勉誠出版、168–185頁。

――― 2022「繁栄する青の都――ティムール朝から現代まで――」『K』3、28–35頁。

小松久男 1983「ブハラとカザン」護雅夫編『内陸アジア・西アジアの社会と文化』山川出版社、481–500頁。

――― 1996『革命の中央アジア――あるジャディードの軌跡――』東京大学出版会。

――― 2008「聖戦から自治構想へ――ダール・アル・イスラームとしてのロシア領トルキスタン――」『西南アジア研究』69、59–91頁。

――― 2018『近代中央アジアの群像――革命の世代の軌跡――』山川出版社。

――― 2022「サルト人はいるか――近代トルキスタンにおける民族名論争――」『西南アジア研究』94、59–92頁。

佐々木紳 2008「メフメト・エミーン・エフェンディの『中央アジア紀行』について――概要と史料的価値――」『内陸アジア史研究』23、153–163頁。

濱田正美 1999「聖者の墓を見つける話」『国立民族学博物館研究報告別冊』20、287–326頁。

（公益財団法人東洋文庫研究員）

追　悼

岡奈津子氏の研究業績
── 概観と一覧 ──

宇山　智彦

2022年1月27日、日本中央アジア学会理事・編集委員で、日本貿易振興機構アジア経済研究所新領域研究センター・ガバナンス研究グループ長の岡奈津子さんが急逝した。学生時代からの友人である筆者にとって、岡さんの死は胸が張り裂けるような悲しい出来事だが[1]、ここでは彼女の研究者としての姿に絞って、業績を回顧したい。

岡さんは1987年に長野県諏訪清陵高等学校を卒業して東京大学に入学し、教養学部教養学科ロシア科に在学中の1990年から91年にかけて、日ソ政府間の協定に基づくソ連政府奨学金留学制度の第2期生として、モスクワ国立教育大学に留学した。ソ連時代最末期の激動の時期である。この時にさまざまな政治の動きを目撃し、市民生活の困難を経験したことは、その後の岡さんの研究の糧となったと思われる。帰国後の1992年に東京大学教養学部を卒業して大学院総合文化研究科地域文化研究専攻に進学し、94年に修士課程を修了した。

学部生時代に日韓学生会議で活動し、実行委員長を務めたこともある岡さんの大学院での専門は、（旧）ソ連の朝鮮人の歴史と現状の研究で、修士論文のテーマは「ロシア極東における朝鮮人社会の政治・経済的変容：農業集団化と強制移住」であった。強制移住先である中央アジアでの朝鮮人の生活・活動も継続的に調査し、その成果は半谷史郎氏との共著『中央アジアの朝鮮人』（2006年）や英語・ロシア語の論文などに結実した。これらは現在も、旧ソ連の朝鮮人に関する信頼できる研究文献であり続けている。

朝鮮人の問題に限定せず本格的に中央アジア研究を始めたのは、1994年にアジア経済研究所（アジ研）に入所してからだった。同研究所の清水学氏を中心に実施されていた中央アジアに関する研究プロジェクトである「市場経済化展望総合研究」事業のメンバーとして、カザフスタンにおける民営化や、他のCIS（独立国家共同体）諸国との経済関係を研究した。民営化について現地の調査機関に世論調査を委託したのは、当時の日本の中央アジア研究の中で先進的な取り組みであり、一般市民の見方を重視する岡さんの研究手法の確立の一過程

[1] 個人的な追悼文としては、宇山智彦「哀惜 岡奈津子さん」『スラブ･ユーラシア研究センターニュース』第164号、2022年、23–26頁。

でもあった。

しかし岡さんの関心の中心は、経済よりも民族問題と政治にあった。1994年には、在カザフスタン大使館の専門調査員だった筆者が岡さんを政治家や民族運動家に紹介したが、その後彼女はアジ研の海外派遣員として、1998～99年のコロンビア大学留学（ハリマン研究所客員研究員）を経て、1999～2001年にアルマトゥに滞在（カザフスタン発展研究所客員研究員）し、主に野党系の政治活動家や民族団体の関係者、アナリスト、ジャーナリストなどと幅広く交流した（本号掲載のドスム・サトパエフ氏の追悼文参照）。

この滞在中およびその後の調査の成果として、岡さんはカザフスタンのロシア人、ウイグル人、ウズベク人に関する論文や、カザフスタンの政治体制・政治エリートについての論文を、次々と発表した。特に諸民族団体の指導者たちが当局による懐柔を受けて協力しつつ、隣国との関係維持や民族内での競争を含め多彩な活動を展開する様子をインタビューに基づいて活写する研究は、独自性の高いものだった。2007年には、“The Management of Ethno-Political Diversity in Kazakhstan, 1991–2005” と題する博士論文を、イギリスのリーズ大学政治国際関係学科に提出し、翌年博士号（PhD）を取得した。以前から行っていた朝鮮人研究と合わせ、カザフスタンのさまざまな民族の社会生活や政治的立場を、同国の権威主義体制や在外カザフ人帰還政策、ロシアの在外ロシア人政策などと組み合わせて論じることのできる専門家として、国際的に知られるようになった。

2010年頃から岡さんは、カザフスタンの市民が日常的に（そして外国人も時に）直面する社会問題の一つである腐敗（賄賂やコネ）という、新しいテーマに取り組んだ。この研究のために岡さんは2011年にアジ研の海外調査員として再びアルマトゥに滞在し、その後も現地調査を繰り返した。フットワークが軽く、人と本音で話し合える関係を築くのが得意な岡さんの調査能力は、このテーマの研究で存分に発揮された。言うまでもなく、腐敗というセンシティヴな問題の調査は勇気を必要とし、かなりの困難を伴うものであり、インタビューがうまくいかない場合や、警察に連行されることさえあった。そうした苦労の一端は、のちに著書のあとがきに書かれている。

腐敗研究の成果は、*Central Asian Survey*、*Problems of Post-Communism*、*Central Asian Affairs* という3つの国際学術雑誌に発表されたのち、著書『〈賄賂〉のある暮らし：市場経済化後のカザフスタン』（白水社、2019年）にまとめられた。この本は、148人の多様な職業のカザフスタン市民からの聞き取りに基づいて、警察、司法、兵役から企業活動、教育、医療に至るさまざまな分野での腐敗の実態を、衝撃的とも言えるほど鮮明に描いている。そしてこれがカザフスタン社会の後進性ではなく、手続のために長い時間をかけたり神経をすり減らしたりすることを避けたい人の増加や、公職に就くための贈賄の費用を就任後の収賄によって回収するという構造的な問題の深刻化といった、市場経済化に伴う変化によるもので

あることを、説得力をもって示している。

また、ソ連時代に不正行為ないし問題処理の中心的手段だったコネの重要性が失われたわけではなく、決定権を持つ人物にアクセスし、取引を確実なものにするためにコネは依然として大きな意味を持っていると指摘し、コネとカネの使い分けや組み合わせを分析している点も、この研究の独自性である。全体として、賄賂を単に悪として糾弾するのではなく、人間関係や価値観の変化と関連する問題としてとらえ、賄賂を含む「非公式な問題解決」の方法を駆使して生きる人々のたくましさを描き出しているのは、岡さんがカザフスタン社会に深く入り込み、温かい目を向けてきたことの現れと言えよう。現代アジア研究における独創的かつ優れた業績に与えられる樫山純三賞（第15回、2020年）を受賞したのは、この本にふさわしい栄誉であった。

岡さんは、研究者間の交流の面でも大きな貢献をした。カザフスタンの研究者とも、諸外国のカザフスタン研究者とも、幅広いネットワークを持っていた。2015年にアジ研の近所である神田外国語大学と幕張メッセで開かれた、ICCEES（国際中欧・東欧研究協議会）幕張世界大会では、裏方を買って出て多くの地味な仕事をこなした。日本中央アジア学会ではさまざまな活動に携わったが、特に2019年度年次大会（2020年3月）で、本学会とアジ研の雑誌『アジア経済』との共同企画として、公開パネルセッション「途上国研究の最前線としての中央アジア：比較政治、開発経済、現代史、環境の視点から」をコーディネートした。その記録は、同誌第61巻第3号（2020年）に掲載されている。若手研究者との交流にも熱心で、同じく『アジア経済』第62巻第4号（2021年）のために、ソ連解体30年をテーマに若手の政治学者3人とのオンライン座談会を実施した。日本にいる中央アジア出身の留学生・研究者にも常に励ましを与え、慕われていたことは、本号掲載のクアニシ・タスタンベコワ氏の追悼文から分かるであろう。

岡さんの研究全体の特徴は、まず、優れたロシア語力と並外れたコミュニケーション能力によってカザフスタン社会に深く入り込み、一般の人々と生活感覚を共有しながら現地調査を行ったことにある。調査のエピソードや苦労話は、『アジ研ワールド・トレンド』などで、ユーモアを込めて書かれており、楽しげに話す岡さんの表情と声が浮かんでくるような文章である。他方、そうした型破りとも言える現地調査の成果を論文にまとめる際の筆致は極めて冷静であり、理論や先行研究を十分に把握し、基礎資料や統計データを使いながら几帳面に書かれていた。同時に、冷静で学問的な書き方の背後には、岡さんが少数者・弱者に向ける優しい目と正義感も感じられた。優しさと正義感は、岡さんが日常の人間関係においても実践していたことであり、たとえば本学会のハラスメント防止宣言（2021年3月21日総会決議）の作成過程での岡さんの貢献は大きかった。これからますます日本そして世界の中央アジア研究を牽引することが期待されていた岡さんの逝去は、学界にとって本当に大きな損失であり、残念でならない。

業績一覧[2]

著書・編書

2002年 (co-authored with Nurbulat Masanov, Erlan Karin, and Andrei Chebotarev) *The Nationalities Question in Post-Soviet Kazakhstan*, M.E.S. Series No. 51, Chiba: Institute of Developing Economies, 159 p.［執 筆 章：“Nationalities Policy in Kazakhstan: Interviewing Political and Cultural Elites,” pp. 109–159.］

2006年 （半谷史郎と共著）『中央アジアの朝鮮人：父祖の地を遠く離れて（ユーラシア・ブックレット93）』東洋書店、全63頁。

2007年 （単著）*Managing Ethnicity under Authoritarian Rule: Transborder Nationalisms in Post-Soviet Kazakhstan*, Chiba: Institute of Developing Economies, iii+247 p.

2008年 （編著）『移住と「帰郷」：離散民族と故地（調査研究報告書）』アジア経済研究所、全v+61頁［執筆章：「祖国を目指して：在外カザフ人のカザフスタンへの移住」1–17頁］。

2016年 （単著）Другая Япония. Жизнь без чайной церемонии. Алматы: Досым Сатпаевтың жеке қоры, 168 с.

2019年 （単著）『〈賄賂〉のある暮らし：市場経済化後のカザフスタン』白水社、全245+8頁。

論文

1996年 「一般市民の民営化への参加とその評価：カザフスタンのケース」清水学・松島吉洋編『中央アジアの市場経済化：カザフスタンを中心に（研究双書461）』アジア経済研究所、193–220頁。

1998年 「ロシア極東の朝鮮人：ソビエト民族政策と強制移住」『スラヴ研究』45、163–196頁。

「CISにおける経済統合：カザフスタンの戦略」清水学編『中央アジア：市場化の現段階と課題（研究双書489）』アジア経済研究所、131–165頁。

「ソ連における朝鮮人強制移住：ロシア極東から中央アジアへ」『岩波講座世界歴史第24巻 解放の光と影 1930年代－40年代』岩波書店、65–90頁。

1999年 「カザフスタンの人口移動（Discussion Paper No. D98-16）」一橋大学経済研究所中核的拠点形成プロジェクト、全36頁。

2000年 「1999年カザフスタン議会選挙：「民主化」の演出と投票結果の改ざん」『ロシア研究』30、73–92頁。

「中央アジア諸国をめぐる新経済関係の構築」西村可明編『旧ソ連・東欧における国際経済関係の新展開』日本評論社、189–218頁。

[2] researchmap、CiNii Research、アジア経済研究所ウェブサイトをはじめとするインターネット情報と、筆者が持つ資料をもとに作成した。インタビューや座談会は含めていない。

"Deportation of Koreans from the Russian Far East to Central Asia," in Komatsu Hisao, Obiya Chika, and John S. Schoeberlein, eds., *Migration in Central Asia: Its History and Current Problems*, Osaka: Japan Center for Area Studies, National Museum of Ethnology, pp. 127–145.

「カザフスタンのロシア人をめぐる最近の動き：「分離主義活動」と「ロシアとの統合要求」が示唆するもの」『現代の中東』29、27–38頁。

2001年 "The Korean Diaspora in Nationalizing Kazakhstan: Strategies for Survival as an Ethnic Minority," in German N. Kim and Ross King, eds., *Koryŏ Saram: Koreans in the Former USSR*, Korean and Korean American Studies Bulletin, 12(2/3), New Haven: East Rock Institute, pp. 89–113.

Корейцы в современном Казахстане: стратегия выживания в роли этнического меньшинства // Диаспоры. № 2/3. С. 194–220.

2002年 「ロシアの対「同胞」政策と在外ロシア人：カザフスタンのケース」『ロシア研究』34、76–95頁。

2003年 「カザフスタンにおける民族運動の翼賛化：予想された紛争はなぜ起きなかったのか」武内進一編『国家・暴力・政治：アジア・アフリカの紛争をめぐって（研究双書534）』アジア経済研究所、451–492頁。

2004年 Государство – этническое меньшинство – родина этого меньшинства (Русские, уйгуры и корейцы в постсоветском Казахстане и к своей родине) // Казахстан и Россия: общества и государства / ред.-сост. Д. Е. Фурман. М.: Права человека. С. 389–405.

「「近い外国」のロシア人：同胞法と国籍法に見るロシアのジレンマ」田畑伸一郎・末澤恵美編『CIS：旧ソ連空間の再構成』国際書院、93–112頁。

「民族と政治：国家の「民族化」と変化する民族間関係」岩﨑一郎・宇山智彦・小松久男編『現代中央アジア論：変貌する政治・経済の深層』日本評論社、81–102頁。

2005年 「カザフスタンにおける地方政治エリート（1992～2001年）」酒井啓子・青山弘之編『中東・中央アジア諸国における権力構造：したたかな国家・翻弄される社会（アジア経済研究所叢書1）』岩波書店、111–142頁。

2006年 「カザフスタン大統領選挙：約束されていたナザルバエフの勝利」『ロシア東欧貿易調査月報』51（3）、51–60頁。

"The 'Triadic Nexus' in Kazakhstan: A Comparative Study of Russians, Uighurs, and Koreans," in Ieda Osamu, Balázs Majtényi et al., eds., *Beyond Sovereignty: From Status Law to Transnational Citizenship?* Sapporo: Slavic Research Center, Hokkaido University, pp. 359–380.

「カザフスタン：権威主義体制における民族的亀裂の統制」間寧編『西・中央アジアにおける亀裂構造と政治体制（研究双書555）』アジア経済研究所、211–248頁。

2007年「民族化するカザフスタンにおけるコリアン・ディアスポラ：エスニック・マイノリティとしての生き残り戦略」高全恵星監修・柏崎千佳子訳『ディアスポラとしてのコリアン：北米・東アジア・中央アジア』新幹社、491–527頁。

“Transnationalism As a Threat to State Security? Case Studies on Uighurs and Uzbeks in Kazakhstan,” in Uyama Tomohiko, ed., *Empire, Islam, and Politics in Central Eurasia*, Sapporo: Slavic Research Center, Hokkaido University, pp. 351–368.

2008年「2007年カザフスタン下院選挙：大統領与党による「一党独裁」の成立」『現代の中東』44、28–36頁。

2009年 “Ethnicity and Elections under Authoritarianism: The Case of Kazakhstan,” IDE Discussion Paper No. 194, Chiba: Institute of Developing Economies, 25 p.

2010年「同胞の「帰還」：カザフスタンにおける在外カザフ人呼び寄せ政策」『アジア経済』51（6）、2–23頁。

2011年 “Neither Exit nor Voice: Loyalty as a Survival Strategy for the Uzbeks in Kazakhstan,” IDE Discussion Paper No. 286, Chiba: Institute of Developing Economies, 17 p.

2012年（半谷史郎と共著）「中央アジアに強制移住された諸民族：歴史と現在」帯谷知可・北川誠一・相馬秀廣編『中央アジア（朝倉世界地理講座 5）』朝倉書店、324–334頁。

2013年 “A Note on Ethnic Return Migration Policy in Kazakhstan: Changing Priorities and a Growing Dilemma,” IDE Discussion Paper No. 394, Chiba: Institute of Developing Economies, 13 p.

2015年 “Informal Payments and Connections in Post-Soviet Kazakhstan,” *Central Asian Survey* 34(3), pp. 330–340.

「「帰還民」へのまなざし：カザフスタンの在外カザフ人呼び寄せ政策と現地社会」山根聡・長縄宣博編『越境者たちのユーラシア（ユーラシア地域大国論 5）』ミネルヴァ書房、135–157頁。

2019年 “Grades and Degrees for Sale: Understanding Informal Exchanges in Kazakhstan’s Education Sector,” *Problems of Post-Communism* 66 (5), pp. 329–341.

“Changing Perceptions of Informal Payments under Privatization of Health Care: The Case of Kazakhstan,” *Central Asian Affairs* 6 (1), pp. 1–20.

2020年「中国・新疆ウイグル自治区のカザフ人：不法入国とカザフスタン政府のジレンマ」アジア経済研究所ウェブサイト（IDEスクエア）、全14頁。

2021年「2020年キルギス共和国政変の背景と帰結：腐敗に蝕まれる「民主主義の島」」アジア経済研究所ウェブサイト（IDEスクエア）、全12頁。

小論・読み物など

1989年「手作りの友情：第4回日韓学生会議」『現代コリア』297、53–61頁。

1995年「ロシア極東（日本における発展途上地域研究1986～94・地域編）」『アジア経済』36（6）、352–359頁。

1998年「アメリカの中央アジア研究（研究情報）」『現代の中東』25、63–67頁。

1999年「カザフスタン／民族語の復興とそのジレンマ：国家語の制定をめぐって」『アジ研ワールド・トレンド』42、19–20頁。

2000年（Aleksei Nekrasovと共著）「フォト・エッセイ カザフスタン：聖なる場所の復興」『アジ研ワールド・トレンド』57、31–34頁。

2002年「中央アジア諸国における米軍のプレゼンス：歴史的チャンスか、新たな紛争の種か」酒井啓子編『「テロ」と「戦争」のもたらしたもの：中東からアフガニスタン、東南アジアへ（アジ研トピックリポート45）』アジア経済研究所、51–60頁。

「カザフスタン／ナザルバエフ大統領の素顔：独裁者か、裸の王様か」『アジ研ワールド・トレンド』79、4–7頁。

2003年「カザフスタン／民族運動の抑圧と懐柔」『アジ研ワールド・トレンド』94、39–41頁。

2004年「旧ソ連のロシア人問題：ロシアにとっての「同胞」とは？」『アジ研ワールド・トレンド』104、17–19頁。

2005年「カザフスタンのウイグル人」『アジ研ワールド・トレンド』112、24–27頁。

「日本人のみた外国 便座の謎：旧ソ連トイレ事情（カルチャー・ショック）」『アジ研ワールド・トレンド』119、48頁。

2006年「カザフスタン・ウズベキスタン国境にて」『現代の中東』41、1頁。

2007年「カザフスタンにおける首都移転：「処女地の町」から首都（アスタナ）への変貌」『アジ研ワールド・トレンド』142、16–19頁。

2011年「パートナー探しは海外で（異文化言い分EVEN）」『アジ研ワールド・トレンド』185、56–57頁。

「アルマトゥにおける物価高と収入格差」アジア経済研究所ウェブサイト（海外研究員レポート）、全6頁。

「物価高と家計の謎：カザフスタン・アルマトゥからのレポート」『アジ研ワールド・トレンド』194、42–45頁。

「下院選挙を控えたカザフスタン：経済格差と社会不安」アジア経済研究所ウェブサイト（海外研究員レポート）、全5頁。

2012年「インタビューは時の運（フィールドワーク心得帖 第31回）」『アジ研ワールド・トレンド』207、42–43頁。

2013年「カザフスタンにおける日常的腐敗：フィールドワークに基づく考察」『アジ研ワールド・トレンド』209、37–42頁。

「カザフスタンのコイン：独自通貨導入から現在まで」『アジ研ワールド・トレンド』215、22–23頁。

「父祖の地を目指して：カザフスタンに『帰還』する在外カザフ人」『アジ研ワールド・トレンド』216、27–33頁。

2014年「ロシアによるクリミア併合のインパクト：カザフスタンの対応と「ロシア人問題」」アジア経済研究所ウェブサイト、全3頁。

「特集にあたって（特集 途上国の出会いと結婚）」『アジ研ワールド・トレンド』226、2–3頁。

「「点数・学位売ります」：カザフスタンの教育機関における不正とその構造」『アジ研ワールド・トレンド』229、38–46頁。

2015年「市場経済化後のカネとコネ：カザフスタンの人々の暮らしはどう変わったのか」『アジ研ワールド・トレンド』238、51–57頁。

2016年「命の沙汰も金次第：カザフスタンの医療分野における贈収賄」『アジ研ワールド・トレンド』249、32–38頁。

2017年「ソ連：懐かしの機内食（世界珍食紀行 第7回）」『アジ研ワールド・トレンド』262、39頁。

「警官はなぜ賄賂を取るのか：カザフスタンの事例」『アジ研ワールド・トレンド』263、28–35頁。

2018年 “Agashka,” in Alena Ledeneva, ed., *The Global Encyclopaedia of Informality: Understanding Social and Cultural Complexity*, vol. 1, London: UCL Press, pp. 86–88.

「デニス・テン選手を悼んで：フィギュアスケーターの死がカザフスタン社会に問いかけたもの」アジア経済研究所ウェブサイト（IDEスクエア）、全5頁。

2020年「中国 巨大収容所と化す新疆ウイグル自治区：激化する米中対立とカザフスタンの思惑（IDE-JETRO × Country Review）」『国際開発ジャーナル』765、60–62頁。

2021年「カザフスタン：感染症には馬乳が効く（続・世界珍食紀行 特別編）」アジア経済研究所ウェブサイト（IDEスクエア）、全3頁。

「カザフスタン：変わらない政治、変化する社会」『ユーラシア研究』64、26–28頁。

書評

1995年「Edited by Anastasia Posadskaya; Translated by Kate Clark, *Women in Russia: A New Era in Russian Feminism*」『ロシア史研究』57、84–85頁。

2000年「Touraj Atabaki and John O’Kane eds, *Post-Soviet Central Asia*」『アジア経済』41（1）、104–108頁。

2005年（書評論文、半谷史郎と共著）「旧ソ連朝鮮人研究の現状：李愛俐娥著『中央アジア少数民族社会の変貌：カザフスタンの朝鮮人を中心に』を読んで」『アジア経済』46（10）、66−79頁。

2006年「Sally N. Cummings, *Kazakhstan: Power and the Elite*」『アジア経済』47（9）、49−54頁。

2008年（資料紹介）「水谷尚子『中国を追われたウイグル人：亡命者が 語る政治弾圧』」『現代の中東』45、63頁。

2009年「Bhavna Dave, *Kazakhstan: Ethnicity, Language and Power*」『アジア経済』50（10）、62−67頁。

2010年（紹介）「堀江典生編著『現代中央アジア・ロシア移民論』」『アジア経済』51（12）、81頁。

2021年「Diana T. Kudaibergenova, *Toward Nationalizing Regimes: Conceptualizing Power and Identity in the Post-Soviet Realm*」『アジア経済』62（2）、107−110頁。

翻訳

1991年（井上徹、梅津道子、篠田直彦、高柳俊男、宮内正義、米津篤八と共訳）現代語学塾『レーニン・キチ』を読む会編訳『在ソ朝鮮人のペレストロイカ』凱風社、全262頁。

1998年（田中水絵と共訳）アナトーリー・T・クージン著『沿海州・サハリン近い昔の話：翻弄された朝鮮人の歴史』凱風社、全317頁。

2008年ゲルマン・キム「外国人のみた日本 カルチャー・ショック？ NO、気候ショック？ YES！（カルチャー・ショック）」『アジ研ワールド・トレンド』158、46頁。

（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）

追　悼

大切な奈津子さんに捧げる

ドスム・サトパエフ
訳：宇山　智彦

人生は計画することができない。だからこそ、予測不可能で興味深いのだ。人生には常に偶然の出来事と偶然の出会いの余地があり、私たちの生きる道を魅力的なものにしてくれる。そして、さまざまな出来事と人々についての豊かな思い出は、この世での滞在の最後まで私たちと共にある。まさに「偶然」が、2000年代初め頃、まずはすばらしい学者として私が認識し、後には真の友人となる人を、私と引き合わせてくれたのだ。

それは、カザフスタンで政治・社会・経済が激しく変化し、それらの分析という領域がこの国でダイナミックなものになっていた時期だった。その頃、奈津子さんはカザフスタンの政治システムの形成過程と、そこに含まれる微妙なニュアンスや難問を研究していたので、私たちが開催する多くの専門家会合やラウンドテーブル、会議などに積極的に参加していた。

当時は、あらゆる変化や事件のダイナミズムを、理論的・応用的な政治研究の学問的な実験場としてとらえられるような、興味深い時代だった。まさにこの時期、カザフスタンでは、独立した分析業界が形成され、政治学の発展の基礎が作られ、職業的な専門家集団が形成されつつあっただけでなく、市民社会が活発に成長しつつあった。こうした集団の中で、奈津子さんは同僚、パートナー、友人であり、身内のような人になった。多くの専門家、ジャーナリストや政治家が彼女のことを知り、尊敬していた。カザフスタンの専門家集団にとって彼女は、真実と客観性を最優先するプロフェッショナリズムと研究倫理を体現する存在だった。それゆえに彼女の学術論文、インタビューや著書は高い関心を呼んできたし、これからもそうであろう。

たとえば、カザフスタンの闇市場と腐敗に関する岡奈津子さんの奥深い分析は、この難しいテーマの研究に大きな学問的貢献をなすものだった。これについての彼女の最初の論文、「ポスト・ソヴィエト・カザフスタンにおける非公式な支払いとコネクション」は、*Central Asian Survey* 誌で2015年に発表された。「売りに出される成績評価と学位：カザフスタンの教育部門における非公式な取引」と題する2番目の論文は、2018年に *Problems of Post-Communism* 誌で刊行された[訳注1]。教育システムにおける著しい腐敗がこの国にもたらす大

訳注1　この論文は同誌の2019年第5号に収録されたが、オンラインでは先行して2018年に発表された。

きなリスクに関する彼女の結論は、現実の事態と完全に一致している。学問的な仕事の中で奈津子さんは、腐敗した闇の関係の、現存するメカニズムを明らかにしようとしただけではなく、ソ連崩壊と急速な市場経済化の相互関係を解明しようとした。これらの現象は、普通のカザフスタン人の生活様式、人間関係とメンタリティを変化させていた。なぜなら、市場経済化改革の結果、ソ連的なブラート(訳注2)は金銭化したからである。

少し後になって、この相互関係をより詳しく明らかにする、カザフスタンの腐敗に関する本格的な学術書が日本語で出版された。私が日本に出張した時に、奈津子さんが誇らしげにこの本を贈ってくれたことを、私はとてもよく覚えている。この本が彼女の別れの贈り物となり、日本酒や日本のすばらしいビールを手に長時間親しく会話をする私たちの習慣が、永久に過去のものになってしまうとは、誰が予想できたろう。奈津子さんがカザフスタンに来るたびに、また私が日本に行く時にも、私たちは必ず会うのが古き良き習慣になっていたのだ。カザフスタンでは私の家で、家族と一緒に会うこともよくあった。日本では共通の友人であるミキさん(訳注3)も時々加わって、親しく楽しく話をしながら、昔のことを思い出し、その時の状況を議論し、今後の計画を立てたのだった。

まさにそうした会合の一つで、日本に関する本、それも観光案内ではなく、普通の日本人が生まれてから死ぬまでの生活と習慣を知り、理解するための助けとなるような本を、カザフスタンで出版しようという考えが生まれた。奈津子さんはすぐにこの考えを気に入り、支持してくれた。2015年の末、彼女は著者として、私は出版者として、この仕事に取りかかった。『もう一つの日本：茶の湯のない生活』と題する本のプロジェクトに一緒に取り組んだ半年間は、とても楽しく、満足のいくものだった。本の構成と内容を一緒に検討し、自分たちの家に保管している中から写真を選んだ。2016年の秋、本は文学プロジェクト「ソズ(訳注4)」の一環として、私の文化・啓蒙基金によって出版された。奈津子さんがこの本のプレゼンテーションのために、どれほどの喜びと動揺を感じながらカザフスタンに来たかを、私は覚えている。まずアルマトゥで、次にアスタナで行われたプレゼンテーションには多くのカザフスタン人が来場し、この本は大きな関心を呼んだ。これは驚くべきことではなかった。最も興味深い国の一つに関する、日本人自身の著者による本が、カザフスタン人のために、独立後のカザフスタンの歴史上初めて出版されたのだから。奈津子さんはこの謎めいた世界への扉を開き、日本を私たちにとって一層身近な存在にし、多くの人にこの国を訪れたいという気持ちを起こさせた。数年経った今も、この本は、カザフ人の魂を持つ日本人と、日本を愛するカザフ人の友情あふれる協力と創造的な意気込みの記念として、私の家の書架で重要な位

訳注2　入手しにくい物やサービスを、正規の方法以外で手に入れるために使われるコネ。ロシア語の原綴はблат。

訳注3　ロシアNIS貿易会ロシアNIS経済研究所の輪島実樹氏。

訳注4　「言葉」を意味するカザフ語。原綴はСөз。

置を占めている。

奈津子さんの悲劇的な逝去の後になって初めて、彼女は私個人にとって、謎めいていると同時に近しく親しい「もう一つの日本」そのものであったということに気がついた。彼女のカザフスタンの友人全員にとっても、私の家族にとっても、彼女は外国人ではなく、親戚のような心を持った身近な人だったのだ。

ちなみに、2021年1月生まれの私の末息子は、生まれた時から私の腕の中で揺られながら、日本の枕の上で寝ていた。これは、奈津子さんが2016年に自著のプレゼンテーションのためにカザフスタンに来た時にくれた、すばらしい贈り物である。この贈り物をもらった時、これが私たちの愛する奈津子さんとだけでなく、私たちの第三子の生後最初の数か月と結びつけて永遠に記憶され、家族の神聖な宝物の一つになるとは、誰も知り得なかったろう。私は今でも、このことを奈津子さんに話すことができなかったのを残念に思っている。我が家の食卓を囲んで次に会う時に話すことができるだろうと思っていたのだ。しかし、そのようにして会うことはもう二度とできなくなってしまった。何事も、先延ばしにしたり後回しにしたりせず、適切な時にやることが本当に重要だ。大事にし、愛し、尊敬している人に適時にものを言い、笑いかけ、そして単に会話することが。人生が儚く短いことを忘れないようにしよう。奈津子さんは、20年前に私の前に現れた時と同じく、思いがけず突然に去ってしまった。去ったとはいえ、温かく、懐かしく、永く残る思い出を置いていってくれた。どうか安らかに！

（カザフスタン・リスク評価グループ）

追　悼

岡奈津子さんを偲ぶ

クアニシ・タスタンベコワ

2022年1月27日に独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所新領域研究センター・ガバナンス研究グループ長（主任研究員）の岡奈津子さんが急逝しました。私はこのことを知ったとき、とても信じられませんでした。何かの間違いだと思いました。なぜならば、岡さんからお正月に年賀状をもらったばかりで、そこには「また話そう」と書いてあったからです。これは、電話やメール、最近ではZoomで話したときに、岡さんが最後に必ず言ってくれていたことばです。私はいつでも岡さんと話せると思っていました。それができなくなったと思うと心が引き裂かれ、涙が止まりません。新型コロナウイルスの影響でお別れも告げることができなかったので、ここで岡さんへの思いを伝えたいと思います。

私が日本に初めて来たのは2001年です。そのときは国費日本語･日本文化研修生（日研生）として筑波大学に1年間留学しました。当時、聴講していた「国際理解教育」という授業で、ソ連解体後に母国カザフスタンが独立国家となったこと、学校や生活で経験したことを話していた私に、授業を担当していた旧ソ連の教育制度・政策の研究者、嶺井明子先生が大学院への進学を勧めてくださいました。このアドバイスに従い、日研生を終えて帰国し大学を卒業してから、2004年に国費研究留学生として再び来日し、2005年に筑波大学大学院の教育基礎科学専攻に入学しました。岡さんとの出会いはこの時でした。でも、出会いといっても、まずは岡さんが書いた論文との出会いでした。当時、私はある種のアイデンティティ・クライシスを経験していました。カザフ人でありながら、カザフ語が自由に話せなかった自分がいわゆる「半熟カザフ人 шала қазақ」ではないかと悩んでいました。いろいろ調べていくと、この「半熟カザフ人」という現象、概念はカザフスタンの独立後の民族・言語政策に関係があることが分かり、修士論文では言語教育政策における母語教育の保障をテーマにしました。そのとき、先行研究として読んだ論文の中に岡さんの「民族語の復興とそのジレンマ：国家語の制定をめぐって」（『アジ研ワールド・トレンド』第42号、1999年、19–20頁）があったのです。この論文は、多民族・多言語国家カザフスタンにおいて基幹民族であるカザフ人の民族意識が高揚している中で、カザフ語をこれまで強固な政治的、経済的、社会的地位を占め

ていたロシア語に代わる民族間共通語にすることの難しさを指摘していました。ロシア語、カザフ語、英語、日本語で読んだたくさんの先行研究の中でこの論文には大きな刺激を受けたことを今でも鮮明に覚えています。その後、ひたすら岡さんの論文を読み進め、自分の問題意識を磨いていきました。言語教育政策の複雑な背景を指摘することにおいて岡さんのこれらの論文は多いに参考になりました。

修士論文を書いていたときから私は岡さんに会って、直接話をしたいと思っていました。2007年3月28～30日に行われた日本中央アジア学会第9回まつざきワークショップに参加しました。ここで岡さんに会えるのではないかという思いがありましたが、あいにく岡さんは参加していませんでした。そのとき私は博士後期課程への進学が決まっていましたが、家庭の事情で1年間休学をしました。2009年4月に復学してから思い切って岡さんにメールを送りました。岡さんからその日のうちに返信がありました。私は自分の研究テーマについて、博士論文の一環として帰還カザフ人（оралман、2021年から кандас）の子どもたちがロシア語ができないことで直面する問題について調査していることを書きました。すると、岡さんは自分の論文「祖国を目指して：在外カザフ人のカザフスタンへの移住」『移住と「帰郷」：離散民族と故地』調査研究報告書、アジア経済研究所、2008年）を送ってくれました。この論文を参考にしつつ、私はフィールド調査を進め、岡さんのアドバイスでその調査報告を『日本中央アジア学会報』第6号（2010年3月）に投稿しました。査読者はもちろん匿名でしたが、おそらく岡さんに査読してもらえたのではないかと思います。

以降、岡さんと頻繁にメールのやり取りをしていました。当時、私は博士課程を修了するために、生後6か月の長女をカザフスタンに置いて来ていて、とても寂しかったのです。愛娘から自らの意思で離れ、研究を続ける意義を見出せなくなったとき、ちょうど長男の出産を控えていた岡さんからはたくさん温かいことばをかけてもらって、心の支えになりました。また、カザフスタンの腐敗した政府とそれを許している人々への怒りと虚しさを長文のメールで岡さんに送ったときも、大変多忙にもかかわらず全部読んでくれて、丁寧に返信してくれました。岡さんは「その怒りを研究に昇華させて。きっと良い研究になるよ」と励ましてくれました。

岡さんが2011年にカザフスタンで日常的に行われている贈収賄のフィールド調査のためアルマトゥ市に約一年滞在していた頃、私はそのインタビュー調査の一部に協力しました。私はアルマトゥから60キロぐらい離れている町の出身ですが、そこに暮らす私の親戚一同は学校、病院、行政機関、警察などにおいて、まさに日常的に贈収賄を経験していたことを岡さんに話したら、インタビューを設定してもらえないかと依頼されました。もちろん、私は全面的に協力しました。これは自分が母国の発展に貢献する行動だと思いました。結果的に岡さんが出版した『〈賄賂〉のある暮らし：市場経済化後のカザフスタン』（白水社、2019年）

は大きな反響を呼び、国内外で高く評価されています。これに少しでも携わったことを誇りに思います。ここで、思い出すエピソードがあります。岡さんが私の親戚へのインタビューを終えて、アルマトゥに帰ろうとしていたときでした。私がバスターミナルまで見送ったとき、岡さんは、カザフスタンの贈収賄の問題を取り上げるのに、日本でも汚職があるのによくもほかの国のことを批判的に書けるね、と言われないかといつも悩んでいると話してくれました。私はそのことばにとても感銘を受けました。岡さんはただ研究関心があってカザフスタンの問題を研究しているのではなく、少しでもよくなってほしいという誠実な願いがあるから研究していることが分かりました。今度は、私が岡さんを励ます番でした。賄賂の話を岡さんのように真正面から取り上げることがとても大事で、カザフスタン国内の研究者には見えないことや批判するのに躊躇するところまで、一言も隠さずに書いてくれることがカザフスタンの人々のためになる、と熱く語る私に、「分かりました。クアニシがそういうなら、堂々と書きますね」と笑ってくれたことをいつまでも忘れません。

その後、私は2012年に博士号を無事に取得し、帰国して、就職活動をしてみましたが、どうやらカザフスタンでは自分の望むように自由に研究ができないことが分かり、翌年に家族4人で日本に戻って現職に就きました。岡さんにこのことを祝福してもらい、正しい決断だったと激励してもらいました。そして、相変わらず研究やプライベートの悩みを岡さんに聞いてもらい、いつも鋭くかつ優しく的確なコメントやアドバイスをいただいてきました。もちろん、カザフスタンの政治・経済・社会のことについてもたくさん話し合いました。また、岡さんのカザフスタンでのネットワークを活用して、私が必要としていた情報収集もできました。岡さんでなければぜったいにできなかったことです。

2020年には新型コロナウイルスが猛威を振るい、自粛モードが日常化し、会いたい人には簡単に会えない日々が続く中、2回岡さんとZoomで2時間以上話し合いました。なんの理由もなく、ただ今はなかなか会えないのでZoomでも話そうね、という岡さんの何気ない声掛けでした。そのとき、岡さんが体調を崩していたこともあり、私にはどうか健康だけは大事にしてね、となんども注意してくれました。今、思い出すと心に刺されることばです。そこで、岡さんの体調に配慮も忘れてまたこちらの悩みを相談しました。それは、私の日本中央アジア学会への入会です。上述したように、私は大学院生時代には本学会に入り、まつざきワークショップで発表して、また学会報にも投稿していますが、学位取得後帰国し、学会を離れてしまいました。就職後は専門分野の教育学関係の学会を中心に活動してきましたが、やはり中央アジアの教育はあまりにもマイナーな分野であり、こちらの問題意識を共有できる仲間になかなか出会えませんでした。孤独を感じながらやはり日本中央アジア学会に戻るべきかな、ただしばらく離れているから再入会することは大丈夫なのかなと悩んでいると岡さんに話したら、ぜひ入会するように勧められました。教育の専門家はいないかもしれ

ないが、やはり地域の特性を知り尽くしている会員ばかりなので、大いに刺激になるのではないかとまたも励まされました。そのことばを胸に本学会に入会し、昨年度は発表もできて、今後は自分が居場所にできる学会ができたことに心が落ち着いたのは岡さんのおかげです。

岡さんは一番初めのメールから私に自分を奈津子と呼んでほしいと書いてくれたので、私はずっと奈津子さんと呼んでいました。最後に奈津子さんに次のように言いたいです。

奈津子さん、いつも優しく見守っていただき、さりげなく背中を押していただき、本当にありがとうございました。奈津子さんは私にとって優しい先輩であり、厳しいメンターであり、良き友達でした。奈津子さんとお話ができなくなったことをまだ受け入れられない状況です。でも、今までかけていただいたことばを常に胸に秘め、奈津子さんの研究姿勢をお手本にし、前を向いて生きたいと思います。奈津子さんはどうか天国から見守ってくださいね。ご冥福をお祈りします。

（筑波大学人間系）

日本中央アジア学会2021年度大会プログラム

■概要

日程：2022年3月20日（日）～3月21日（月・祝）
場所：オンライン（会議アプリケーションZoom）

■プログラム

● 3月20日（日）

13：30～13：40　開会挨拶

13：40～15：45　個人発表①　　司会：坂井弘紀（和光大学）

松元晶（北海道大学）
「1960年代カザフ映画に映されるナショナル・アイデンティティ――『テュベテイカをかぶった天使』を一例として――」

討論者：帯谷知可（京都大学）

加藤優弥（筑波大学）
「カザフスタン非核外交の展開――核不拡散規範の受容から構築まで――」

討論者：湯浅剛（上智大学）

16：00～17：30　パネルセッション①
「中央アジア・オアシス研究の今後――堀直著『清代回疆社会経済史研究』の出版を記念して――」

趣旨説明・司会：小沼孝博（東北学院大学）

澤田稔（富山大学）
「堀直先生の経歴と業績」

小沼孝博（東北学院大学）
「『清代回疆社会経済史研究』の出版とその意義」

塩谷哲史（筑波大学）「論評①：水利と文書研究の観点から」

木村暁（東京外国語大学）「論評②：オアシス都市研究の観点から」

● 3月21日（月・祝）

9：00～12：00　個人発表②　　司会：梅村坦（東洋文庫）

星野愛花里（北海道大学）
「キルギスにおける農民組織の類型化と発展課題」

討論者：渡邊三津子（奈良女子大学）

入山美保（筑波大学）
「キルギス共和国の日本語学習者の留学経験と進路選択」

討論者：伊澤映子（桃山学院大学）

ローザ・トクトスノワ（東京大学）
「ポストソビエトキルギスの農村若年の高等教育への移行――追跡インタビュー調査を通じて――」

討論者：二瓶直樹（早稲田大学）

12：50～13：40　日本中央アジア学会総会

13：45～15：45　個人発表③　　司会：磯貝真澄（千葉大学）

楊曦晨（筑波大学）
「1850年代清朝の対ロシア政策――伊犂通商条約締結の背景を中心に――」

討論者：中村朋美（日本学術振興会（京都大学））

志田夏美（京都大学）
「中央アジア絨毯コレクションの形成――帝政期およびソ連期の民族学的調査の比較――」

討論者：今堀恵美（東海大学）

16：00～17：30　パネルセッション②　公開
「マイノリティ研究の新地平――ユーラシア近現代史の多声的再構成に向けて――」

趣旨説明・司会：秋山徹（早稲田大学）

秋山徹（早稲田大学）
「マイノリティの歴史叙述――サルトカルマクの歴史書を翻訳して――」

植田暁（アジア経済研究所）
「ソ連初期の「ウズベク人」創出におけるマイノリティ集団」

田村うらら（金沢大学）
「マイノリティから汎テュルク主義のアクターへ――トルコにおけるユルックの現在――」

討論者：野田仁（東京外国語大学）

※共催
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「近代中央ユーラシアにおける歴史叙述と過去の参照」（研究代表者：野田仁（東京外国語大学））

科研費基盤研究（B）「牧畜社会におけるエスニシティとエコロジーの相関」（研究代表者：シンジルト（熊本大学）、課題番号 17H04538）

＊発表者、司会者、討論者の所属はいずれも発表時のものです。

1960年代カザフ映画に映されるナショナル・アイデンティティ
──『テュベテイカをかぶった天使』を一例として ──

松元　晶

本報告では、『テュベテイカをかぶった天使』（以下『テュベテイカ』）を切り口に、1960年代のカザフの文化人が模索した自己表象の在り方と、自己表象を通して見えるナショナル・アイデンティティを検討する。ソ連にとって「未開の地・中央アジア」という言説は、社会主義の重要性と伝統からの「解放」を説くために機能した。ソ連国内で「最も重要な芸術」である映画によって中央アジアを含む「周縁」を撮り続けたことで、ソ連の人々はソ連の空間が拡大していく過程／結果を目にし、ソ連中央が唱える言説は正当化された［Sarkisova 2017: 3］。

しかし民族的かつ独創的な映画制作がなされた中央アジアの「雪解け」時代（1963年、1964年から1972年頃まで）［Абикеева 2020: 132］から、中央アジアのイメージを問い直す動きが現れてくる。その原因の一つとして、第三世界とソ連の関係があげられよう。第三世界に接近するため、ソ連中央は中央アジアやコーカサス地域を第三世界の手本として紹介した［Caffee 2020: 92］。特に1968年のタシケント映画祭は、第三世界の文化人らと中央アジアの人々の交流を生み出す場として機能しただけでなく、映画人の公式／非公式のコミュニティ形成に繋がった［Djagalov 2020: 70］。第三世界における自己表象の形成過程において、第一世界／第二世界に承認されることで得られる自国の国際的優位性（「外側」の自己表象）と、強力なナショナル・アイデンティティ（「内側」の自己表象）がみられた［李 2014: 112–131］。ソ連の映画祭は、第三世界の映画に対し、「内側」の自己表象を追求する機会と、「外側」の自己表象を満たす機会を提供した。実際、中央アジアの映画人らも第三世界の映画人ら同様に国際的なソ連の優位性を前面に押し出しつつ、自民族の発展を表した。

「雪解け」以前、中央アジアの人／空間のイメージは主にロシア人によって作られてきた。非ロシア人である「他者」のイメージとソ連人である「我々」のイメージの両立は常に求められてきた。しかし、ソ連映画全体で「雪解け」の機運が高まると、新たな映画の表現方法として、中央アジアのイメージは変容した。中央アジアでは、「我々とはだれか」という現地の文化人が共通して抱いていた課題に自ら応えようと、従来のイメージを修正したのである

［Christianna 2021: 38］。特にカザフの文化人らは「遊牧民」や「ステップ」のイメージを修正しながら、ソ連社会が求める従来のイメージの「維持」に努め、自己表象を形成していく。

カザフ映画の父とされるシャケン・アイマノフが生み出したミュージカル映画『テュベテイカ』では、カザフ音楽の捉え方を音楽のジャンルに重ねて表している。ソ連の影響を受ける前の伝統的な音楽を愛する年配者と、西洋／ソ連化した民謡を「我々」の音楽ととらえる若者を対立させ、同じ民族同士で伝統と文明の対立を再生産させながら、カザフ文化が持つ「我々」像のイメージが多様であることを示す。また、ジャズを楽しむカザフの若者の姿は、60年代のソ連の若者全体特有のものであり、民族的な出自は関係なく、ソ連の国際的優位性を示しており、ソ連社会が国際社会に乗り出した姿と重なるのである。『テュベテイカ』では、若者の国際的繋がりだけでなく、東洋の女性が持つ自らを解放する力が描かれている。以上のような意識的に第一世界、第二世界と重なり合うシーンは、同時代のカザフ文化に国際的優位性を与える一方で、文化的な非対称を生み出している。

映画に映されるカザフの伝統は過去のものとされる一方で、西洋やロシアと比較されず、従来の「未開」のイメージとは異なるイメージを模索しているようである。初期のカザフ映画に比べ、60年代にはカザフ人が主体的に映画に関わることができたこと、更にはアイマノフ監督の関心の一つであるカザフの景観／文化の芸術的側面が部分的に演出されることで、カザフの民族への帰属意識が示されている。アイマノフ監督は、伝統を「再発見」する一方で、伝統との距離を一定に保ち、現代文化との共存を図っている。現代文化と伝統文化の両立が、60年代に見られた複雑なナショナル・アイデンティティだといえよう。アイマノフ監督は、現代文化と伝統文化を「平等」に映すことで、カザフの文化人の課題であった従来のイメージの修正と維持に応えたのである。ソ連社会の枠組みによって、カザフの自己表象は伝統回帰だけでなく、ソ連が唱える言説から遠くないものが描かれなければならず限界があったのである。

参考文献

Bonin, Christianna. 2021. “The Art of the Sixtiers in Soviet Kazakhstan, or How to Make a Portrait from a Skull,” *Central Asian Survey* 40(1), pp. 34–56.

Caffee, Naomi. 2020. “Between First, Second, and Third Worlds: Olzhas Suleimenov and Soviet Postcolonialism, 1964-1973,” *Russian Literature* 111/112, pp. 91–118.

Sarkisova, Oksana. 2017. *Screening Soviet Nationalities*, London/ NY: I.B.Tauris.

Djagalov, Rossen. 2020. *From Internationalism to Postcolonialism: Literature and Cinema between the Second and the Third Worlds*, Canada: McGill-Queen’s University Press.

Абикеева Гульнара. 2020. История кино Казахской ССР, перестройки и первых лет независимого

Казахстана // *История национальных кинематографий: советский и постсоветский периоды* / Под ред. Н. А. Кочеляевой, А. П. Николаевой-Чинаровой, Е. В. Пархоменко. М., С. 117–158.

李英載 2014『東アジアにおけるトランス／ナショナルアクション映画研究：冷戦期日本・韓国・香港映画の男性身体・暴力・マーケット』東京大学博士論文。

（北海道大学大学院文学院）

カザフスタン非核外交の展開
── 核不拡散規範の受容から構築まで ──

加藤　優弥

本報告では、1991年にカザフスタンが独立してから今日に至るまで、核不拡散規範を受容・構築してきたプロセスを明らかにすることを目的とした。2022年2月24日から国連で継続的に採択されてきた核不拡散規範に関わる様々な決議への投票行動、関連条約の署名批准年度、関連条約実施機関との関係などを参考にしながら、1991年12月から2021年12月までの期間を4つに区切り、それぞれの時期における核不拡散規範に対するカザフスタンの態度がどのようなものであったのか説明した。

第1期（1991年12月～1992年5月）は、カザフスタンが独立してから核兵器不拡散条約（NPT）に加盟することを約束したリスボン議定書に調印するまでの期間である。カザフスタンは独立後、旧ソ連の核兵器を自国領内に抱えることになった。カザフスタンにとって中国とロシアは安全保障上の潜在的脅威であったため、核兵器は自国を防御する上で有効な軍事的アセットになりえたが、アメリカやロシアはカザフスタンが核兵器を放棄し非核兵器国としてNPTに加盟することを望んでいた。1991年12月のアルマアタ協定、アルマアタ宣言、ミンスク協定においては、カザフスタンの戦略核放棄は規定されていない。交渉は1992年以降も継続されており、その過程で核不拡散規範を拒絶する態度を示すこともあった。しかし、最終的にはリスボン議定書を締結し、NPTに非核兵器国として加盟することを約束したのであった。

第2期（1992年6月～1995年5月）は、リスボン議定書に調印してからすべての核弾頭を移送するまでの期間である。NPTに非核兵器国として加盟するためには、国内の核兵器を撤去するだけでなく、国際原子力機関（IAEA）の査察措置を受け入れる準備を要する。戦略核放棄のプロセスは滞りなく進んでおり、1995年5月にはすべての核兵器のロシアへの移送が完了している。1994年2月14日、カザフスタンはNPTに非核兵器国として加盟し、同年7月26日には、IAEAとの保障措置協定（CSA）に合意している。これは、核不拡散規範を遵守しているかどうかを検証する査察措置を受け入れたということであり、規範を受容していると解される。

第3期（1995年6月～2014年2月）は、すべての核弾頭が撤去されてからロシアによるクリミア併合前までの期間である。この期間において、カザフスタンはCSAよりも高度な検証レベルの保障措置を受け入れるために、IAEAと追加議定書に自発的に署名している。また、2006年には中央アジア非核兵器地帯条約に署名しているほか、2010年には低濃縮ウランバンクのホスト国になることを表明しており、規範に対して構築的である。調査の対象とした関連する国連決議は、2010年以降すべて賛成票であり、特に2013年はロシアと投票行動が全く被っておらず自律的であるといえる。

第4期（2014年3月～2021年12月）は、クリミア併合後から現在までの期間である。ロシア系民族問題を抱えるカザフスタンにとって、クリミア併合はロシアとの関係に若干の緊張関係をもたらしうる出来事であった。しかし、ロシアを安全保障上の脅威とまで認識するには至らず、2018年には核兵器禁止条約に署名し、調査対象の国連決議への投票行動もすべて賛成票であることから、核不拡散規範を構築する動きがこれまでと同様に見られる。このように、クリミア併合後もカザフスタンは第3期までの非核外交を継続できており、一貫性が認められる。

これら4期を通して見ると、第1期においてカザフスタンは規範に対して拒絶的な態度をとることもあったが、第2期以降は規範を受容していることがわかる。第3期以降においては、新たな規範を構築していく様子も見られ、その特徴として自発性と自律性が認められる。これらの特徴は、クリミア危機後の第4期にも見られ、構築的な態度が一貫していると評価できる。2022年2月24日以降のロシアによるウクライナ侵略をうけて、カザフスタンの非核外交が変容するのか、それとも維持されるのか注視される。

討論では、第3期においてアメリカの影響を強く受けている可能性はないか、第1期においてカザフスタンが拒絶の態度を示したのはなぜか、ブダペスト覚書の意義は何かという点が議論された。また、フロアからは、拒絶、受容、構築したというのは結果論であり、政権内部の議論を含めた内面化のプロセスやロシアの態度の変化について軽視しているとの指摘があったほか、カザフスタンが核保有した場合の核戦略について質問があった。今後の研究展望として、カザフスタン内部の動向を追いかけることによる緻密な議論が求められるほか、30年間の国際的な核不拡散規範の変化とカザフスタンの非核外交を照らし合わせる必要もあるだろう。

（筑波大学大学院国際公共政策学位プログラム）

キルギスにおける農民組織の類型化と発展課題

星野　愛花里

キルギスではソ連独立後の土地分配により小規模零細な農家が生み出された。農家は生産資材の確保や生産物の販売、融資などの個人レベルでは解決できない点で未だ問題を抱えている。この状況に対して海外ドナーによって農民組織(1)が設立されたものの、活動の停滞が多く見られる［Lerman and Sedik 2017］。自給経済の強さがその主な要因と考えられるが、農家が今後の商品経済化に対応していくためには、キルギス農業で発展する農民組織の形態を考える必要がある。しかし、農民組織に関する既存研究では、取扱品目や利用内容などの機能面で農協が評価されていない他、法整備や政策提言のためのマクロな視点が多く、地域農業に沿った研究はなされていない。

本研究では、全国段階の組織で農協へのコンサルタントやロビー活動を行うキルギス協同組合連盟（以下、CUK）の提供資料および聞き取り調査と、農協への聞き取り調査により、農民組織の類型化を目的とする。具体的にはCUK提供資料によって、設立年、地域、構成員属性、取扱品目、活動性の5項目で加盟農協の現状整理を行う。構成員属性では親族型、コルホーズ型、有志型、連合会型、その他の5つに、取扱品目では耕種、畜産、耕種・畜産、果樹、乳加工、その他の6つに、そして活動性については、CUKと連絡が取れ、構成員がおり、事業が成り立つことを「活動的」と分類した。これにより3つの農民組織の類型を提示し、活動的な農協の実例から考察を加えたい。なお、調査地往来の制約により調査対象農協を北部4州に限った。

現状については、全国327農協（2017年政府統計局より）のうち、およそ7割にあたる232農協（2019年時点CUK加盟農協数）がCUKに加盟しているが、活動的な農協は32（15%）にとどまる。特に2003～2007年の海外ドナーによる農協発展プロジェクト期間に多くの農協が設立したが、多くが親族型で活動的ではない。取扱品目についてみると、耕種と畜産（①）

(1) キルギスにおいて協同組合という形態が発展していくのか断定できないため、本研究では「農民組織」という言葉を用いる。なお、その一つの形態が「農協」であり、実際「cooperative」を名称に持つ組織が多いことから、実例に触れる場合は「農協」を用いた。

のうち、親族型の占める割合は86%と他取扱品目よりも高い。同様に、有志型は果樹（②）および乳加工（③）で多い。順に①「農事組合法人[2]型」②「専門農協[3]型」③「特約組合[4]型」とし、それぞれの活動的な農協の実例を見ていく。

①のイチュケスー農協（2017年調査）は、2008年に設立。13戸の構成員で、農地面積は88haある。作付は穀類61ha、馬鈴薯13ha、牧草34haであり、農協がトラクター2台と倉庫を所有しているため、農業生産の他作業受託や倉庫利用、製粉などの事業を行う。同じく①にはザリャ農協（2013年調査）も当てはまるが、構成員260戸に農地面積885haというコルホーズを基にした大規模農協で、主に種子生産と家畜生産事業を行う。②はクレドバック農協（2013年調査）である。設立は2006年で12戸の構成員がおり、構成員所有農地36haの作付はアプリコット30ha、リンゴや梨等6haである。資材購買や販売の他、農協所有の倉庫の利用事業を行っている。③は農協ではなく乳業メーカーである。未調査であるものの、CUKへの聞き取り調査（2022年3月実施）によると、牛乳や乳製品の需要が増している都市近郊において、中間集乳業者を排除した効率的な集乳のために、農協設立が求められているという。

以上より、耕種と牧畜においては、農協が生産事業や利用事業を行う場合多く、これを①と分類できる。そのうち、コルホーズを基とした土地集約型で大規模な場合は「生産農協型」となる。一方で、農協が生産を行わず、果樹に関わる経済事業や倉庫の利用事業を行う場合は②、乳加工事業を行う場合は③となった。①については、ステップ地域の遊牧にロシア帝国以降に導入された耕種が加わった複合経営が現在の農業生産の土台となっているため、小規模な生産基盤を合わせることで生産性を高めた動きと説明できる。このうち、特に自給的な果樹と生乳の商品化に必要となった組織が②と③である。発展課題には、①では機械の更新などの設備投資、②では付加価値を付けるための加工への着手、③ではトレサビリティの導入等が挙げられた。本研究は、数少ない活動的農協を対象として類型化したため、これまでの農協全てが当てはまるわけではないが、発展可能性のある一つの方向として提示したい。

参考文献

Lerman, Zvi and David Sedik. 2017. “Cooperatives in Kyrgyzstan: Findings from a Survey of Cooperatives and Users,” in *Management and Governance of Networks: Franchising, Cooperatives, and Strategic Alliances*, edited by George W. J. Hendrikse et al., Cham: Springer, pp. 233–249.

（北海道大学大学院農学院）

(2) 農事組合法人とは農協法下の農業法人。戦後の小規模零細農家の協業法人化が基であり、自作農主義や既存の農協との兼ね合いにより農協法の下に位置付けられた。施設や機械の共同利用といった農協よりも小さな規模で利用事業を行うものを1号法人、農業経営を行うものを2号法人としている。

(3) 信用事業を行わず経済事業のみを行う農協。

(4) 販売先企業等が専属取引契約で原料調達のために設立される農協。

キルギス共和国の日本語学習者の留学経験と進路選択

入山　美保

本発表は、キルギス共和国（以下、キルギス）の日本語学習者の日本留学経験はその後の進路選択にどのような影響を与えたのか、インタビュー調査を行い、その結果から、キルギスで求められる日本語教育とは何か、留学制度を考察する一助とするものである。

2020年を目途に30万人の留学生受入れを目指す「留学生30万人計画」が2008年に日本政府により策定され、2019年に数値目標が達成された。「留学生30万人計画」とは、日本を世界により開かれた国とし、アジア、世界の間のヒト・モノ・カネ、情報の流れを拡大する「グローバル戦略」を展開する一環として計画されたものである［文部科学省他2008］。受け入れ国側の日本政府は、入口から出口まで一貫した取組により優秀な外国人留学生を戦略的に獲得し、少子高齢化に対応するべく、高度な日本語や日本文化に関する知識を有する外国人人材の育成及び日本と母国との相互理解の増進や友好関係の深化に貢献しうる人材を育成することを目指している。一方、送り出し国側では、文部科学省研究留学生として派遣された者が母国に貢献できる知識や技術を身につけても、日本で就職するといった頭脳流出、人材育成奨学計画（JDS）で留学後、母国に帰国しても、留学前にいた職場で活用されず、別の企業に転職するといった問題が起きている。受け入れ国側と送り出し国側の双方にとって利益のある頭脳循環の体制を構築する必要がある。

キルギスは、「H30対日世論調査国別集計表（中央アジア）」［外務省 2019］によると、世帯月収25,000KGS（約360US$）以下が54%を占め、私費で日本留学するのは難しい。日本に研究留学している者のほとんどは、文部科学省研究留学かJDSで留学している。そこで、日本留学経験がその後の進路選択にどのような影響を与えたのかを調べるために、留学後、キルギスに帰国した調査協力者Aに2017年3月、2018年3月に「日本語学習動機」「日本留学の目的」「日本留学経験が現在にいかされているのか」等（若林［2016］を参考）、半構造化インタビューを実施した。Aは、30代（当時）女性で大学教員をしながら、日本語学習機関で4年間、日本語を学び、約2年間の日本関連機関で勤務後、文部科学省研究留学生として6年間、留学した。研究テーマは、自殺予防であった。Aが日本留学を志した理由は、身近な者の自

殺が 2 件あり、勤務先で身の周りに自殺した人がいるか聞いた際、ほぼ全員が親戚、近所の人、同級生が自殺したと回答し、自殺者が多いということがわかったからであった。また、日本は自殺者が多い国ということが知られていて、研究が盛んだと思い、留学を志したとのことであった。キルギスでは自殺に関する研究をしている者はおらず、A が初の研究者であった。A は、博士の学位取得後、キルギスに帰国し、チャリティ活動を行っている。チャリティ活動は、ボランティアであるため、フリーランスの業務で生計を立てていたが、帰国から 1 年半後にキルギス国内の日系企業に就職した。A はキルギスの自殺者を減らしたいという気持ちから、留学を志したので、博士の学位取得後は、キルギスに帰国することを留学前から考えていた。しかし、帰国後、周りに「なぜ、帰国したのか。なぜ、キルギスのような給料の低い国で働くのか」と聞かれることが多いとのことだった。A は日本の給料が高いことを知っているが、キルギスでやりたいことが多いので、帰国したことは後悔していない。A はキルギスの若者が日本に留学するのは、日本で就職するための手段を得るためであって、留学後、母国に貢献しようと思って、帰国を考えているキルギス人に会ったことがないこと、研究留学をしても、奨学金給付期間に博士の学位を取得する人は少ないということを語っていた。

A へのインタビュー調査から、母国に貢献したい、母国を変えたい、良くしたいといった目的意識が高い留学経験者は帰国する傾向が高いということがわかった。しかし、その一方で、留学で学んだことをいかした進路を歩みたいが、それだと生活できないので、理想と現実の狭間で苦しんでいる留学経験者もいることがわかった。研究留学をしても、博士の学位を取得する人が少ないということから、研究のために留学するのではなく、日本に行きたいから留学するといった、研究目的が具体化していない者が多いこと、高度な日本語力不足も問題として挙げられる。キルギスの頭脳流出から頭脳循環への転換にはどのような方策があるのか、博士論文執筆のために具体的な研究課題を挙げ、それに取り組める力や日本語力を身につけるためにはどのような教育が必要か、さらに検討する必要がある。日本国内にいるキルギス出身の留学経験者に対してもインタビュー調査を行い、考察するのが今後の課題である。

参考文献

文部科学省他 2008「留学生 30万人計画の骨子の策定について」https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1420758.htm, 閲覧日 : 2022年 3月 13日。

外務省 2019「H30対日世論調査国別集計表（中央アジア）」https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000480993.pdf, 閲覧日 : 2022年 3月 13日。

若林親正 2016「ASEAN 元国費留学生から見た日本留学」https://www.huffingtonpost.jp/chikamasa-wakabayashi/overseas-education-japan_b_12765810.html, 閲覧日 : 2016年 11月 16日。

（筑波大学人文社会系）

ポストソビエト・キルギスの農村若年の高等教育への移行
── 追跡インタビュー調査を通じて ──

ローザ・トクトスノワ

問題設定

キルギスでは、ソビエト連邦の解体過程の中で1991年に独立して以降、社会主義から資本主義への転換を始めとした大きな変化を経験してきた。高等教育も例外ではない。ソビエト時代の高等教育は、社会主義的なシステムの中で統制され、私立大学はなく、無償で提供されていた。それに対して、ポストソビエトにおいては、私立大学の設立、大学教育の市場化、新テストの導入などが行われ、若者の高等教育への移行の条件は大きく変化している。本研究では、そのようなポストソビエト・キルギスにおける農村若年層の高等教育への移行過程を理解することをめざす。具体的には、大学進学を志望する場合、通学教育と遠隔教育という2つの大きな選択肢があるが、本研究では、全体の中で少なくない割合の選択肢（全大学生数の約3分の1）を占めている遠隔高等教育に注目する。遠隔高等教育は、ロシアへの移住労働を選ぶ若者の増加という現象と相まって、大学進学と国外移住労働の両立という進路の受け皿にもなっているが、本研究では、そうした進路に焦点をあてる。大学進学と国外移住労働の二者択一を回避するものとしての遠隔高等教育の選択要因を解明することを通じて、ポストソビエト・キルギスにおける農村若年層の高等教育への移行過程の一端を理解することを試みた。

方法

本研究では、2回にわたって同一の調査対象に対して追跡インタビュー調査を実施した。第1回目の調査（2017年に実施）では、ジャラル・アバド地域のA地区の農村の11年生（日本の高校2年生に相当）の4年制大学への進学志望者の11名（遠隔高等教育とロシアへの移住労働の両立という進路を選択した3名、通学制大学教育への進学志望者の8名）をインタビュー対象者とした。第2回調査（2020年に実施）に関しては、同じ対象者に対し、高校卒業から二年後に実施した。通学制大学教育を選択した8名の内、通学制大学教育で学び続ける意向を持つ者は4名であり、通学制大学教育から遠隔高等教育に進路変更をする意向を持

つ者、あるいは既に進路変更した者は4名であった。

結果

分析の結果、農村若年層は経済資本・文化資本の量を高め、再生産するために、通学制大学教育への進学を志望する一方、遠隔高等教育を質がよくないと認識し、志望しない傾向にあることがわかった。

本研究を通じて、高等教育へ進学する農村若年層の三つのグループが明らかになった。

一つ目は、通学制大学教育で学ぶことができないために、遠隔高等教育を高校卒業の段階から選択せざるを得ないグループである。彼らは、通学制大学教育に対する強い憧れがありながら、家族を経済的に支援するために、学業の合間に労働が可能な選択肢である遠隔高等教育を、高校卒業の段階から選択せざるを得ない。また、彼らは、キルギスには十分な給与が得られる仕事がないと認識しており、既にロシアへの移住を果たしたキルギス移民ネットワークの影響も受け、ロシアへの移住を決意している。

二つ目は、通学制大学教育に進学したにもかかわらず、大学入学後に遠隔高等教育に進路変更を決意しているグループである。彼らは、当初は通学制大学教育に奨学金か私費で進学するが、大学生活において経済的な支援が少なく、諸問題に直面し、大学において学習時間がなくなる。そのため、当初は希望していなかった遠隔高等教育に進路変更せざるを得なくなる。このグループの若者もまた、キルギスでは十分な給与を得ることが難しいと判断し、また移民ネットワークの影響も受け、ロシアへの移住を決意している。

三つ目は、通学制大学教育に進学でき、大学の段階でも通学制大学教育で学び続けられるグループである。このグループの若者の進路は希望どおりのものとなる。経済的・文化的資本の再生産に必要な専門的技術を学ぶため通学制大学教育に志望どおりに進学し、大学においても問題なく学習を継続できる者たちである。

キルギスの農村出身大学進学者は、通学制大学教育は、経済的・文化的資本を蓄え、専門的技術を学ぶための重要な教育機会であると認識している。それに対して、遠隔高等教育は、通学制大学教育で学ぶことできない状況に直面した場合の選択肢であるが、専門的技術は通学制大学教育ほど学べないこと、そして、海外への移住労働と両立できる選択肢として認識されている。

（東京大学大学院教育学研究科）

1850年代清朝の対ロシア政策
―― 伊犂通商条約締結の背景を中心に ――

楊　曦晨

1840–1842年の第一次アヘン戦争を終結させるため、清朝は欧米諸国と一連の条約を締結した。イギリスは南京条約（1842年）の締結により中国市場へ進出し、それと同時に清朝と欧米諸国との関係も変化していた。一方で、キャフタ経由の陸路貿易を行っていたロシアはイギリスを初めとする欧米諸国に対抗するため、西シベリア＝新疆間の民間貿易を条約に基づく貿易に「公認」するように清朝側に何度も求めた。そこで、1851年に露清両国は新疆のイリで伊犂通商条約を締結した。この条約の締結により、ロシアはイリとタルバガタイにおける無税貿易、領事裁判権、居住権など権利を得たとされる。本報告は、伊犂通商条約の締結交渉時に清朝側の対露交渉を担当した伊犂将軍の奕山のロシアに対する要求を検討することで、同条約の締結に対して清朝側が何に留意して交渉を進めていたのかに注目し、1850年代における清朝の対ロシア交渉のあり方を明らかにした。

まず、本報告は条約締結前の清朝がその西北辺境で直面していた状況を分析した。清朝は1825年に勃発したジャハーンギールらの「反乱」を鎮圧した後、新疆における様々な善後策を講じた。清朝は、新疆における官吏の評価制度とベクの選挙制度を改革するだけではなく、ジャハーンギールらの活動を支援したコーカンド・ハン国との断交、貿易の禁止など措置を取った。また清朝宮廷は、新疆の財政問題を解決するために、現地官僚と漢人の知識人が提案した新疆の西四城の放棄策、新疆と内地の一体化を促進する方法を採用しなかった。それより、清朝宮廷は基本的な統治方法を維持することとし、中央からの財政支援、屯田政策を拡大させた。1830年にジャハーンギールの兄のユースフ・ホージャはカシュガルに侵入した。相次ぐ領土侵犯に直面した清朝は、巡辺の範囲を縮小し、カルン外の問題への不干渉を原則とすることによって、西北辺境の一時的な安定を維持した。また、新疆における駐屯費用を節約するため、清朝は「内地」の漢人商人を新疆の南路に移住させたり、南北両路での開墾事業を発展させたりした。以上の分析から、1850年までに新疆における財政や軍事力は弱体化した状態にあったことが分かる。また、清朝宮廷はその状態に対して、全面的に統治政策を変更することより、経費を節約し、支配領域を収縮する傾向があった。

そのような背景の中、1850年に清朝宮廷と現地官員はイリ、タルバガタイ、カシュガル

の通商開放を検討し始めた。伊犂将軍の薩迎阿（在任 1845–1850年）、伊犂参賛大臣奕山は清朝宮廷の命令を受けて、新たな貿易拠点を開設する可能性について調査した。薩迎阿と奕山は新疆の現地状況に基づいて、カシュガルを除きイリとタルバガタイをロシアとの新たな貿易拠点として開放できると考えた。清朝宮廷は彼らの意見を受けて、ロシアのイリ、タルバガタイにおいて貿易に従事したいという要求を、認めることにした。しかし、カシュガルの通商開放は拒否した。それと同時に、ロシアとの通商規定を何に準じて定めるのかについて、清朝宮廷と現地官員との間で検討が行われた。薩迎阿と奕山は、キャフタで施行している規定に準じて新疆でロシアと貿易をすることは難しく、両国の紛争に対処することも困難であると考えた。また、新疆におけるカザフとの貿易制度に準じてロシアと通商規定を定めることは清朝のもう一つの選択であるが、彼らは、ロシアがカザフと違い清朝に服従している国ではなく、新疆にはムスリムが多くロシア人は言語が通じないため、相互に紛争が起きやすいだろうと判断した。そこで彼らは、露清間の貿易に、新疆においてカザフと慣行的に行っていた貿易の制度をそのまま適用できるとは限らず、別に規定を定める必要があると考えた。清朝は新疆の安定を重視しており、また露清両国の人々の間での紛争解決方法を定める重要性にも注目していた。

1851年7月に伊犂将軍になった奕山はロシアの全権コヴァレフスキーと条約の内容に関する審議を行っていた。裁判権に関して、奕山はロシア側の要求を受け入れて両国の犯罪者を別々に処理することとした。奕山はロシア側の要求を拒むと，清朝西北の新疆の安全が脅かされることを恐れていた。また、彼は清朝の民衆が犯罪者の処罰結果に対して不満を持ち，清朝領内で反乱を引き起こすことも懸念していた。そこで、奕山は清朝の犯罪者を新疆から甘粛省に護送することを提案した。清朝宮廷において咸豊帝は奕山の判断を認めた。しかし国子監祭酒勝保は、ロシアと新疆の間の貿易を許可すれば国境を安定させるのは難しいと指摘した。彼は両国の関係を安定させてきたキャフタ条約に準じて貿易規定を定めるよう提案した。そこで、咸豊帝は奕山に、新疆におけるロシアとの貿易をキャフタ条約に準じる形で、貿易の期間とロシア商人の人数について厳しい制限を加えるよう指示した。しかし、奕山は、それが現地の状況に合わない、ロシアとの条約締結がすでに完了しているという理由で、キャフタ条約に準じて伊犂通商条約を締結することが困難であるとの意見を咸豊帝に返答した。以上の経緯から、伊犂通商条約の締結過程においては、キャフタで施行していた規定と新疆におけるカザフとの貿易制度が長期にわたり貿易を安定させるものだったことを踏まえ、辺境の安定のために参考となる条約の雛型を見つけることが、当時の新疆当局と清朝宮廷にとって急務であったと言うことができる。

（筑波大学大学院人文社会科学研究科）

中央アジア絨毯コレクションの形成
―― 帝政期およびソ連期の民族学的調査の比較 ――

志田　夏美

本研究の目的は、「遊牧民の伝統」といわれる平織り絨毯からウズベク牧畜民の生活誌を描きだすことにある。従来、商業的にも学術的にもオアシス定住民文化に注目が集まってきたウズベキスタンの人々の多様な帰属意識や文化を明らかにすることを目指している。

現在のウズベキスタンの領域では、様々な民族部族が絨毯生産に従事してきた。現地研究者 E. Gyul′［2019］によると、ウズベキスタンの主要な絨毯生産地および生産者は、サマルカンド地域のウズベク諸集団、ヌラタ山間部のウズベク・トゥルクマン、カシュカダリア草原のアラブ、フェルガナ盆地のクルグズ、スルハンダリア州のコングラト（ウズベク）で、なかでもコングラトは平織り絨毯の製法を最も豊富に伝える集団であるという。けれども、彼女らはソ連期には調査対象とならなかった。なぜなのか。本発表では、中央アジア絨毯がどのように研究されてきたのかを確認した上で、帝政期の調査との比較を通じてソ連期の調査のあり方について考察した。

中央アジア絨毯研究は、帝政ロシア併合を機に本格化した。概ね、現地で標本資料を収集し博物館に所蔵すると、その製品群を分類整理することに終始してきた。本発表で扱う一次資料は、それらを収集した 2 人のロシア人民族学者によるものである。現地調査の実施時期に応じて帝政期とソ連期に区分した。前者は、ロシア人類学・民族学博物館のコレクションを収集した S. M. Dudin（調査時期 1900 ～ 02 年）の研究論文［1928］と報告書［2021（初出 1903）］である。後者は、中央アジア諸国の博物館コレクションを収集した V. G. Moshkova（調査時期 1929 ～ 46 年）の著作［1970］[1]である。

中央アジアのバザールでロシア商人が購入した絨毯は、オレンブルグを経由してロシアそしてヨーロッパへと渡った。当時、中央アジア絨毯は商人の購入先に応じて「ブハラ（bukharskii）」、「テキン（tekinskii）」、「カシュガル（kashgarskii）」という貿易品目名で識別されていた。前者は、コーカサス経由のペルシア絨毯と区別するものでオレンブルグ経由の絨毯

[1] 本書は、博士論文の執筆途中で病没したモシュコヴァの学術的草稿（ウズベク共和国科学アカデミー歴史・考古学研究所蔵）をもとに編纂・出版されたものである。

全般を指し、そのうち品質的に優れたものがテキン絨毯[2]として区別された。後者は、主に東トルキスタン産の絨毯を指した。中央アジア最大の絨毯バザールはブハラにあり、そのほかサマルカンドやヒヴァ、コーカンドなどの都市にも絨毯が集まった。「ウズベキスタンは絨毯の生産国ではなく消費国である」といわれる所以である。都市部では絨毯生産は行われておらず、近郊の農村や草原地帯から持ち込まれたものや近隣諸国の製品が売られていた。

現地調査により現物標本とともに生産者と生産地の情報がもたらされると、中央アジア絨毯は生産者の集団名を冠して識別されるようになった。帝政期の民族学者が示した分類は、デザインや品質を根拠とするものであり、ソ連期に整えられていく民族区分とは異なるところがあった。一方、ソ連期の民族学者は、地域や部族ごとに異なる特色を記録しながらも官製の民族に帰属させるかたちで体系化した。今日継承されている分類法はソ連期のものである。

またソ連期の調査は、中央アジア全域の絨毯生産地を踏査することを目的としていたが、コングラトのもとには訪れなかった。発表者は、これをソ連期特有の調査対象の偏向とみて、まず、調査対象となった集団が商品用絨毯の生産者ないし民族起源論の解明にデータ的に寄与する生産者である点を指摘した。その上で、自家用絨毯を小規模にしか作らないコングラトの絨毯づくりは商業化していない点で「発展」しているとはみなされず、調査対象から除外された可能性があること、あくまでコングラトという部族的識別はウズベク民族の下位概念であり重要視されなかった（他のウズベク諸部族と同一視された）可能性があることを指摘した。

しかしながら、本発表の質疑応答で、商業化や「発展」と調査対象の偏向を結びつけることについて疑問視する意見もいただいた。他の民族手工芸の場合もふまえて再度検討を試みたい。

さいごに、従来の研究の問題点と今後の展望を述べる。旧ソ連圏の研究では、絨毯製品やその作り手を集団単位でしかとらえていない。ソ連期には生産現場に直接赴く研究手法がとられたものの、人間を標本のように扱ったために分類整理に終始する研究の域をでることはなかった。発表者は、今後実施するフィールドワークで、官製の集団単位の枠組みにとらわれない議論を進めることを念頭に、あえて現地博物館等で発信される民族イメージを見聞しつつ、作り手と生活をともにすることで、外側の視点を意識した内側の視点を観察したいと考えている。その際、絨毯づくりは、牧畜民のアイデンティティと「知」の体系を学ぶ手がかりとなるはずである。

---

(2) トルクメン諸部族の一つテキンに由来する。テキン絨毯は概ねトルクメン絨毯と解することができるが、品質的に優れていないものはウズベク絨毯に含まれることもあった。

参考文献

Dudin, S. M. 1928. “Kovrovye izdeliya Srednei Azii,” *Sbornik Muzeya antropologii i etnografii* 7, pp. 71–166. [online] http://raretes.ru/biblioteka/dudin-kovrovye-izdeliya-sredney-azii/

———. 2021. *Otchet S. M. Dudina o poezdkakh v Srednyuyu Aziyu v 1900–1902 gg*. Moscow: Mardzhani.

Gyul′, E. 2019. *Kovry Uzbekistana: Istoriya, estetika, semantika*. Tashkent: Art Flex.

Moshkova, V. G. 1970. *Kovry narodov Srednei Azii kontsa 19 – nachala 20 vv*. Tashkent: Izdatel′stvo “FAN” UzSSR.

（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

中央アジア・オアシス研究の今後
―― 堀直著『清代回疆社会経済史研究』の出版を記念して ――

小沼　孝博

本パネルは、故堀直氏（1946–2020）の遺稿集『清代回疆社会経済史研究』（大阪大学出版会、2022年1月）の出版を記念し、堀氏の研究の特徴や学術的意義をふまえながら、中央アジア・オアシス研究の今後を展望する意図のもとに企画された。

堀氏は、中央アジア史研究において大きな足跡を残され、また1999年に開催された第1回のまつざきワークショップにも参加し、以来本学会の創設と運営に尽力された。その半世紀にわたる研究活動のなかで堀氏は、18–19世紀の清朝統治下で「回疆」と称された、中央アジア東部のタリム盆地一帯（現新疆南部）のオアシス社会の実態を解き明かすべく、当地域の社会・経済関係に関わる根本的な事象――交通・交易・貨幣・都市・農村・耕地・水利・農作物など――を地道に、しかし極めて精緻・実証的に分析された。それらの業績から主要な論考18篇を選集して刊行したのが『清代回疆社会経済史研究』である。

本パネルでは最初に、編者として論集の刊行に携わった澤田稔が「堀直先生の経歴と業績」と題する報告をおこなった。堀氏が発表した学術論考は、(1) 概論、(2)15–16世紀の中央アジア東部と明朝（①モグール・ウルス関係、②歴史地理関係）、(3)18–20世紀の中央アジア東部と清朝、の三つに大別できる。また、学部生時代からの積極的な学会・研究会活動への取り組みを紹介し、著者の研究歴を回顧した。

次に、同じく編者の一人である小沼孝博が論集の出版経緯と学術史上の意義を述べた。特異な政治・社会環境にあった清代回疆オアシスの歴史には、早い段階からアカデミックな関心が寄せられ、日本における中央アジア研究の分野でも大きなウェイトを占めてきた。そのなかで堀氏の研究は回疆オアシスの基層をなす社会・経済関係を解明し、その通時的・質的な変化や展開を世界史の流れや清朝統治の変遷とあわせて歴史的に位置づけることを目指すものであった。個々の知見や成果だけではなく、そのような研究の総体の体系的な把握を容易にすることが論集刊行の目的の一つである。また、使用される史料と分析手法の多彩さも当論集の学術的な意義として認められると指摘した。

続いて二人の報告者がそれぞれの観点から論評を試み、議論の深化・発展が今後見込まれ

る論点を抽出して研究の展望をおこなった。塩谷哲史「論評①：水利と文書研究の観点から」は、塩谷が専門とする中央アジア西部、就中アム河下流域（ホラズム地方）の水利・灌漑史に関する研究動向を整理し、そこから社会経済史の手薄さ、現地文書活用の不十分さ、及びミクロな社会像とグローバル・ヒストリーとを接続した議論の欠如といった現下の課題を析出させた。その意味において、オアシス社会の具体的な復原を目指した堀氏の研究手法や視点には、上記の課題を克服するための道筋が示されている。他方、建設兵団や人民公社の存在を念頭に、中国近現代における農業の「開発」と堀氏の議論はどのように結びつくのか、その妥当性も含めて考える必要があるとの提言をおこなった。

木村暁「論評②：オアシス都市研究の観点から」では、まず客観性と現地社会との共感を兼備する人文研究を求める堀氏の研究姿勢に触れた後、人類史研究の一環として実施されたそのオアシス都市研究が、都市の空間的構成や社会構造、都市と農村を包摂するオアシス共同体の生成と諸活動、特に経済の機能やメカニズムを実証的に解明する成果を残したと評した。今後の展望としては、周辺諸勢力との跨境的な社会経済関係を組み入れた総合的な地域史の構築、また近年進展が著しいロシア帝国の統治下におけるイスラーム法の運用実態に関する研究を意識しつつ、回疆における宗務者の役割や法的慣行の解明を取り組むべき課題として挙げた。さらに、中国領とロシア領におけるテュルク化の進度・遷移（進行／退行）という新たな比較研究の可能性を提起した。

質疑応答と討論の時間は限られていたが、遊牧（民）という要素を組み込んだオアシス研究のあり方、また現代ウイグル族の文化・文芸研究における堀氏の貢献についてコメントがなされた。本パネルを通じて得られた各論点を無駄にしないためにも、清代回疆オアシス研究への新規参入者の登場を強く期待したい。

（東北学院大学文学部）

マイノリティの歴史叙述
── サルトカルマクの歴史書を翻訳して ──

秋山　徹

中央アジア現代国家のあり方を考える際、各共和国のマジョリティを成す「名称民族」のみならず、マイノリティ集団への目配りが必要不可欠であることは言を俟たない。本公開パネルセッション「マイノリティ研究の新地平 ── ユーラシア近現代史の多声的再構成に向けて ──」は、中央アジア（ウズベキスタン、クルグズスタン）とトルコのマイノリティを対象に、文献史学のみならず参与観察やGIS（地理情報システム）といった新たな手法を用いた近年の研究成果をよりひろく共有することを目的として組織された。

本報告が取り上げるサルトカルマクは、ジューンガル帝国を形成したオイラト系集団の末裔である。19世紀中期に新疆からロシア領（イシククリ湖東南岸）へ移住し、以来150年にわたってクルグズスタンのマイノリティ集団として暮らしてきた。報告者はこれまでクルグズスタンのマジョリティであるクルグズに焦点を当てて研究を行ってきたが、昨年、サルトカルマクによって執筆された歴史系譜書 ── シャリプ・エゲンベルディエフ著『祖母ムシュラのサンジラ』（チェルペク、2006年）── を翻訳する機会を得た[(1)]。

本書『祖母ムシュラのサンジラ』の著者シャリプ・エゲンベルディエフは、1917年にカラコル近郊のチェルペクに生まれた。1936年にカラコル教育大学を卒業後、半世紀にわたり教育畑に勤務した著者が歴史書を著すこととなった背景には、学生時代に師事したテュルク学者フサイン・カラサエフの影響があった。カラサエフの助言にしたがい、祖母ムシュラをはじめとする古老たちから聞き書きを行い、ノートにまとめていたという。ソ連時代にも出版を計画したが叶わず、日の目を見たのはソ連解体後の1997年、地元チェルペクのローカル新聞においてであった。同紙に掲載された連載をまとめて刊行に至ったのが本書である。

本書は、全体としてサルトカルマクの名祖たちの事績に沿いながら、その集団形成を皮切りに、ロシア領への移住とその後の暮らしを中心に記すものであり、そこからは彼らのアイデンティティの様態に関わるいくつかの特徴を指摘することができる。この点について、本

(1) シンジルト著『オイラトの民族誌 ── 内陸アジア牧畜社会におけるエコロジーとエスニシティ ──』明石書店、2021年、249-269頁。

報告は、2021年に *Central Asian Survey* 誌に発表された同様のテーマを扱う論文［Baasanjav 2021］を参考にしつつ検討をおこなった。Baasanjav［2021］は、ソ連時代にサルトカルマクのクルグズ化が進展し、現状において、彼らが「ほぼクルグズ almost Kyrgyz」であると指摘するが、本書がクルグズの歴史叙述であるサンジラの形式を踏襲しつつ、クルグズ語で執筆されているということにも、彼らのそうした状況をうかがい知ることができよう。二つ目の特徴として、クルグズスタンやクルグズとの繋がりを強調している点が挙げられる。興味深いことに、本書がオイラト・モンゴル的なアイデンティティに触れることはほぼなく、サルトカルマクの「故地」をクルグズスタン東南部に相当する地域とみなし、19世紀後半に生じた、新疆からイシククリ湖東岸への移住を「故地への帰還」として記す。こうした記述の背景に透けて見えるのは、マイノリティである彼らが現代クルグズスタンの領域に暮らすことの正当性を意識していると思われる点である。マイノリティとしての彼らの生存戦略という点に関して、Baasanjav［2021］によれば、ソ連解体後のサルトカルマクのアイデンティティとして、カルマクを敵視するクルグズ民族主義を背景に、従来の「ほぼクルグズ」から「クルグズよりもクルグズ」な存在としての自己イメージの強調が観察されるとする。果たして、本書においても、イスラームの篤信者にして勤勉、勤労、教育熱心なサルトカルマク像が提示されていることを見て取ることができる。マイノリティである彼らの生存戦略、アイデンティティの様態、マジョリティであるクルグズ社会との距離感といった諸点について、より包括的な研究の展開が期待される。

参考文献

Baasanjav Terbish. 2021. “The Sart Kalmaks in Kyrgyzstan: People in Transition,” *Central Asian Survey* 40(3), pp. 313−329.

（早稲田大学高等研究所）

ソ連初期の「ウズベク人」創出における マイノリティ集団

植田　暁

本報告は、公開パネル「マイノリティ研究の新地平――ユーラシア近現代史の多声的再構成に向けて――」の第2報告として、量的資料を用いた研究の可能性を提示することを目指した。歴史統計は、それ自体歴史的コンテクストのなかで作成されたものであり、史料成立過程の解明は歴史研究の重要な主題である。統計資料は情報源としても重要であるが、量的情報から歴史事象を復元する際には記述資料を扱う際とは異なる工夫も必要となる。本報告では、報告者の研究の一部を方法論の面から紹介するとともに、現在進行形の試行錯誤を提示することで、量的史料の可能性と課題を浮き彫りとした。

量的史料を歴史研究に活用するための道具として、地理情報システム（GIS）を利用した。GISは様々な学問分野における活用が進んでおり、歴史学における活用事例も年々増大している。中央ユーラシア史研究におけるGIS利用は、イスラーム地域研究プロジェクトの一環として小松久男先生と後藤寛先生によって実施されたフェルガナプロジェクトが重要である。本報告もフェルガナプロジェクトの成果を基に発展した研究のひとつである。

旧ソ連中央アジアの民族名称とアイデンティティについては、膨大な先行研究が存在する。特に、1924年民族境界画定に関わる諸問題に関する研究は厚い。先行研究の成果をごく簡単に概括すれば、以下のように整理できよう。20世紀初頭までの中央アジアにおけるアイデンティティは、言語、宗教、系譜意識、生活習慣、人生儀礼、生物学的特徴など様々な要素によって影響される、多層的・状況対応的なものであった。人口統計資料における「集団」や「民族」は原則的に当事者の申告によるとされるが、回答はアイデンティティの一側面でしかなく、編纂過程においてもカテゴリーの整理や書き換えが行われた可能性が存在する。すなわち、統計の記録する「民族」や「マイノリティ」情報を歴史研究に利用する際には、厳密な史料批判が不可欠であることが先行研究によって指摘されているのである。

量的史料の視覚化とそれに基づく分析事例として二つの例を提示した。1例目は、1909年の史料に基づいてコーカンドオアシスの詳細な住民分布を復元したものである。空間的な諸集団の分布状況を、文献史学、人類学、考古学の先行研究と照らし合わせることでオアシス

の拡大過程を復元し、併せて1909年統計の史料的性質に関する評価を実施した。2例目は、フェルガナ盆地の住民構成を1909年と1926年の統計に基づいて村レベルで復元した時系列の比較である。1924年の民族別境界画定を挟んだ2時点の比較からは、サルト人からウズベク人へのカテゴリー変更という最も目立つ変化に加えて、ウズベク人以外の集団がウズベク人へと再カテゴライズされる過程やその他のマイノリティのカテゴリー変化に関する興味深い事例を得られた。

視覚的に印象的な二つの事例紹介に続いて、その背景と限界に関する整理を行った。二つの事例は量的情報の豊富なフェルガナ地方を対象としており、情報源として用いた統計資料も例外的に質の高いものである。同様の分析を他地域、他時点で行うことは実質的に難しく、1930年代以降に分析範囲を伸ばすことさえ容易ではない。

提示した事例についての分析を深める試みのひとつとして、1917年の農村人口統計と組み合わせる試行を提示した。1917年統計をこれまで全面的に利用しなかった背景として、情報に欠落があること、編纂が1920年であるため革命の前後いずれの認識を記録したものであるかの判断が困難であることがあった。以上の史料的限界を踏まえたうえで、特に変化の見られた村落を対象とした分析の結果を示した。具体的には、マイノリティのウズベク人へのカテゴリー変更やカシュガル人／ウイグル人に関わるカテゴリー変化が発生した時点について、新たな知見を提示することができた。

以上の事例紹介を踏まえて、量的史料を利用したマイノリティ研究の課題と可能性に関して整理を行った。統計資料は厳密な史料批判とともに利用すれば、記述史料などと組み合わせることで、記述史料のみからでは捉えられない情報を得ることができる。GISによる歴史統計資料の分析は傾向を見いだすことには適しているが、統計的手法によって因果関係の説明を行えるほど質の良い大量の歴史統計データを準備することは一般的には困難である。そのため、発見した傾向を説明する記述史料あるいは民族学報告などの調査が重要となる。

参考文献

植田暁 2020『近代中央アジアの綿花栽培と遊牧民――GISによるフェルガナ経済史――』北海道大学出版会。

小松久男・後藤寛 2009「中央アジアの動態を読む――GISによる地域研究の試み――」水島司・柴山守編『地域研究のためのGIS』古今書院、95–112頁。

（アジア経済研究所）

マイノリティから汎テュルク主義のアクターへ
――トルコにおけるユルックの現在――

田村　うらら

本報告が取り上げたのは、現代トルコ共和国において「ユルック Yörük」を自称する、テュルク系の「(元) 遊牧民」である。ユルックの原義は、トルコ国内で家畜を飼養しながら一定の周期で移動生活を営む遊牧民である。つまりユルックは、「移動性」と牧畜という「生業」を特色とした集団であり、クルド、チェルケスなどの民族的マイノリティではない。近代化前後から「粗野で遅れた」存在とみなされ差別されてきた、社会的マイノリティといえる。本報告の目的は、現代トルコにおけるユルックを事例に、社会的マイノリティが、現代的文脈における変容を経て主体性を獲得し民族のロジックを携えながら超国家的なアクターとなるその萌芽的過程を提示することにあった。

「現代トルコ共和国において、ユルックを自認する人びと[1]」の拡がりや公共的な存在感の増大が近年観察されるが、研究上ほぼ無視されている。報告では、人類学的フィールドワークをもとに、トルコでユルックが、2000年代半ば以降「伝統文化」の名の下に各地でユルック文化協会等の市民団体を組織し活動を活発化させ、一般市民の間でも存在感を高めている状況［田村 2020］を概観した。またそうした民間レベルの活動が、全国規模の祭典や会議の場などを活用し、愛国主義・オスマン朝称揚・汎テュルク主義など多様な思想を雑多に包含しながら国内外へ拡大してゆく契機となりつつあることを指摘した。

近年ユルック関係の市民団体の数は急増しており、それらは横の連帯と縦の組織化を積極的に進め、2016年には大統領府の認可を経て全国58関連団体を母体に「トルコ－テュルク世界のユルック–トルクメン連合」という名の全国組織を発足させるに至った。これらの団体名に「ユルック–トルクメン」とトルクメンを併記することが、近年の傾向である。前述の連盟副会長の説明によれば、「中央アジアからアナトリアに移入したテュルク系遊牧民のうち、先に移入して平野に定住したのがトルクメン、後から来て山間部で遊牧を続けたのがユルック」というおおよその認識はあるものの、専門家との議論の末、明確な線引きは困難と判断し、ユルック文化復興活動にトルクメンを包含することになった、という。同時に諸団

(1) 報告では、これを「ユルック」の定義とした。

体が多用する「オグズ24支族（Türk）の系図」は、一般トルコ人向けには、「オグズ24支族＝テュルクは、ユルックとトルクメン混成体からなる」とのメッセージとして流通している。

これらの諸団体は、文化祭典という広く市民を巻き込むイベントを主催したり、会議・シンポジウムなどを開催して現状把握・課題認識の共有と目標設定を行なっている。たとえば2016年2月に開催された第1回ユルック－トルクメンワークショップおよび研究会議[2]には、国内外から104団体の参加があり、そのうち8つは北キプロス・コソボ・シリア・アゼルバイジャン・クリミアなどのテュルク系人口を擁する周辺諸外国地域名等を冠した団体であった。会議の結語宣言では、中央アジアからアナトリアまでのイスラームテュルク世界の強い連帯の必要性が強調され、上記諸外国地域での情勢の注視やユルック－トルクメン文化の研究・正しい周知・中央アジアのテュルク系諸国の学術研究拠点の整備などを含む目標が設定された。また他方で、市民を巻き込む夏季の文化祭典は、ユルック文化を対象化し、混交状態のまま多様な娯楽を一般市民に提供する場となっている。会場にブースを構え様々なパフォーマンスを行なう諸団体には、ユルックを祖とする村落文化団体からキルクーク・トルクメンなどの周辺諸国の団体、果てはトゥラン主義団体まであり実に雑多である。その参加者は、そこに集まるすべてを「我々テュルクの伝統文化」として楽しみ慈しんでいるのである。そこではユルックの後進性が払拭されるばかりか、トルクメン、オスマン朝、トルコ共和国など様々な要素を雑多に包含しながら示される「誇るべき我々テュルクの伝統文化」の土台として認識されていた。

これら諸団体の理念・祭典と会議の分析から、「ユルック－トルクメン」という連名併記の二つの作用が浮かび上がってくると報告者は考えた。すなわち国内的には、より多くの「過去には遊牧民で、トルクメンであっただろう」と感じる市民を包含してゆく求心力として作用する。また対外的には、同じトルクメン（トゥルクマーン）あるいはテュルク系民族として、周辺国のテュルク系民族的マイノリティに連帯を示す遠心力として作用する。つまり「テュルク」という語のもつ二重性[3]とも相俟って、「ユルック」という生業集団カテゴリと「トルクメン」という民族カテゴリの結合体は、文脈依存的に柔軟な読み替えが可能なカテゴリに変化しているのである。

参考文献

田村うらら 2020「公共化するユルック――トルコにおける「遊牧民」の連帯をめぐって」『地域研究』20（1）、56－78頁。

Yörükler Kültür Dayanışma ve Yardımlaşma Derneği. 2016. *Türkiye 1. Yörük Türkmen Çalıştayı ve Arama Konferansı Bildiri Kitabı ve Sonuç Raporu*. Antalya.

（金沢大学人間社会研究域）

[2] 以下会議についての記述は、Yörükler Kültür Dayanışma ve Yardımlaşma Derneği（2016）に基づく。

[3] Turk（Türk）は、トルコ人（国民）とテュルク系民族の２つの意味を有する。

書　評

帯谷知可『ヴェールのなかのモダニティ ――ポスト社会主義国ウズベキスタンの経験――』

東京：東京大学出版会、2022年、v+255+27頁

菊田　悠

本書は、帯谷知可氏が2019年3月に京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に提出した博士論文「中央アジアにおけるモダニティの追求――ウズベキスタンにおけるイスラーム・ヴェール問題の歴史的展開と現代――」を基にした単著である。まずはその問題意識と、理論的意義を見てみよう。

本書の冒頭で述べられている通り、ソヴィエト連邦時代に科学的無神論の下で世俗化政策が行われたウズベキスタンでは、20世紀後半になるとイスラーム・ヴェールと見なされるような全身を布で覆う服装は、特に都市部ではほとんど見られなくなっていた。ところが、ソ連解体後、人口の大半を占めるムスリムの間で民族の伝統やイスラームが再評価されていくなかで、イスラーム的な装いをする女性が目に見えて増加した。ソ連的な国家による宗教の管理体制を継承し、イスラーム過激主義の広がりを恐れたカリモフ政権は、頭髪の一部を薄いスカーフで軽く覆う程度の装いは取り締まらなかったが、目以外の全身を布で隠すような服装は規制していった。1991年のウズベキスタンへの初渡航以来、このようなイスラーム・ヴェールの広がりと国家による制限を目の当たりにしてきた筆者は「この地域ではヴェールをめぐる議論に常に目指すべき近代的な生活や社会のあり方、モダニティの在り方が象徴され、反映されてきた」(p. 2)と看破し、「ロシア帝国期、社会主義のもとでのソヴィエト期、さらに独立国となったポスト社会主義期を通じて、女性がヴェールを着用しない社会の構築(あるいはそのような社会への改造)を理想として追求されてきたモダニティのあり方の批判的検討を行い、ソ連解体後のグローバル化を経て、多元化へと向かう現代世界の中で、今あらためてウズベキスタンにとって21世紀的なモダニティはありうるのか、あるとすればそれはどのようなものかを問うてみたい」(同上)と述べる。当地域における女性の社会進出や社会主義的男女平等をめぐっては、「女性問題(zhenskii vopros)」研究としてソ連時代から一定の蓄積があるものの、「女性の社会進出を妨げているものは何か」という問題意識にとどまりがちで、他地域のジェンダー研究におけるセクシュアリティや男性性研究のような広がりに乏しい。また、ウズベク・ソヴィエト社会主義共和国でのイスラーム・ヴェール根絶

キャンペーン「フジュム(hujum)」については、マッセル[Massel 1974]やノースロップ[Northrop 2004]、カンプ[Kamp 2006]らの浩瀚な歴史研究があるが、それらがポスト・ソヴィエト時代のムスリム女性の装いとつなげて論じられることも、これまでほとんどなかった。その点で、本書はまさに待望の一冊であり、歴史研究と人類学的研究およびジェンダー研究を往還しながらヴェール問題を扱うことで、旧ソ連研究とイスラーム地域研究を架橋する新境地を切り開いたものといえる。

次に、本書の内容を順に紹介していこう。序論では、「ウズベキスタンのイスラーム・ヴェール(以下ヴェール)問題の歴史的および現代的文脈を読み解くこと、それを通じてこの地域の19世紀後半から現在に至るまでのモダニティ追及の葛藤に満ちた軌跡をたどること」(p. 1)という本書の視座が示される。より具体的には、「ヴェールに関する植民地主義的言説は、20世紀的なモダニティの追求という観点から、ウズベキスタンの領域ではどのような歴史的展開を経てきたのか」(p. 13)という問いを設定し、現在のウズベキスタンの領域における19世紀後半以降のヴェールのかたちと着用の実態を通時的に明らかにすること、ヴェールをめぐる言説と表象に埋め込まれた本質主義的で植民地主義的な「我々／他者」「文明／野蛮」「進歩／後進」といった二項対立(ダイコトミー)の時代ごとの変容を示すこと、現代のウズベキスタンでこのような二項対立を脱構築した女性の進歩や社会のあり方について開かれた議論が展開される可能性について考察すること、という3つの課題に取り組むことが述べられる。簡潔にして要を得たこの章は、中央アジアのヴェールに関連したさまざまな分野の先行研究群の優れた整理ともなっている。

第1部「モダニティ追及の磁場としてのウズベキスタン」では、本書の背景となるウズベキスタンの成立から1991年の独立に至る経緯と、ウズベク・ナショナリズムの下での歴史の見直し、独立前後からのイスラーム復興と政権との確執が述べられている。第1章は「ウズベキスタンの成立――1924年中央アジア民族・共和国境界画定――」と題して、ソ連時代初期にいかにして現在に至る中央アジアの主要民族が定式化され、その「固有の領域」が定められたかの経緯をまとめている。中央アジアにおける民族の成立と民族間の境界画定のプロセスは、ソ連解体後に新資料の公開や発見によって活発な議論がなされてきた重要かつ複雑な対象だが、この章では最新の研究成果を参照しつつ、境界画定の主導者たちとその議論の展開を時系列で整理し、現在の国境線とは異なる当時の諸案をオルターナティヴとして紹介することで、大変理解しやすい記述となっている。

続く第2章「独立後のウズベキスタンのナショナリズムの光と影」では、独立国家となったウズベキスタンがカリモフ大統領のもとでソ連時代を表面的には否定的にとらえつつも、ソ連時代に成立した民族と国家の枠組みを守るために、いかなる国家イデオロギーと歴史観を掲げてきたかを分析している。それによれば、カリモフ大統領が唱えた「民族独立理念

(milliy istiqlol go‘yasi)」と、それを具現化するための文化イデオロギーたる「高邁な精神(ma’naviyat)」と「啓蒙(ma’rifat)」という指針は、ロシア・ソ連的なものやパン・テュルク主義、政治化したイスラームのいずれも否定し、ウズベク人の伝統的価値観を称揚し独自の近代化路線を掲げるもので、教育やメディア、青年組織などを通じて国民文化のあらゆる分野に強い方向付けを与えた。また、独立後の新しい正史づくりの過程では、ソ連史学のイデオロギー的な制約の除去が盛んになった一方で、独立国家・ウズベキスタンを正当化すべく、現ウズベキスタン領内であればウズベク人という名称が登場する以前の民族や王朝の興亡もすべてウズベク民族の歴史として描くという、ソ連時代のアフトフトンノスチに基づいた民族起源論が使用された。さらに、ソ連史学においては封建国家の支配者で残虐な征服者という否定的な評価が定着していたアミール・ティムールが、独立後は逆に「ウズベキスタンの偉人」として公の場で最高の評価を与えられ、タシュケントの中心部にカール・マルクス像に代わってティムールの騎馬像が置かれるに至った。このように、ウズベキスタン独立後のナショナリズムがカリモフ政権下で構築・強化されていく様子を追った本章は、筆者の1990年代からの研究が存分に活かされており、政策の概要と具体例が明確かつ説得力を持って読者に伝わってくる。

第3章では「宗教とモダニティの相剋――イスラーム観をめぐる亀裂――」という題の下に、ウズベキスタンにおける異なるイスラーム観をめぐる軋轢が提示されている。ここでは、ソ連時代と同様に厳しくイスラームの管理・監督を行なおうとする国家と、社会主義イデオロギーから解放されイスラーム復興に向かおうとする社会との間に走った亀裂はもちろんのこと、ソ連時代の科学的無神論教育に由来する為政者や都市のエリート層における宗教への無関心や嫌悪、イスラーム主義者内部の見解の違いや対立といった複数の対抗軸が解説され、カリモフ後の現シャフカト・ミルズィヨエフ大統領による「伝統的」イスラームの肯定的評価までが網羅されている。独立後ウズベキスタンのイスラームの概要を知りたい者にとって、必読の一章といえるだろう。

第2部では「イスラーム・ヴェール問題の歴史的展開」と題して、いよいよロシア帝政期からソ連期にかけての中央アジアのムスリム定住民女性の装いをめぐる言説と表象が検討される。まず、第4章では19世紀後半から20世紀初頭にかけてのロシア領トルキスタンにおけるムスリム定住民女性の服装とヴェール着用の実態について、ロシア帝国時代のロシア人による民族誌的記述を基に整理している。それによると、当時のムスリム定住民女性は、成長すると室内でも常にウラマルまたはルマルと呼ばれるスカーフで頭部を覆うようになり、外出の際はその上に分厚い長衣パランジを被り、顔は黒い馬毛ネットのチムメトまたはチムベトで覆っていた。このような服装および10代半ば前後で結婚し家の中で家事労働に勤しむ女性の姿は、植民者たるロシア人の目には後進的で抑圧されたものとして映っていたこと

も指摘される。

第5章「帝政ロシアの「ムスリム女性」と「ヴェール」をめぐる言説」では、帝政ロシアにおける「ムスリム女性問題」が概観される。具体的には、1900年代初頭にロシア帝国内のムスリム女性解放を、イスラームの否定ではなく、その教義と歴史の再評価によって主張した二人の人物――O. C. レベヂェヴァとA. アガエフの著書の論点を紹介している。そこからは、この時期のロシア帝国内のイスラーム的男女平等言説が、オスマン帝国や英領インドにおける女性解放論や改革思想とつながりを持っていたことが浮かび上がる。本章は同時に、当時タシュケントに在住したロシア人東洋学者で異族人教育の専門家でもあったN. P. オストロウーモフの見解も紹介しているが、それはレベヂェヴァやアガエフらのイスラーム的男女平等論を真っ向から否定するものであった。かくして、ロシア帝国ではイスラームが男女平等の教えを有するか否かについて対立する主張が存在していたが、その双方ともトルキスタンにおける女性の隔離習慣やヴェール着用を「悪しき慣習」「野蛮な慣習」などと呼び、退廃や不道徳に結びつくものと見なしていた。その見解は、ソヴィエト体制下の公的な言説にも引き継がれていく。

第6章「ソ連期ウズベキスタンの「女性」と「ヴェール」をめぐる言説と表象」においては、まず1927年に始まった「フジュム（hujum）」と呼ばれる女性解放運動の大規模なキャンペーンが検討される。続いて当時のウズベク共和国におけるメディア等のビジュアル資料を素材として、ソ連時代のウズベク人女性とヴェールをめぐる言説と表象が分析される。そこからは、植民地主義と闘って成立したはずのソヴィエト政権下においても、公的な言説ではヴェールがロシア帝国時代と同様に後進性や抑圧の象徴として描かれていたことが明らかとなる。ただし、その根絶すべきヴェールとは、日常で頭部にまとうスカーフ（ウラマルまたはルマル、後にルモルと呼ばれる）ではなく、外出の際に被るパランジとチムマトなのであった。

第3部「現代ウズベキスタンの「ヴェールの政治学」」は、独立後のウズベキスタンであらためて出現した「イスラーム・ヴェール問題」についての分析である。第7章では、独立後の権威主義体制の下でのイスラーム過激主義の台頭が指摘される。続く第8章は、「フジュム」や根絶すべきヴェールとされたパランジが独立後の歴史と民族文化の見直しを経て、どのようにとらえられているかを、2009年から2013年にかけてのタシュケント市とサマルカンド市における22名へのインタビューから考察している。さらには世俗主義的フェミニストとして国際的にも知られるウズベク人女性のM. トフタホジャエヴァによる、「フジュム」やウズベキスタンの女性をめぐる諸問題の評価も紹介している。ここからは、トフタホジャエヴァのようなソヴィエト型の世俗主義的知識人と、よりイスラーム的な生活を志向する人々との間に、同じウズベク人であってもかなりの見解の相違があることが浮き彫りとなる。第9章では、ペレストロイカから独立後にかけて、パランジとチムマトとは異なる、ウズベ

キスタンにとって新しいスタイルのイスラーム・ヴェールが出現したことが述べられる。それは白や淡色で無地のヘッドスカーフとゆるやかで長い丈の衣服で体と髪、時には口元も隠す「ヨピンチク（yopinchik）」と呼ばれる服装で、若い女性の間で見られたという。ただしイスラーム過激主義を警戒する当局は、これを厳しく規制し、全土に広がるには至らなかった。そういえば、2002年に評者がフェルガナ州に長期滞在した際には、「数年前には「閉じた服装をすること（yopiq kiyinish）」が学校でも流行して、私も素敵だと思ってそういう格好をしていたけれど、政府が禁止したので止めた」と語る10代の少女がいた。あれはおそらく「ヨピンチク」だったのであろう。本書を読んで腑に落ちた。

次に2000年代に出現したのは「ヒジョブ（hijob）」である。これはアラビア語のヒジャーブを由来とし、未婚女性や女児を含めた幅広い年齢層の女性があごの下でスカーフを結び、ゆったりと長い衣服でボディラインを見せない装いをすることであるが、刺繍やビーズ、柄物のスカーフなどの装飾が目立ち、スカーフと衣服が統一的にカラー・コーディネートされることも多く、「おしゃれ」で「個性的」な点がヨピンチクとは異なるという。カリモフ政権はまたしてもヒジョブに対する統制を強めたが、一方でルモルは「宗教色を含まない、民族的・伝統的なヘッドスカーフ」として公共空間でも着用することが正式に認められた。実際の外見の違いは、スカーフの結び目があごの下であるか（ヒジョブ）、頭の後ろであるか（ルモル）のわずかなものに過ぎないが、個人の選択を国家が「ヒジョブは過激主義でありルモルは民族と伝統の表れである」と一方的に評価し管理しようとする問題を指摘して、本章は閉じられる。

終章「モダニティの長い道程は再び開かれるのか」では、序章で掲げた3つの課題に対しての応答がまとめられている。さらに、2016年9月のカリモフ初代大統領の逝去後に誕生したミルズィヨエフ政権が、ヒジョブ問題に新しい展開をもたらしたことが述べられている。それは、義務教育の場では全国統一制服を導入することでヒジョブや男性のあご髭などのイスラーム的装いに加えミニスカートやタイトなジーンズなどの「西洋的」装いをも排除する一方で、町中ではヒジョブへの統制を大幅に緩和するというものである。ソ連時代にイスラームに関して植民地主義的視線やオリエンタリズムが織り込まれることになったウズベキスタンにおいて、これから女性のヴェール姿がどのように評価されていくのか。筆者は、イスラームの教えにしたがった生活や女性のヒジョブ着用が、自由や進歩と相いれないものではなく、個人の選択にゆだねられた「普通のこと」と受け止められるような価値観を社会が共有していくまでには、おそらく長い道程が待っているのだろうと予想している。以上が本書の概要である。

本書の意義は、ロシア帝国期から現代に至るまでの中央アジア定住地帯のジェンダーに関してヴェールを手掛かりとしながら日本で初めて本格的に論じ、歴史学のみならず表象研究

やジェンダー学、人類学的研究も含めた多彩な手法で対象に迫り、中東イスラーム地域などとの通地域的研究の基盤を整備したことである。その方法論は「中央アジア近現代史に軸足を置いた中央アジア地域研究の立場に立ち、文献資料研究と現地調査の有機的な結合、いわば歴史研究と現在研究の意識的な往還」(p. 14) と述べられている。これはロシア語およびウズベク語等の諸資料、さらには英語等の研究論文を駆使することに加えて、頻繁に現地を訪れ研究者や市井の人々と交流し、聞き取り調査を行なうという労苦の積み重ねであり、誰にでも可能なことではない。だが、この方法があってこそ、本書の議論は過去から現代へ向けた広い射程と深みを同時に持つことができたのである。

本書の価値として、その出版タイミングの良さもある。本書の刊行準備が進んでいた2021年7月に、ウズベキスタンでは「1998年宗教法」が改正され、「公共空間における礼拝のための衣服の着用禁止」条項が削除されて公共空間でもヒジョブ着用が認められるようになった。本書の「あとがき」ではその経緯と、義務教育の場でのヒジョブとルモルの扱いの差についても述べられている。ヴェール政策の重要な転換点も収めることができたことは本書およびその読者にとって大変幸運であった。

このように本書の価値はゆるぎないものであるのだが、書評として批判的な注文も付けねばならないとしたら、それは「モダニティ」という概念の扱いになろう。本書では「モダニティ」概念の定義が深く議論されてはいない。わずかに第一部の扉で「ここでいうモダニティとは、一般的な定義として、それを西洋的なものに限定せず、現代に見合った、人間がよりよく生きるための規範や価値観の総体」とされるのみである。だが、管見の限りでは、このようなモダニティの定義は広く普及しているとは言い難い。評者の理解では、モダニティとは「およそ17世紀以降のヨーロッパに出現して、その後ほぼ世界中に影響が及んでいった社会生活や社会組織の様式」[ギデンズ 1993 (1990)] であり、具体的には国民国家や産業社会、科学技術の発展、世俗主義の広がりなどを指すが、それらは世界中に広がっていく中で帝国主義や人々の生活世界への国家による介入、大規模な自然破壊等ももたらしたため、今日では必ずしも手放しで称賛できる不変の価値観とはされていない。モダニティを「人間がよりよく生きるための規範や価値観の総体」と定義することには、モダニティを西洋から「目指すべき理想」として取り入れたロシア帝国そしてその後のソ連の啓蒙主義的なモダニティ理解が反映されているのではないだろうか。あるいは、ハーバマス的に「ソ連崩壊後のポスト・モダニズムが反啓蒙的で進歩や自由を否定している」と考える場合は、モダニティとは「よりよく生きるための規範」たりうるかもしれない。しかし、その場合でも、本書では「21世紀のモダニティ」という表現も用いているので、「モダニティとモダニズムはソ連崩壊によって終わった」とするポスト・モダニズムに対する評価を含めて、本書でのモダニティ定義をより明確に行うべきではなかったかと思える。

また、2009年のタシュケントにおける多様なヴェール姿を写真付きで紹介した第9章は、いかに現代ウズベキスタンの女性が個性的におしゃれを楽しんでいるかが伝わってくる本書の魅力のひとつになっているのだが、一方で彼女たちの服装選択の詳しい分析は、「より実証的な検討が望まれるところである」と今後の課題になっている。隣国キルギスに関しては、ヴェール姿を選択した若い女性の葛藤と戦略についての論考が既になされており［McBrien 2009］、このような当事者の主観に迫る分析がウズベキスタンにおいても積み上げられなければならないだろう。

かくして、この書評は最後に「ないものねだり」でお茶を濁すことになったが、それによっても本書の価値は減じられない。本書はウズベキスタンおよび中央アジア、旧ソ連地域の研究に新しい地平を切り開き、学際的な方法論および他地域研究との連携の豊かな可能性を示した一冊として高く評価されるべきものである。

参考文献

ギデンズ・アンソニー 1993（1990）『近代とはいかなる時代か？――モダニティの帰結――』、松尾精文・小幡正敏（訳）、東京：而立書房。

ハーバマス・ユルゲン 2000（1990）『近代――未完のプロジェクト――』、三島憲一（編訳）、東京：岩波書店。

Kamp, Marianne. 2006. *The New Woman in Uzbekistan: Islam, Modernity, and Unveiling under Communism*, Seattle: University of Washington Press.

Massell, Gregory J. 1974. *The Surrogate Proletariat: Moslem Women and Revolutionary Strategies in Soviet Central Asia, 1919−1929*, Princeton: Princeton University Press.

McBrien, Julie. 2009. “Mukadas’s Struggle: Veils and Modernity in Kyrgyzstan,” *Journal of the Royal Anthropological Institute* 15(S1), pp. 127−144.

Northrop, Douglas. 2004. *Veiled Empire: Gender and Power in Stalinist Central Asia*, Ithaca, N.Y. : Cornell University Press.

（北海学園大学経済学部）

シンジルト編『目で見る牧畜世界 ――21世紀の地球で共生を探る――』

東京：風響社、2022年、161頁

坂井　弘紀

中央アジアの歴史と文化を考えるうえで、遊牧民の生活様式・文化形態の理解は不可欠である。だが、遊牧／牧畜を、そうしたローカルな枠組みを超えて、一つの文明論としてとらえようというのが本書の試みである。本書は、牧畜を生業・知恵・現在・未来といった多角的な視点でとらえ、12名の歴史学者と人類学者によって、それぞれのフィールドでこれまで具体的に得てきた知見やデータが提示される。いずれの論考も、かけがえのないフィールドワークの成果だ。遊牧・移牧・定牧といったさまざまな形態を「牧畜」という用語でまとめて、世界各地に展開する家畜をもとにした生業を営む人々の文化のあり方を示す方法は画期的である。中央アジア関連では、1「ユーラシアの心臓部、天山の山嶺から――牧畜民の来し方、いま、そして行く末は――」（クルグズ（キルギス））、2「ウマを愛でる歴史――ソ連・ロシアの経験は牧畜をどう変えたのか――」（カルムィク）、4「カザフスタン・小アラル海地域での牧畜――牧畜が災害復興に果たした役割とは何か――」（カザフ）、コラム2「モンゴルの乳しぼり――牧畜民と家畜の心は通うか――」、10「オイラト、動植物、無生物――牧畜民的な「共生」とは――」の論考があり、これらは本書全体の半分近くを占める。そのほか、チベット高原やブータン、インド、ケニア、エチオピア、トルコ、ギリシア、ブルガリア、ハンガリー、ペルーなどユーラシア大陸のみならず、アフリカ大陸や南アメリカ大陸も視野に入れ、世界各地の「牧畜文化」を網羅している。

現在、広く議論されている「共生」というテーマが本書全体に流れており、「牧畜世界」に存在する「共生」のメカニズムを可視化することが本書の目的となっている。編者が述べるように、遊牧民が「近代社会を生きる我々にいい影響を与えるヒントを持って」おり、遊牧に「西洋近代文明が直面する課題の解決策を見出」すことができるとすれば（1頁）、われわれがそこから学ぶべきものは多いはずである。

総説では、牧畜とは何かという問題を、先行研究にもとづいて整理されており、本論につながる、わかりやすい導入となっている。また、特筆すべきは、本書がオールカラーであり、数多くの貴重な写真が掲載されている点である。これらを眺めるだけでも興味深い。資料編

の基本語彙解説や関連年表も有益で、「牧畜世界」に馴染みの薄い読者にも理解しやすいであろう。

本書は科研「牧畜社会におけるエスニシティとエコロジーの相関」の研究成果の一部であり、紹介者（坂井）もその研究会にお声をかけていただいたが、大胆な構想で活発な議論がなされる、刺激的な研究会であったことを思い出す。同じくその成果である『牧畜を人文学する』（シンジルト・地田徹朗編著、名古屋外国語大学出版会、2021年）を本書と合わせて読むとさらに理解が深まることであろう。

（和光大学表現学部）

中央アジア関連研究文献リスト2021

本リストは、2021年（1月～12月）に刊行された、原則としてイスラーム化以降の中国新疆、旧ソ連領のムスリム地域、およびその周辺地域に関する学術文献（学術的映像作品を含む）をリストアップしたものである（理科系のものを除く）。原則的に、国内で刊行された、国内で活動する研究者による著作を中心とし、エッセイや辞典項目等は除外した。ただし、本学会会員の著作については、海外刊行のものも一部含まれる。なお、各文献の副題はコロンつなぎで統一した。

書籍

■AKIYAMA Tetsu, *The Qïrghïz Baatïr and the Russian Empire: A Portrait of a Local Intermediary in Russian Central Asia*, Leiden: Brill (€ 89.00)

■今村薫編著『遊牧と定住化』（中央アジア牧畜社会研究叢書 2）名古屋学院大学現代社会学部今村研究室（非売品）

- 地田徹朗、タルガルバイ・コヌスバエフ、マルグラン・イクラソフ「小アラル海南岸でのラクダ飼養の特徴について：2020年2月、カザフスタン出張報告」
- 廣田千恵子「モンゴル国カザフ牧畜民の季節移動：バヤン・ウルギー県サグサイ郡を事例に」
- 塩谷哲史「トルクメンの遠征行」
- 今村薫、田村うらら「トルコのラクダ相撲：ラクダ利用と異種交配の視点から」

などを所収

■菊田悠編『ウズベキスタン手工芸史の再構築と「守るべき伝統」による地域開発の研究：成果中間報告書』アイワード社（非売品）

- 宗野ふもと「ウズベキスタンにおける手工芸生産の変遷：19世紀半ばから2010年代後半におけるシャフリサブズの事例から」
- 今堀恵美「ウズベキスタンのコロナ対策と観光業および工芸制作へのインパクト」

- 菊田悠「リシトン陶業に見るミルジヨエフ大統領の手工芸振興政策の方向性」
  を所収

■重田康博、太田和宏、福島浩治、藤田和子編著『日本の国際協力　アジア編：経済成長から「持続可能な社会」の実現へ』ミネルヴァ書房（3,800円＋税）

- 二瓶直樹「第Ⅴ部　中央アジア・コーカサス地域解説：ユーラシアの発展と安定のために」
- 二瓶直樹「22　対カザフスタン援助：中央アジアの資源大国」
- 齋藤竜太「23　対ウズベキスタン援助：開放へ向かう地域の要」
- 齋藤竜太「24　対キルギス援助：産業育成に苦慮する山岳国への支援」
- 二瓶直樹「25　対タジキスタン援助：国民生活の向上を目指して」
- 二瓶直樹「26　対トルクメニスタン援助：中央アジアの永世中立国」
- 立花優「27　対アゼルバイジャン援助：資源国での支援」
  などを所収

■シンジルト、地田徹朗編著『牧畜を人文学する』名古屋外国語大学出版会（2,000円＋税）

- 秋山徹「ユーラシア牧畜民がリーダーに求めたものとは？：血と力」
- 井上岳彦「ロシアの牧畜民はなぜ魚も好むのか？：定住化と生存戦略」
- 地田徹朗「ソ連はカザフに何をもたらしたのか？：遊牧民と近代化」
- 坂井弘紀「ユーラシア牧畜民の英雄叙事詩とは何か？：敵と味方」
  などを所収

■新免康編著『ユーラシアにおける移動・交流と社会・文化変容』（中央大学政策文化総合研究所研究叢書30）中央大学出版部（3,700円＋税）

- 田中周「中国－中央アジア関係にみる安全保障－経済開発のネクサス：新疆の反テロ政策を事例として」
- ディリャーラ・ウスマノヴァ（濱本真実訳）「極東と新疆へのテュルク・タタール系移住者による1920～40年代の教科書出版：比較から浮かび上がる特徴」
- 河野敦史「新疆ホタンにおける清軍の到来と有力者の対応：ジャハーンギールの侵入事件（1826～1827年）におけるホタンのベクやアホンの動向を中心として」
- 新免康「中国新疆のイリ地域におけるウイグル族の「歴史歌謡」について」
  などを所収

■高尾賢一郎、後藤絵美、小柳敦史編『宗教と風紀：〈聖なる規範〉から読み解く現代』岩波書店（5,900円＋税）

- 帯谷知可「「よいスカーフ」と「悪いスカーフ」の攻防とその境界：現代ウズベキスタンのヴェール論争」
- 和崎聖日「旧ソ連・ウズベキスタンにおける『婚外の性』とイスラーム：男が語るモラル」

- 海野典子「経堂教育と新式教育：20世紀初頭の北京ムスリムの教育改革をめぐる議論と実践」

  などを所収

■地田徹朗、柳澤雅之編『ユーラシア国境域の自然環境と境域社会の生活戦略』（CIRAS Discussion Paper No. 103）京都大学東南アジア地域研究研究所（非売品）

- 地田徹朗「中央アジア・アラル海をめぐる境界の変容とスケールの政治」

  などを所収

■守川知子編『都市からひもとく西アジア：歴史・社会・文化』（アジア遊学 264）勉誠出版（2,800円＋税）

- 塩野﨑信也「スルタンとシャーの新たなギャンジャ」
- 杉山雅樹「ティムール朝期のヘラートにおける聖者たち」
- 木村暁「スンナ派学の牙城ブハラ」

  などを所収

■ ZIEME, Peter (ed.) *Catalogue of the Old Uyghur Manuscripts and Blockprints in the Serindia Collection of the Institute of Oriental Manuscripts, RAS*, vol. 1, compiled by Olga LUNDYSHEVA, Anna TURANSKAYA, and Hiroshi UMEMURA, Tokyo: Toyo Bunko, https://doi.org/10.24739/00007487 (not for sale)

論文

- ISAHAYA Yoichi, “From Alamut to Dadu: Jamāl al-Dīn’s Armillary Sphere on the Mongol Silk Roads,” *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 74(1), pp. 65–78
- 宇山智彦「中央アジアの新型コロナ問題と国際関係：減速する世界？」川島真、池内恵編『新興国から見るアフターコロナの時代：米中対立の間に広がる世界』東京大学出版会，157–170頁
- 宇山智彦「クルグズスタン（キルギス）の波乱の30年：エリートの分裂による不安定な「民主主義」」『ユーラシア研究』64, 32–34頁
- 宇山智彦「中央アジア「国際テロ」と「グレートゲーム」の虚実：アフガニスタン近隣諸国の多様な国益」『外交』69, 44–49頁
- 宇山智彦「熊倉潤著『民族自決と民族団結：ソ連と中国の民族エリート』」（書評）『ロシア史研究』106, 132–139頁
- 宇山智彦「ロシアと中国の地域主義から再考する勢力圏・影響圏：国力・関与・共感」日本国際フォーラム「ユーラシアダイナミズムと日本外交」分科会コメンタリー、https://www.jfir.or.jp/studygroup_article/5684/
- Уяма Томохико. Влияние перемен периода перестройки на становление политических

систем стран Центральной Азии: чувство угрозы и авторитаризм // Международная аналитика. Том 12, № 1. С. 55–73. https://doi.org/10.46272/2587-8476-2021-12-1-55-73

- UYAMA Tomohiko, “Understanding the Kazakh Autonomy of the Alash Orda Multifacetedly: Enlightenment, Post-Imperial Citizenship, and International Contexts,” in Диалог культур Востока и Запада через призму единства и многообразия в преемственности и модернизации общественного сознания: древний мир, средневековье, новое и новейшее время / отв. ред. В. Н. Вдовин. Алматы: Институт философии, политологии и религиоведения КН МОН РК. С. 167–173
- UYAMA Tomohiko, “Recommendations for Responding to the Current Situation in Afghanistan: From the Perspective of an Expert on Central Asia,” *GFJ Commentary* 104, http://www.gfj.jp/e/commentary/211201.html
- 帯谷知可「ロシア帝国からムスリム女性の解放を訴える：O. S. レベヂェヴァと A. アガエフのイスラーム的男女平等論」『史林』104（1）, 113－154頁
- 川本正知「書評と紹介　櫻井智美・飯山知保・森田憲司・渡辺健哉編『元朝の歴史――モンゴル帝国期の東ユーラシア――』」『13、14世紀東アジア史料通信』26, 1－16頁
- KOMATSU Hisao, “Toy ve İslâm: Geçmiş ve Bugün,” A. Merthan Dündar ed., *Prof Dr. Pulat Otkan Anısına Sinoloji, Japonoloji ve Koreanoloji Makaleleri*, Ankara, s. 9－20
- KOMATSU Hisao, “Zengi Ata’dan Orta Asya Tarihine Bir Bakış,” Güljanat K. Ercilasun ve Muhammed B. Çelik ed., *Üç Kıta – Bir Tarihçi: Prof. Dr. İlhan Şahin Armağanı*, Bursa, s. 277－295
- 坂井弘紀「水辺の異形」『和光大学表現学部紀要』21, 35－54頁
- 塩野﨑信也「離婚裁判の上訴とエリザヴェートポリ県メジュリスの不適切な事務処理」『龍谷史壇』151－152, 29－49頁
- 塩野﨑信也「ロシア帝政期南東コーカサスの離婚裁判：2度結婚した後に2度離婚した未婚女性の事例」『東洋史研究』80（3）, 548－513頁
- 塩谷哲史「ヒヴァ・ハン国史研究とフィールドでの史料調査」『筑波大学地域研究』42, 45－54頁
- 塩谷哲史「19世紀中葉のヒヴァ＝ロシア関係再考：シュクルッラー・アガのロシア、オスマン両帝国への派遣について」『西南アジア研究』92, 29－47頁
- SHIOYA Akifumi, “The Association between the Descendants of Sufi Saint Sayyid Ata and the Khans of Khiva at the Beginning of the 19th Century,” *Central Asiatic Journal* 64(1-2), pp. 183－195
- 新免康「19～20世紀の南新疆に関わるウイグル族の歴史歌謡について」『中央大学政策文化総合研究所年報』24, 145－167頁
- NODA Jin, “The Kazakhs, 16th–19th Centuries,” *Oxford Research Encyclopedia of Asian History*, Oxford University Press, https://doi.org/10.1093/acrefore/9780190277727.013.317

- 福田浩子「中央アジアの刺繍布スザニについて(1)：スザニに関する研究の中間報告および刺繍ワークショップ」『広島県立美術館研究紀要』24, 23–30頁＋カラー頁
- 藤本透子「聖者になる過程：カザフスタンにおける近代化の経験とイスラーム」長谷千代子、別所裕介、川口幸大、藤本透子編『宗教性の人類学：近代の果てに、人は何を願うのか』法蔵館, 174–202頁
- 宮崎千穂「井上靖の中央アジアへの旅(1965)とソ連のインバウンド観光：日本人知識人の“西域”への憧憬と社会主義プロパガンダとの間で」『日本国際観光学会論文集』28, 121–132頁
- 宮崎千穂「〈マラズ〉からロシア帝国の〈梅毒〉へ：19世紀後半の中央アジアの風土性梅毒への医療実践と統計学・地誌学・民族誌学」『ロシア史研究』106, 104–131頁
- 和崎聖日「揺れ動くジェンダー規範：旧ソ連中央アジアにおける世俗主義とイスラーム化」田中雅一、嶺崎寛子編『ジェンダー暴力の文化人類学』昭和堂, 179–197頁
- 和崎聖日、アドハム・アシーロフ「旧ソ連・ウズベキスタン南部のスーフィズムと民族間の共生：ジャフル儀礼への注目から」東長靖、イディリス・ダニシマズ、藤井千晶編『イスラームの多文化共生の知恵：周縁イスラーム世界のスーフィズムに着目して』京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科附属ケナン・リファーイー・スーフィズム研究センター, 77–105頁

『日本中央アジア学会報』投稿規定

1. 投稿者は、原則として日本中央アジア学会の会員に限ります。
2. 原稿は、過去に他の学術誌･書籍等に掲載されたことのないもの、投稿時点で他の学術誌･書籍等に投稿中・寄稿中でないものに限ります。
3. 原稿の使用言語は原則として日本語とします。
4. 投稿に際しては、完成原稿を MS-Word 形式で作成し、電子メール添付にて送付してください。手書き原稿は受け取りません。
5. 原稿の送付先は下記の通りです。

   E-mail: jacaseditor@gmail.com

   日本中央アジア学会編集委員会
6. 原稿の種別は、「論説」、「研究ノート」、「書評論文」、「中央アジア研究動向」、「中央アジア現地事情」、「書評」、「新刊紹介」、「年次大会発表要旨」からなります。ただし、編集委員会が必要に応じて当該号に限り「特別寄稿」などを設定することがあります。

   投稿者は、掲載を希望する種別を明記のうえで投稿してください。ただし、掲載される際の種別に関する最終的な判断は、編集委員会が行います。
7. 原稿の分量は、種別ごとに、1枚400字換算にてそれぞれ以下の通りとします。

   「論説」、「研究ノート」、「書評論文」: 60枚以内

   「中央アジア研究動向」、「中央アジア現地事情」: 15枚以内

   「書評」: 20枚以内

   「新刊紹介」: 3枚以内

   「年次大会発表要旨」: 5枚以内

   なお、上記の枚数には、本文のほかに、表題、注、参考文献、図表等も含まれます。
8. 原稿の書式については、執筆要領を参照してください。
9. 原稿の投稿締め切りは5月10日とします。ただし、年次大会発表要旨については4月20日までに提出してください。
10. 投稿された原稿の採否は、編集委員会において決定します。「論説」、「研究ノート」、「書評論文」の原稿については、査読を行なった上で、編集委員会が最終的な採否の決定を行ないます。掲載が決定された場合でも、編集委員会より手直しを求めることがあります。
11. 校正は、初校についてのみ著者校正をお願いします。その際、大幅な修正や加筆はご遠

慮ください。再校以降の校正は、編集委員会の責任で行ないます。

12. 本誌に発表したものを転載する場合は、予め編集委員会に通知した上で、『日本中央アジア学会報』に掲載されたものである旨を記載してください。また、転載された出版物の発行後、速やかに本学会事務局宛てに1部寄贈をお願いします。なお、刊行後の1年間は、インターネット上での発信を含め、転載をご遠慮願います。
13. 本誌に掲載された原稿の著作権は、特に記載のない限り、著者に属します。編集委員会は、本誌に掲載されたすべての原稿について、電子化された媒体により複製・公開し、公衆に送信することができるものとします。（クリエイティブ・コモンズ表示4.0国際（CC BY 4.0）ライセンスの下に提供されます。）

（2017年6月21日改訂）
（2017年12月1日メールアドレス変更）
（2022年5月8日改訂）

『日本中央アジア学会報』執筆要領

1．原稿の形式・体裁

(1) 表紙に、原稿の種別（「論説」、「研究ノート」など）、表題、英文タイトル、要旨（800字以内）、執筆者名、所属・職位等、および連絡先（郵便番号、住所、電話番号、メール・アドレス）を記す。

(2) A4判とし、余白は天地30ミリ、左右25ミリとする。

(3) 原稿は横書きとし、1行の文字数は40字、1ページの行数は30行に設定する。

(4) フォントについては、和文はMS明朝、英文はTimes New Romanを用いる。アラビア文字等のラテン文字翻字を示す際は、Times New Romanで表示できる文字については必ずTimes New Romanを用い、表示できないものについてのみ特殊フォントを使う。特殊フォントを使用する場合は、原稿のファイルをメール添付で送付する際に、あわせて原稿のPDFファイル（特殊フォント部分をマーカーで示すこと）も添付する。フォントの文字サイズは、10.5ポイントとする。アラビア数字（算用数字）はすべて半角とする。

(5) 数字は原則としてアラビア数字（算用数字）を用いる。ただし、本文中ではコンマを用いない。万以上の数字については、万・億・兆などの漢数字を用いることもできる。概数の場合は、十数年、数十人などとする。

(6) 読点は「、」、句点は「。」を用いる。

(7) 引用文を提示する際は、引用部分の行の始まりをすべて2字下げるとともに、引用部分の上下を半行空ける。

(8) 日本語以外の諸言語の文字については、原則として、漢字、ラテン文字、キリル文字以外の文字を使用しない。漢字は原則として日本の常用漢字を使用する。ただし、固有名詞の表示や漢文文献の引用など、必要な場合はこの限りでない。アラビア文字等についてはラテン文字に翻字する。ラテン文字翻字については、ALA-LCなど、原則として国内外で採用されている標準的な方式にしたがい、必ず原稿内で方式を統一する。キリル文字も同様にラテン文字に翻字してもよい。

(9) 注は脚注とし、1からはじまる通し番号とする。原稿ファイルにおいて、MS-Wordの脚注機能を用いて作成する。

(10) 出典を示す参考文献とページ番号のみの注は設けない。下記3.で示すような形式にしたがって本文内に入れる。

(11) 原稿末に参考文献リストを置き、参考文献を示す。具体的な書式等については下記の2.を参照。

(12) 図版は、執筆者が完全版下となるデータを提供する。図版には通し番号を付し、本文

中に挿入希望箇所を表示する。また、別紙に各図版の説明（キャプション）を記す。図版のデータについては、必ずファイル名に図版の通し番号を入れ、原稿のファイルを送付する際に、画像データも合わせてメール添付で送付する。後者のファイルは BMP 形式が望ましい。

2．参考文献リストの様式

(1) 参考文献リストにおける文献の配列は、著者の姓のアルファベット順とする。単著・編著の区別は、配列順に関係しない。同一著者の複数の文献を掲げる場合は、出版年の古い順に並べる。同一著者の文献が同一年に複数ある場合は、タイトルのアルファベット順に、刊行年に a、b、c ...、а、б、в... などを付加して区別する。なお、文献の言語別に分けて表示する方法を採ってもよい。

(2) 同じ著（編）者の文献が複数ある場合、2 番目以下の文献の著（編）者名部分を―――（3 倍ダッシ）で表記する。

(3) 史料等について任意の略号を使用する場合は、参考文献リストにそれを示し、原稿内で統一的に用いる。

(4) 参考文献リストにおける書誌データの具体的な記載方法については、基本的に下記にしたがう。

①単行本

和文：著（編）者名、出版年、書名、出版地、出版社、の順に記す。

欧文：著（編）者名（姓 , 名の順）、出版年、書名（イタリック体）、出版地、出版社の順に記す。

（例）

佐口透 1986『新疆民族史研究』東京：吉川弘文館。

Jarring, Gunnar. 1991. *Prints from Kashgar: The Printing Office of the Swedish Mission in Eastern Turkestan, History and Production with an Attempt at a Bibliography*, Stockholm: Svensca Forskningsinstitutet i Istanbul.

Muminov, Ibragim M. 1968. *Rol' i mesto Amira Timura v istorii Srednei Azii v svete dannykh pis'mennykh istochnikov*, Tashkent: Fan.

Муминов И. М. 1968. Роль и место Амира Тимура в истории Средней Азии в свете данных письменных источников. Ташкент: Фан.

②学術誌掲載論文等

和文：著者名、発行年、論文名、雑誌名、巻号、掲載ページ、の順に記す。

欧文：著者名（姓 , 名の順）、発行年、論文名、雑誌名（イタリック体）、巻号、掲載ページ、の順に記す。

（例）

佐口透 1950「新疆ウイグル社会の農業問題――1760–1820年――」『史学雑誌』59（12）、22–50頁。

Fletcher, Joseph F. 1982. “The Biography of Khwush Kipäk Beg (d.1781) in the *Wai-fan Meng-ku Hui-pu wang kung piao chuan*,” *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 36, pp. 167–172.

Pugachenkova, Galina A. 1952. “K istorii «parandzhi»,”*Sovetskaia etnografiia*, 1952, no.3, pp. 192–195.

Пугаченкова Г. А. 1952. К истории «паранджи» // Советская этнография. 1952. № 3. С. 192–195.

③論文集等掲載論文

和文：著者名、出版年、論文名、編者名、書名、出版地、出版社、掲載ページ、の順に記す。

欧文：著者名（姓 , 名の順）、出版年、論文名、著書名（イタリック体）、編者名、出版地、出版社、掲載ページ、の順で記す。

（例）

羽田明 1964「Ghazāt-i-Müslimin 訳稿――Yaʾqūb-bäg 反乱の一史料――」内陸アジア史学会編『内陸アジア史論集』東京：株式会社大安、324–339頁。

Togan, Isenbike. 1992. “Islam in a Changing Society: The Khojas of Eastern Turkestan,” in *Muslims in Central Asia: Expressions of Identity and Change*, edited by Jo-Ann Gross, Durham and London: Duke University Press, pp. 134–148.

Arapov, Dmitrii Iu. 2011. “Volga–Ural: islam i sovetskaia gosbezopasnost′ v 1926 g.,” *Volga–Ural'skii region v imperskom prostranstve XVIII–XX vv*., edited by Naganawa Norihiro, D. M. Usmanova, and Hamamoto Mami, Moscow: Vostochnaia literatura, pp. 230–240.

Арапов Д. Ю. 2011. Волга–Урал: ислам и советская госбезопасность в 1926 г. // Волга–Уральский регион в имперском пространстве XVIII–XX вв. / Под ред. Наганава Норихиро, Усмановой Д. М., Хамамото Мами. М.: Восточная литература. С. 230–240.

④史料等に略号を使用する場合は略号、コロン（:）を挟んで書誌データを記す。

（例）

『新疆識略』：『欽定新疆識略』全12巻、松筠纂、道光元年序、海積書局石印、光緒20年；［再版］台北：文海出版社、1965年。

TN: (Mullā Sharaf al-Dīn Aʿlam ibn Nūr al-Dīn), *Tārīkh-nām (Tārīkh-i Rāqim)*, ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所所蔵・写本番号 : r. 10190.

3．本文・注における文献の表記

(1) 本文もしくは注において参考文献に言及する際には、著（編）者姓、出版年、ページを表示し、括弧［ ］内に入れる。ページ番号は、出版年の後に半角コロン(:)を挟んで示す。

(2) 同一文献に関して複数回の言及がある場合、前掲書、前掲論文、同上書、同上論文、op. cit.、ibid.、等の語は使用しない。

(3) 具体的な表記の方法については下記の形式にしたがう。

(a) 文の冒頭で言及する場合

佐口［1986: 173–174］は……

Jarring［1991: 85］によれば、……

Пугаченкова［1952: 192］によれば、……

（プガチェンコヴァ［Пугаченкова 1952: 192］によれば、…… としてもよい）

ジャリロフ・河原・澤田・新免・堀［2008: 9］は……

羽田［1982: 80–81］、佐口［1963: 109–110］によれば……

(b) 文中または文末で言及する場合

……という指摘もあり［佐口 1986: 173–174］、本稿では……

……と指摘されている［羽田 1986: 86–87］。

……と指摘されている［Jarring 1991: 85］。

……という記述がある［Пугаченкова 1952: 192］。

……という記述がある［TN: 122b–123a］。

……とされている［ジャリロフ・河原・澤田・新免・堀 2008: 9］。

……と論じられている［羽田 1982: 80–81; 佐口 1963: 109–110］。

……といわれる［羽田 1982: 80–81; 1986: 109–110］。

(4) インターネット取得のデータを用いる際には、脚注に、記事等の題目、サイト名、URLアドレス、閲覧年月日を記す。

（例）

“Strategy of Innovative Industrial Development of Kazakhstan for 2003–2015,” *GOV.KZ*, URL: http://en.government.kz/resources/docs/doc3, 閲覧日：2009年6月18日。

（2017年6月21日改訂）
（2022年5月8日改訂）

日本中央アジア学会会則

第1条（名称）　本会は日本中央アジア学会（JACAS: The Japan Association for Central Asian Studies）と称する。

第2条（目的）　本会は、中央アジアを対象とする諸分野の研究を推進し、普及するとともに、研究上の連携を図ることを目的とする。ここで言う中央アジアとは、旧ソ連領中央アジア諸国と中国新疆ウイグル自治区を中心とし、その周辺地域を含むものとする。

第3条（事業）　本会は前記の目的を達成するため、次の事業を行う。

1. 研究および研究発表のための会合の開催
2. 会誌の発行
3. ウェブサイトの公開・運用
4. その他の必要な事業

第4条（会員）　本会の会員については以下の通りとする。

1. 中央アジア研究に関心をもつ個人で、本会の主旨に賛同する者。
2. 入会に際しては、原則として会員1名の推薦を必要とする。
3. 会員は、所定の会費を納入しなければならない。

第5条（役員）　本会は、会員の中から以下の役員をおく。役員の任期は4年とする。ただし、再任を妨げない。

1. 会長　1名
2. 理事　10名程度
3. 監事　2名

理事10名は会員の投票によって選出される。会長は投票によって選ばれた理事の中から互選される。また、理事会は本会の運営の必要に応じて、会員の投票によらない理事を若干名指名することができる。監事は理事会が指名する。いずれの役員も総会で承認を受けるものとする。

第6条（事務局）　本会の会務遂行のため、会長は若干名の担当者を選任して事務局を構成する。

第7条（総会）　原則として年1回、総会を開催する。

第8条（編集委員会）　会誌の編集・発行のため、本会に編集委員会を置く。編集委員会は、編集委員若干名により構成される。編集委員のうち1名を編集委員長とする。編集委員の任期は本会役員と同一とする。また、編集委員長は編集幹事を選任することができる。

第9条（会則変更）　本会則の改正は、総会において承認を経なければならない。

付則 1 (1) 本会則は2004年4月1日から施行する。

(2) 会費は当面、年間3,000円（学生1,000円）とする。

付則 2（2010年 3月 29日改正）

(1) 第 8条（編集委員会）の規定については、2010年 4月 1日から施行する（2019年 3月 23日一部改正）。

付則 3（2019年 3月 23日改正）

(1) 第 5条（役員）の規定のうち役員選出方法については、2020年 4月 1日に就任する役員の選出から施行する。

※ 2010年 3月 29日改正
2012年 3月 31日一部改正
2019年 3月 23日改正

日本中央アジア学会　役員（2022年7月31日現在）

会長　宇山智彦

理事　小沼孝博　帯谷知可　河原弥生　坂井弘紀
　　塩谷哲史　新免康　クアニシ・タスタンベコワ
　　野田仁　樋渡雅人　湯浅剛

監事　秋山徹　吉田世津子

日本中央アジア学会　編集委員会

秋山徹　小沼孝博　菊田悠　帯谷知可（委員長）
坂井弘紀　クアニシ・タスタンベコワ　野田仁
樋渡雅人　湯浅剛

『日本中央アジア学会報』編集幹事

磯貝真澄

日本中央アジア学会報　第18号

2022年7月31日発行

編集・発行　日本中央アジア学会

〒060-0809
札幌市北区北９条西７丁目
北海道大学スラブ･ユーラシア研究センター
宇山智彦研究室内

E-mail: jacasoffice@gmail.com

URL: http://www.jacas.jp/

©2022 JACAS